様々な「作品の表紙」と「関連の図形」の一覧表

最新版
（2018年版）

如月翔悟（paidon）

五　七　五　で　描　く

「動　植　物」た　ち

完　全　版

如　月　翔　悟　著

「象徴の森」

（「一般詩、動物詩、十四行詩」）

鮭と飛魚

今、将に暗雲の広がりゆく空の下、
逆巻き荒れ狂う波濤の波間より
遙か大空へと飛躍せんとす
その飛魚のごとき者よ！
たとえそれが極難の夢であろうとも
海中で眠ることなく、自らの力で挑み、
新たなる世界へ飛び翔ようではないか！
――激流のなか、
産卵を終えた鮭の身が

鷲

天空へと遙かに聳え立ったその断崖に、
巣を置き据ゑ、光陰を重ね過しては、
眼上遙かに、亦、眼下遠く　果しなく
廣がりゆく大自然の息吹の中に飛び立ち
上空から
雷光（霆）の如くに
急降下しながら……
空に、
海に、
陸に、

白鳥

森羅万象のその姿を朧に映し出す
深く透き徹る湖水の面にも似て、
地の底を映す鏡に魅入らるる時から、
人は深い哀しみを知るだらう……

寄せる　漣、舞ふ木の葉しぐれ、
晩秋の眩暈、厳冬に沈み入る頃、
顫へて眠れえぬ　吹雪の夜の
凍る湖に　跨る白鳥、古巣を　懐しみ、

つばめ

真っ赤な夕焼け空には、
あちらこちらにつばめのシルエット
そんなたそがれ時でした……
速いな！
ほら、もう虫をくわえてるよ！
でも、どこから来たんだろうね。
こんな夕ぐれ時に……
速いな！
ほら、また虫をつかまえたよ！
でもどこに帰るんだろうね。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

夢　と　ロ　マ　ン　を

求　め　て

決　定　版

如　月　翔　悟　著

「恋愛」と「売春」

（恋愛、良き伴侶、売春の起源）

例えば、プラトンの『饗宴』という著作のなかでアリストパネスという登場人物が、いわゆる「恋（エロス）」について非常に有名な話（演説）をする箇所があり、それは、もともと人間は三種類あった。こんにちの男女二種類のみでなく、第三の者がその上に存在していた。つまり、『アンドロギュノス』（男女）というのが一種をなしていて、

例えば、よく「一目惚れ」というものを経験することがあるかと思うが、それは、一体、どういうものかと言えば、それは、ある日、ある時、ある場所で、まったく思いがけないような感じでばったりとめぐり逢った相手を見た時に、その人は、その一瞬、「アッ！」という感じの衝撃を受けると同時に、今までの「動きを奪われ」て、しばらく動けなくなるというものである。

この問題は、実に古くて新しい問題であるとともに、未だこれという「最終的な答え」が得られないままに、今日にまできているのではないかと思う。――そこで、「売春」について、考えてみたいと思うが、「売春」とは、一体、何なのか？　それを広辞苑で引いてみると、そこには、「……女子が報酬を得て男子に身を任せること」とある。その場合、

さて、「売春」の起源としては、人類の歴史とともに極めて古くから行なわれてきたものであるが、その「売春」というもの（その仕組み）が成立するためには、どうしても富めるものと貧しいものとが、その社会に発生することがその大前提になるかと思う。というのも、貨幣もなく、すべての人たちが同じような経済レベルで共同で生活していたような時には、いわゆる「売春」

決　定　版

如　月　翔　悟　著

スランプ・プラトニック・ラブ
笑い・友情・自信・漫画の魅力

例えば、晩年のゲーテも、「……偉大なものは、ひたむきで、純真で、夢遊病者のような創造力によってのみ産み出されるものである。」（『ゲーテとの対話』下）という言葉を残しているが、この言葉なども、まさに超「自我」の状態からこそ、真にすぐれたものが生み出されるということを表現しているものである。……

それは、ふだんの様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然とした「自我」から離れて、より密度の高いそれだけ自分自身になりきっている「純粋自己」の状態になっているような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは、生じやすくなり、何か自分の「力」（力量）以上の真に優れた「芸術作品」

昔は、よく『プラトニック・ラブ』という言葉が、若い人たちの間では好んで使われたりしたものだが、今日ではほとんど「死語」と化しているのではないかと思う。それというのも、今日の「考え方」では、男女間の「恋愛」を根底からなり立たせているものが、そもそも「リビドー」（性欲）であり、その「リビドー」（性

例えば、カラオケなどで、ある歌手の歌を身ぶりも歌い方も、それこそ、できるだけ本物そっくりに真似て（つまり、その人になりきって）、実際に歌を歌ってみると、その歌手の「心の動き」や「呼吸の仕方」、また、なぜ、ここはこういう顔の表情や声の出し方、或いは身振りになるのかが　わが身に感じて、実感として理

例えば、「友情」とは、何かと問えば、それは、お互いの「信頼関係」からなり立っているものである。それゆえ、「友情」というのは本来、「精神的な結びつき」であり、いわゆる「利害や損得あるいは性的関係」などで結びついているものではないということである。そして、そのお互いの「信頼関係」が崩れてしまえば、当然のことながら、お

例えば、「自信」というのは、その人の「心の中」に、その人にとって「自信」となり得るに必要な量の「確かな手応えと実績」とが降り積もることによってこそ、初めて、いわゆる「自信」というものを持つことができ得るようになるということである。これが、最も「根底的な自信」になるということである。もちろん、それに加えて、他人か

決　定　版

如　月　翔　悟　著

古池や、なぜ、孤独を愛するのか、西行について

それでは、いわゆる「古池や　蛙飛びこむ　水の音」という俳句の、一体、どこがどのように優れているのかという問題であるが、それは、次のようになるかと思う。つまり、長く閑寂とした状態であったであろう「古池」の「水面」に、突然、その長い閑寂をうち破る「出来事」が起きたということである。それは、

さて、一般に、「蝉がチィーかジージーかは知らないが、とにかく、あちこちで鳴き騒いでいるのだから、閑かどころか、うるさくてしようがないだろう」と、疑問を抱く人も多いかも知れない。それでは、なぜ芭蕉は、「閑かだなあ！」と言ったのだろうか？　それは、どこからも人間の「声」が聞こえてこない、あるいは

例えば、われわれ人間は、一方では、人間（或いは俗世間）との関わりを強く望みながらも、もう一方では、なぜか一人（或いは孤独）になりたいという欲求があるわけである。それでは、なぜ一人（或いは孤独）になりたいと思うのかと言えば、それは、言うまでもなく、人間（或いは俗世間）との関わりのなかで、いろいろ煩わしいことやいやなことなどがあった時に、一時的にのがれたいという欲求と、もう一つは、誰にも邪魔されない「自分だけの時間」を持ちたいという欲求からになるのだろう。そして、前者は、どちらかと言えば、消極的な「孤独」であるのに対して、後者は、どちらかと言えば、むしろ目的を持った積極的な「孤

例えば、喜海という人の『明恵上人伝記』という著作のなかで、彼は、ある日、西行が自分の歌について、明恵に次のように語っていたのを、そばで聞いたことがあったという。それは、つまり、「……我歌を読むは、遙かに尋常に異なり。華、郭公、月、雪、都て万物の興に向ひても、凡そ所有相皆是虚妄なる事、眼に遮り耳に満てり。又読み出す所の言句は、皆是真言に非ずや。華を読めども、実に華と思ふ事なく、月を詠ずれども、実に月と思はず、只此の如くして縁に随ひ興に随ひ読み置く処なり。紅虹たなびけば、虚空色どれるに似たり。白日かゞやけば虚空明かなるに似たり。然れども虚空は本、明かなる物にも非ず、又色どれる物にも非ず。我又此の虚空の如くなる心の上におい

決定版

如月翔悟著

柿食へば、富嶽三十六景、辞世の句、西行の歌

柿食へば
鐘が鳴るなり
法隆寺

この「作品」は、明治二十八年、日清戦争に新聞記者として従軍し、その帰途、喀血(かっけつ)して神戸病院、須磨や故郷等を経て、東京へ帰ろうと大阪迄来た時、奈良で十月二十六日から三日間遊んだ時にできた句とされる。

さて、「柿食へば」の意味内容であるが、それは、まさに「柿を食べていたら、たまたま法隆寺の鐘が鳴った」ということ以外何も意味しないように思えるが、しかし、「作品」というのは、不思議なものであり、作者の「意図」（思惑）とはまた別に、「作品」それ自身は、自らの「生命」でまさに「一人(ひとり)歩き」を始めるものである。

富士山の「美」というのは、「富士山」そのものと、そのまわりの様々な「風景」（或いは「背景」）からなり立っているということであり、それを当時の「風景」（様々な庶民の生活や風俗その他）などとも一緒に実際に「絵」にして見せてくれているのが、まさに葛飾北斎の「富嶽(ふがく)三十六景」（プラス十景）になるかと思う。…

ちなみに、北斎という人は、まさに「かき魔」であり、とにかく、絵を描かずにはいられないような人であったとともに、その「絵」は、広重のような実景を重視するような「風景画」というよりは、むしろ北斎の「頭の中」（或いは「心の中」）で新たに創り出した（イメージ）した「絵」になっている場合が多いのだろう。

辞世の句（三句）

風さそふ花よりもなほわれ
はまた……
浅野内匠頭

願はくば花のしたにて春
死なん……
西行法師

つひにゆく道とはかねて聞
きしかど……
在原業平

西行（二句）

心なき身にも
あはれは知られけり
鴫(しぎ)たつ沢の
秋の夕ぐれ

風になびく
ふじのけぶりの
空にきえて
行方もしらぬ
わが思ひかな

決定版

如月翔悟著

超人、悪魔と神

修行、内的充実、悪

わたしは、あなたがたに超人を教えよう。人間は克服されなければならない或物なのだ。あなたがたは、人間を克服するために、何をしたというのか？

これまでの存在は、すべて、自分自身を乗り超える何物かを創造してきた。あなたがたは、この大きな上げ潮にさからう引き潮になろうとするのか、人間を克服するよりも、むしろ動物にひきかえそうとするのか？

動物　人間　超人

人間は、動物と超人との間に張りわたされた一本の綱なのだ。――深淵の上にかかる綱なのだ。

人間において偉大なところ、それは、かれは橋であって、自己目的ではないということだ。人間に

さて、「悪魔」というのは、まさに「悪」を本体としている存在であり、それゆえ、いわゆる「善」を本体としているような存在がいちばん嫌いであり、人間のなかでは、いわゆる「善」的な人間がもっとも気に入らないということになり、それらの対象に対して、実に様々な「悪さ」を仕掛けることになる。その一つが、いわゆる『誘惑』というものであり、例えば、『旧約聖書』のなかのアダムとイブは、

例えば、「修行」というのは、いったい何のために行なわれるのかと言えば、小乗仏教においては、いわゆる「悟り」を得んがためのものであるが、それでは、その「悟り」とは、一体、何かと問えば、それは、本来の「大空のような無色透明な心」を取り戻すということである。

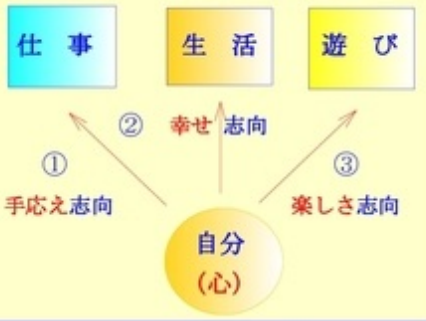
つまり、われわれ人間の「心」そのものは、本来は、「大空のような無色透明な心」であるが、俗世間のなかで日々あわただしく生活をして

決定版

如月翔悟著

「三つの充実」と「人間の三大欲」

「三つの充実」



人間の様々な「感情」

例えば、快・不快、怒り、恐れ、嫌悪、嫉妬、驚き、喜怒哀楽、愛情、苦しみ、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他の、実に様々な「感情」がある。

動物の「三大欲」（人間も含む）

①食欲 ―― ②性欲 ―― ③睡眠欲

- 子孫欲
- セックス欲
- 愛情欲

主に「大脳辺縁系」（古い皮質）

「三つの充実」とは何か？

一、仕事を充実させる。（社会的な活動）

一、生活を充実させる。（主に家庭《家族》生活）

一、遊びを充実させる。（趣味や娯楽やレジャーなど）

人間の様々な「欲」

例えば、食欲、性欲、物欲、金銭欲、所有欲、独占欲、支配欲、出世欲、社会的地位欲、名誉欲、その他、実に様々な「欲」（欲求）があるかと思う。

人間の「三大欲」

①食欲 ―― ②性欲 ―― ③物欲（金銭欲）

- 子孫欲
- セックス欲
- 愛情欲

主に「大脳皮質」（特に「前頭前野」）

「三つの充実」、「欲」と「情」、人間の「三大欲」について

この上に →

＋

決　定　版

如　月　翔　悟　著

恐怖と勇気、ソクラテス賛美
「脳の発達」と「心の発達」との関係

まず、われわれ人間の「心の中」に「恐怖心」が生じて来るのは、本来、「自己防衛的な働き」であり、一方、その「恐怖心」を何とか克服して、何らかの「行動（言動）」を行なおうとするためには、どうしても「勇気」というものが必要になって来るということである。それでは、その「勇気」とは、一体、何なのか？

それは、その人の「心の中」に生じてきた「恐怖心」と闘って、何とかそれを克服しようとする「心の働き」であり、それは、極めて「意志的なもの」になるわけである。つまり、「恐怖心」が、より「本能的なもの」であるのに対して、「勇気」とは、より「意志的なもの」になるということである。

例えば、高所恐怖症の人

「……諸君、僕はソクラテスの賞賛（しょうさん）を、こういう仕方でやってみようと思うのだ。それは、比喩（ひゆ）による方法である。だが、この人は、自分をもの笑いのたねにするためだととるにちがいないが、じっさいは、真実のためであって、笑うためのものではないのだ」と。つまり、真の「ソクラテス像」をぜひとも書いておきたか

プラトンは、アルキビアデスに、「ソクラテス賞賛」の演説をさせる前に、わざわざ次のような言葉を言わせている。それは、「…もしぼくが、ほんとうでないことを何か言ったら、いやでなければ、話の途中で、ぼくをひき止めてもらいたい。そして、ぼくの言うのは嘘（うそ）だと言ってほしいのだ。ぼくには、わざと嘘を言うつ

人間の「脳」は、他の動物たちとは違って、いわば「未完成の状態」で生まれて来る。それゆえ、その赤ん坊をどのような「環境」に置くかによって、その赤ん坊の「脳の発達」（「神経細胞の回路網（ネットワーク）」）は、どのようにも形成させることができ得る可能性が残されている。――一方、動物たちの「脳」は、そのシナプス結合がほぼでき上がった状

これは、音楽や習い事あるいはスポーツなどに限ったことではなく、われわれ人間の「脳」というものが、前述のように一〇歳ぐらいまでにその基本的な「神経細胞の回路網（ネットワーク）」ができ上がるとするならば、幼い頃からあることを徹底的に行なうようにすれば、その子供は、まさにそれ用の「脳と体」を持った「スペシャリスト」に育て上げる

決　定　版

如　月　翔　悟　著

「希望」
と
「韓国ドラマ」

希望

例えば、パンドラの箱を開けて、最後に残ったものは、まさに「希望」であったが、その「希望」さえあれば、われわれは、まだ十分に生きていける。しかし、その「希望」さえも絶たれてしまうと、それは、まさに「絶望」へと堕ちていくしかない。しかし、われわれは、たとえ「絶望」へと堕ちても、いわゆる完全なる「絶望」ということはあり得ない。なぜなら、何らかの「希望」を抱かずに、われわれ人間は、一時たりとも生きてはいられないからである。それは、例えば、今、まさに死んでいくような人でさえ、何らかの「希望」を抱いているものである。それは、なぜなのか？　それは、われわれ生命体は、絶えず生きようとしている。そのように「絶えず生きようとしている生命体」は、たとえいかなる「状況・状態」におかれ

韓国ドラマ

例えば、われわれは、ふだんテレビを見聞きしている時に、何か「不快に思うような場面や言動など」に出っくわすと、もちろん、そのままその番組を見続ける場合もあるだろうが、一方、ほかに何かやっていないかと、チャンネルを切り換えてしまうような場合もあるかと思う。つまり、視聴している人たちにとって、いわゆる「面白いものや心惹かれるようなもの」であれば、積極的に見聞きしようとするが、一方、なにか「不快やつまらないなあと思うような場面や言動」などに対しては、むしろ「拒絶反応を示すような傾向」があるという、そういう「大原則」があるということである。

そのようなことを踏まえて、韓国ドラマを見聞きすると、韓国ドラマというのは、実に「ほどよく抑制が利いた言動になっている」

決　定　版

如　月　翔　悟　著

なぜ、刃傷事件は起きたのか
精神の自立について、徒然草の最終段

時は、元禄十四年三月十四日の午前十一時頃、松の廊下で刃傷に及んだ浅野内匠頭は、その後、田村家に預けられ、その日の午後六時過ぎにはすでに切腹をしている。その時の辞世の句、

風さそふ
花よりもなほ
われはまた
春の名残を
いかにとかせん

その瞬間、「魔がさす」とは、その人の「知性や理性」の支配よりも、その時の「欲望や感情」のほうが勝って、つい「そういう行為」に移ってしまったということである。つまり、浅野内匠頭の「理知的部分」（知性や理性）は、できるだけ問題を起こさず、すべてが無事に終わることをひたすら願っていたにもかかわらず、も

戦後、なぜ、このような「社会状況」になってしまったのか？　この問題を徹底して考えるためには、やはりどうしてもあの「敗戦」まで遡らなければならない。なぜなら、この前の大戦で、われわれ日本人が「戦争」に負けたというのは、ただ単にアメリカとの「戦争」に負けたというような、そういう単純な問題では決

確かに、われわれ人間の精神的「背骨」となるものは、その人が「生まれ育った環境」（それは「家庭・学校教育・社会・民族・国家」）などの影響を「大元（根っこ）」としながらも、それだけでは、不十分であり、それに加えて、自らの努力により、いわゆる「内的成長」することによって、最終的には、「心の自由」を獲

ところで、徒然草の「最終段」は、なぜ、八歳の時の想い出話になっているのか？　それが昔から一つの問題になっているそうなので、この問題についても、ごく簡単にふれておきたいと思う。

つまり、「……八になりし年、父に問ひて言はく、『仏は如何なるものにか候ふらん』といふ。父が言はく、『仏には人のなりたるなり』と。

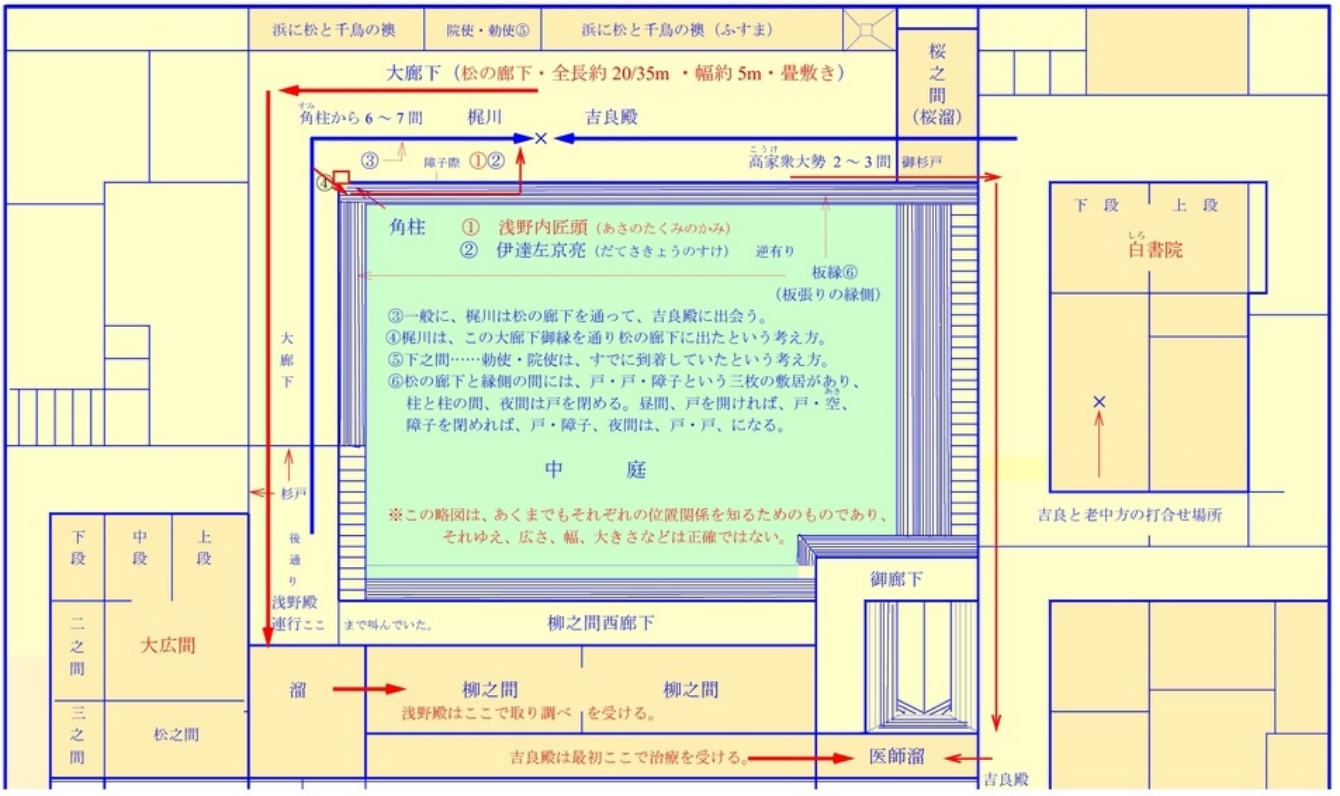
さて、兼好法師は、なぜ、このような「内容」で最後を締め括ったのかと問えば、それは、次のようなことである。

つまり、なぜ、自分は、「出家」をし、そして、このような『徒然草』を書くようになったのか？　そのことを自分自身に問うてみれば、その「原点」は、まさにあの「八歳の時の、あの問いかけの中」に、すでにその「芽ばえ」は、あ

決定版

如月翔悟著

なぜ、刃傷事件は起きたのか、精神の自立について、徒然草の最終段　　如月翔悟著



辞世の句
（浅野内匠頭・西行・在原業平）

浅野内匠頭

風さそふ
花よりもなほ
われはまた
春の名残を
いかにとかせん

例えば、殿中で事件を起こした浅野内匠頭は、いわゆる「風さそふ花よりもなほ われはまた春のなごりをいかにとやせん」という有名な「辞世の句」を遺し、（その真偽はともかく）、切腹をして無念の死を遂げる結果になってしまったわけである。それゆえ、浅野内匠頭にしてみれば、どうしてもまだ「死ぬに死にきれない

西行

願はくは
花の下にて
春死なん
そのきさらぎの
望月のころ

次に、西行には、「願はくは、花の下にて春死なん、そのきさらぎの望月のころ」という、非常に有名な歌があり、もちろん、この「歌」は、いわゆる「辞世の句」ではなく、恐らく、西行が六〇歳前後から中頃の「作品」ではないかと推測され、未だ定かではない状況であるが、しかし、人間は、いつ死ぬか誰にもよく分から

在原業平

つひにゆく
道とはかねて
聞きしかど
きのふけふとは
思はざりしを

最後に、『伊勢物語』の最終章（百二十五）は、「つひにゆく道」という題であり、それは、「……むかし、男、わずらひて、心地死ぬべくおぼえければ……」という「文章」のあとに、「つひにゆく道とはかねて聞きしかど、きのふけふとは思はざりしを」という、非常に有名な歌で終わっているわけだが、この「歌」は、まさに死に臨んで

決定版

如月翔悟著

愛着について
作者と作品、芸術鑑賞

例えば、ある人が、昔であれば、蓄音機などで、その人の好きな「音楽」を何度も何度も徹底的に聴いたとすれば、その人の好きなその「音楽」の「原音」は、まさにその蓄音機から醸し出される特有の「音」であり、そして、われわれ人間が、ほんとうの意味で「愛着」を持つのは、まさにその「原音」なのである。

慣れ親しんだもの
慣れ親しんでいるもの
＋
（その中）で特に気に入っているもの、楽しい想い出や懐かしい想い出につながるもの

作　者（思惟内容）

心の中（「思惟界」）

その人の
「考えや想い」
＋
漠然としたもの

＝

作　品

人工物（作品）

その人の「考えや想い」＋「漠然としたもの」にぴったりと合ったもの

ができ上がれば、それが「完成」の状態。

例えば、自分の「心の中」に内在する様々な「考えや想い＋漠然としたもの」と、その出来上がった「作品」とがぴったりと一つに重なり合えば、それが、まさに「完成」の状態であるが、それが少しでも「ズレ」ていれば、その「作品」は、その作者にとっては真の「完成品」とはならず、それゆえ、そのことがいつも「頭の中」（或いは「心の中」）に残っていて、この「部分」さえできれば、すべて完成なのに、と、その作者をしていつまでも悩まし続けることになるかと思う。

それでは、「作者」と「作品」との関係は、一体、どういうものかと問えば、それは、まさに「親」と「子」との関係である。つまり、母親は、自分の「胎内」で次第に「熟してきたもの」を外に「生み

決　定　版

如　月　翔　悟　著

「言葉」と「読書」

（「言葉」とは？「読書」とは？）

言葉について　Ⅰ

乱れた言葉を
平気でどんどん使える
その心が、すでに乱れている。
荒廃した言葉を
平気でどんどん使える
その心が、すでに荒廃している。

姿（すがた）より
肉声こそは
その人なり

読書について　Ⅰ

みなさんは、
本の読み方を学ぶには、
どんなに時間と労力がかかるか
を御存知ない。
私は、そのために八十年を費や
したよ。
しかし、まだ今でも目的に到達
しているとは言えないな。
（ゲーテとの対話）

読書について　Ⅱ

古今東西を問わず、世に存在
する膨大な量の「書籍」の中（なか）
から、どのような「書物」と
めぐり逢い、その「書物」と
どのように関わり、そして、
どのような影響を受けるかは、
時として、その人にとって、
「運命的な出逢い」ともなり
得るものである。それは、特
に若い時にこそ、起こり得るこ

言葉について　Ⅱ

言葉などは
いかようにも使用できる。
人は平気でうそを言うではな
いか！
でたらめなことを
平気で並べ立てるではない
か！
言葉ほど
あてにならぬものはない。
言葉など、どうして信じられ
ようか！

決　定　版

如　月　翔　悟　著

映像化時代

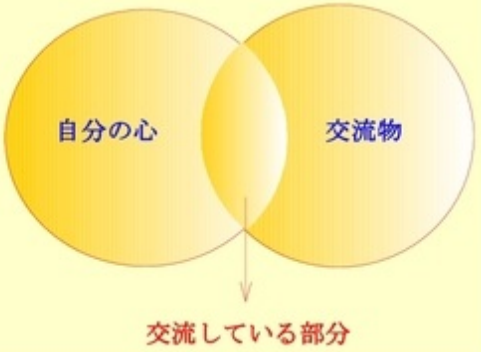
メディアの「新旧の違い」について	
従来のメディアの特徴	インターネットの特徴
新聞　雑誌　書物　テレビ　ラジオ　その他	ﾊﾟｿｺﾝ　ｹｰﾀｲ　ｽﾏﾎ　ﾀﾌﾞﾚｯﾄ　ﾂｲｯﾀｰ　ﾌｪｲｽﾌﾞｯｸ
①　国内的な規模である。（ローカル）	①　世界的な規模である。（グローバル）
②　情報の伝達がテレビ・ラジオ以外は、あまりに遅い。	②　情報の伝達は一瞬で伝わる。
③　人々の参加は限定的である。	③　すべての人が参加できる。
④　内容は、限られたものである。	④　内容は、ありとあらゆるもの。
⑤　情報の伝達は、一方的である。	⑤　情報の伝達は、双方性がある。
⑥　伝達後、内容の変更はできにくい。	⑥　内容の変更は、随時可能である。
⑦　メディアが「主」で、受け身的。	⑦　自分が「主」であり、能動的。
⑧　実名が、原則である。	⑧　匿名も許されることが多い。
⑨　制作に多くの人が関わっている。	⑨　制作は、個人でも可能である。
⑩　特定の場所から発信される。	⑩　あらゆる場所から発信される。
⑪　時間の制限を受けやすい。	⑪　２４時間すべてフリーである。
⑫　知りたい情報がすぐに得にくい。	⑫　知りたい情報は、すぐに得られる。
⑬　内容は、チェックを受けている。	⑬　内容は、普通チェックを受けない。
⑭　情報の正確さは、重視されている。	⑭　情報の正確さは、不確かである。
⑮　その他、等々。	⑮　その他、等々。
従来型の「メディア」の良さは、何と言っても、「情報の正確さ」ということであり、必ず裏を取り、うそや曖昧なもの或いはでたらめな情報などは、原則として、すべて排除されているということである。	ほんとうのこともうそのこともまた曖昧なものもでたらめなものも、その他、もうありとあらゆるものがあり、それゆえ、その「情報」のどこまでが信用できるかが、最大の問題になるということである。

（如月翔悟著）

交　流　欲　Ⅰ

（心は、いつも「何か交流できるもの」を求めている。）

「自分の心」と「交流物」



①　人間と人間との交流

まず、われわれ人間の「交流欲」を幾つかに大別してみると、一つは、「人間と人間界との交流」（人間と人間との交流、人間と社会との交流、人間と人工物との交流）、次は、「人間と動植物界との交流」（人間と動物の交流、人間と植物との交流、人間と古生物との交流）、そして、もう一つは、「人間と自然界との交流」（人間と自然との交流、人間と自然物との交流、人間と宇宙との交流、その他）になるかと思う。

②　人間と社会との交流

例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療（保健）、農業、林業、漁業、水産養殖業、鉱業、建設業、製造業（工業）、卸売・小売業、金融・保険業、運輸・通信業、不動産業、電気・ガス・水道・熱供給業、サービス業、公務、また、趣味、娯楽、生活、賭事（ギャンブル）、遊び、犯罪（事件）、事故、その他、実に多種多様な活動や出来事に満ちあふれている。

③　人間と人工物との交流

この世にはもう実に膨大かつ多種多様な「人工物」に満ちあふれているかと思う。例えば、衣服類、下着類、履物類、家具（寝具）類、乗物類、交通網、また、様々な機械類、建築物、電化製品類、書籍類、おもちゃ・ゲーム類、バッグ・カバン類、時計・付属品（アクセサリー）類、化粧品類、運動用具類、美術品類、食料品類、その他、もうありとあらゆる人工物との「交流」である。

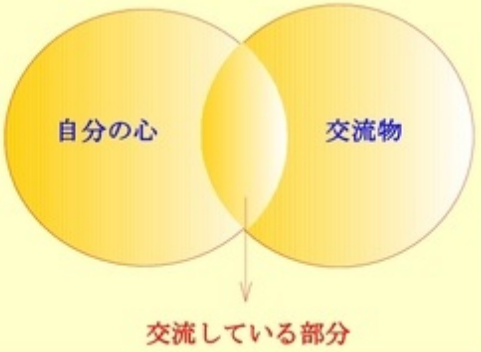
決　定　版

如　月　翔　悟　著

交　流　欲　Ⅱ

（人間と「動植物界」との交流）

「自分の心」と「交流物」



①　人間と動物との交流

さて、「交流欲Ⅱ」は、「人間と動植物界との交流」（それは、①人間と動物との交流、②人間と植物との交流、そして、③人間と古生物との交流、その他）に分類できるかと思うが、その中の、①「人間と動物との交流」というのは、大別すれば、「無脊椎動物」と「脊椎動物」（魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類、霊長類）との交流であり、その中でも、「愛玩動物」（ペット）やその他についての考察が主となる。

②　人間と植物との交流

次は、「人間と植物」との交流であるが、それは、一つには、自然のなかに生息している実に多種多様な「野生の植物」との交流があり、次に、われわれ人間の食料としての実に「様々な農作物」との交流があり、最後に、われわれ人間にとっては極めて親しい関係にある「園芸植物」との交流があるが、それらに加えて、植物にとっての「花とは何か？」についての考察である。

③　人間と古生物との交流

最後は、「人間と古生物との交流」であるが、それは、「……この地球上にかつて生息していた生物であり、今はもう死滅している生物であるとともに、それぞれの地質の中に『化石や痕跡』などとして残っているもの」である。つまり、「地球の誕生から始まり、原始の海に生命の誕生、原核細胞から真核細胞、そして、古生代、中生代、新生代」という「地質時代」である。

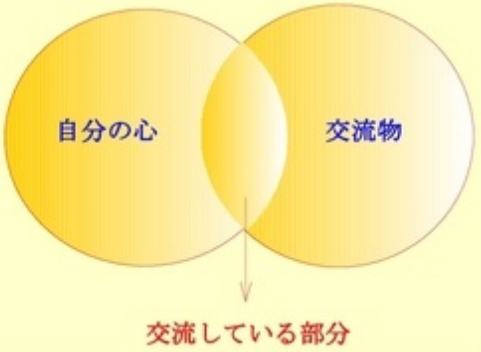
決　定　版

如　月　翔　悟　著

交　流　欲　Ⅲ

（人間と「自然界」との交流）

「自分の心」と「交流物」



①　人間と自然との交流

さて、「交流欲Ⅲ」は、「人間と自然界との交流」（それは、①人間と自然との交流、②人間と自然物との交流、そして、③人間と宇宙との交流、その他）に分類できるかと思うが、その中の、①「人間と自然との交流」というのは、地球全体の構造をはじめ、例えば、海や山、河川や湖沼（こしょう）、その他の様々な「地形」や「天候」（気象）、自然環境、その他、そういうものとの交流についての「基礎的考察」になっています。

②　人間と自然物との交流

次は、「人間と自然物」との交流であるが、例えば、土、水、空気、その他が「第一の自然物」であるとすれば、その「第一の自然物」から生じたものが、いわゆる「第二の自然物」である様々な「動植物」であり、そして、その様々な「動植物」のなかでも「知性や理性などを持った動物」へと進化したわれわれ人間が、いわば「第三の自然物」ということになるかと思う。

③　人間と宇宙との交流

最後は、「人間と宇宙との交流」（それは、①「人間と宇宙（天体）」との交流、②「人間と宇宙物質」との交流、そして、もう一つは、③「人間と地球外生命体」との交流）になるかと思うが、例えば、宇宙は、一体、どのように誕生したのか？　また、素粒子の世界とはどういうものなのか？　或いは、太陽系の誕生、その他、そのような「基礎的考察」になっています。

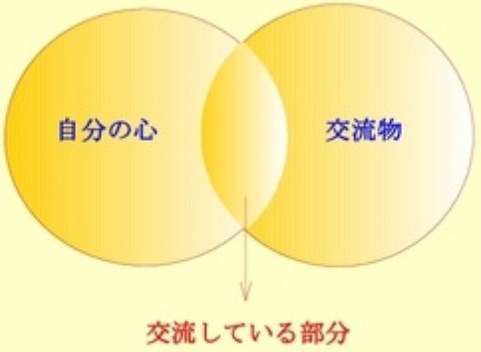
決　定　版

如　月　翔　悟　著

交　流　欲　（完全版ⅠⅡⅢ）

（心は、いつも「何か交流できるもの」を求めている。）

「自分の心」と「交流物」



①　人間と人間界との交流

「交流欲Ⅰ」は、「人間と人間界との交流」（それは、①人間と人間との交流、②人間と社会との交流、そして、③人間と人工物との交流）に分類できるが、①「人間」との交流では、そもそも「心」そのものは、一体、何を求めているかの考察であり、②「社会」との交流では、政治、経済、出来事、その他、様々な社会現象との交流、③「人工物」との交流では、そもそも「人工物」とは、一体、何かの考察になっている。

②　人間と動植物界との交流

「交流欲Ⅱ」は、「人間と動植物界との交流」（それは、①人間と動物との交流、②人間と植物との交流、そして、③人間と古生物との交流）に分類できるが、①「動物」との交流では、特に「愛玩動物」（ペット）について、②「植物」との交流では、特に「植物にとっての「花とは何か」について、そして、③「古生物」との交流では、いわゆる「地質時代」についての考察になっている。

③　人間と自然界との交流

「交流欲Ⅲ」は、「人間と自然界との交流」（それは、①人間と自然との交流、②人間と自然物との交流、そして、③人間と宇宙との交流）に分類できるが、①「自然」との交流では、地球全体の構造をはじめ、例えば、海や山、河川や湖沼（こしょう）、その他について、②「自然物」との交流では、土、水、空気、岩、石、砂、その他との交流、③「宇宙」との交流では、宇宙の誕生からの考察。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

ソクラテスに関する「四つの難題」

① ソクラテスと「デルポイの神託」

（「デルポイの神託」「没我的思考」「ダイモンからの合図」「産婆術」）

ソクラテスの若い時からの友人カイレポンという人が、それは、「……いつだったか、デルポイへ出かけていって、こういうことで神託を受けることをあえてしたのです。――それは、わたしよりもだれか知恵のある者がいるかどうかということを、たずねたのです。すると、そこの巫女は、より知恵のある者はだれもいないと答えたのです。

ソクラテスには、次の二つの本格的な「思考（思索）方法」があった。一つは、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を積み重ねては、物事の（特に人間の諸問題）の「真実、真理、その他」などを徹底的に探究するという方法と、もう一つは、逆に、他人から離れて、一人きりになり、いわば「没我的思考状態」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入るとい

「……わたしには、なにか神からの知らせとか、ダイモンからの合図とかいったようなものが、よくおこるのです。これは、わたしには、子供のときからはじまったもので、一種の声となってあらわれるのでして、それがあらわれるのは、いつでも、わたしが何かをしようとしているとき、それをさしとめるのでして、何かをなせとすすめることと

「……僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちっとも知恵のある者なんかではない。ところが、僕と一緒になる者、僕と交わりを結ぶ者はというと、驚くばかりの進歩をすることは疑いないのだ。……」（150c ～ D）

決　定　版

如　月　翔　悟　著

ソクラテスに関する「四つの難題」

② ソクラテスの「没我的思考」

（「デルポイの神託」「没我的思考」「ダイモンからの合図」「産婆術」）

ソクラテスの若い時からの友人カイレポンという人が、それは、「……いつだったか、デルポイへ出かけていって、こういうことで神託を受けることをあえてしたのです。――それは、わたしよりもだれか知恵のある者がいるかどうかということを、たずねたのです。すると、そこの巫女は、より知恵のある者はだれもいないと答えたのです。

「……わたしには、なにか神からの知らせとか、ダイモンからの合図とかいったようなものが、よくおこるのです。これは、わたしには、子供のときからはじまったもので、一種の声となってあらわれるのでして、それがあらわれるのは、いつでも、わたしが何かをしようとしているとき、それをさしとめるのでして、何かをなせとすすめることと

ソクラテスには、次の二つの本格的な「思考（思索）方法」があった。一つは、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を積み重ねては、物事の（特に人間の諸問題）の「真実、真理、その他」などを徹底的に探究するという方法と、もう一つは、逆に、他人から離れて、一人きりになり、いわば「没我的思考状態」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入るとい

「……僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちっとも知恵のある者なんかではない。ところが、僕と一緒になる者、僕と交わりを結ぶ者はというと、驚くばかりの進歩をすることは疑いないのだ。……」（150c ～ D）

決　定　版

如　月　翔　悟　著

ソクラテスに関する「四つの難題」

③ ソクラテスの「ダイモンからの合図」

（「デルポイの神託」「没我的思考」「ダイモンからの合図」「産婆術」）

ソクラテスの若い時からの友人カイレポンという人が、それは、「……いつだったか、デルポイへ出かけていって、こういうことで神託を受けることをあえてしたのです。――それは、わたしよりもだれか知恵のある者がいるかどうかということを、たずねたのです。すると、そこの巫女は、より知恵のある者はだれもいないと答えたのです。

ソクラテスには、次の二つの本格的な「思考（思索）方法」があった。一つは、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を積み重ねては、物事の（特に人間の諸問題）の「真実、真理、その他」などを徹底的に探究するという方法と、もう一つは、逆に、他人から離れて、一人きりになり、いわば「没我的思考状態」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入るという

「……わたしには、なにか神からの知らせとか、ダイモンからの合図とかいったようなものが、よくおこるのです。これは、わたしには、子供のときからはじまったもので、一種の声となってあらわれるのでして、それがあらわれるのは、いつでも、わたしが何かをしようとしているとき、それをさしとめるのでして、何かをなせとすすめることと

「……僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちっとも知恵のある者なんかではない。ところが、僕と一緒になる者、僕と交わりを結ぶ者はというと、驚くばかりの進歩をすることは疑いないのだ。……」（150c ～ D）

決　定　版

如　月　翔　悟　著

ソクラテスに関する「四つの難題」

④ ソクラテスの「産婆術」

（「デルポイの神託」「没我的思考」「ダイモンからの合図」「産婆術」）

ソクラテスの若い時からの友人カイレポンという人が、それは、「……いつだったか、デルポイへ出かけていって、こういうことで神託を受けることをあえてしたのです。――それは、わたしよりもだれか知恵のある者がいるかどうかということを、たずねたのです。すると、そこの巫女は、より知恵のある者はだれもいないと答えたのです。

「……わたしには、なにか神からの知らせとか、ダイモンからの合図とかいったようなものが、よくおこるのです。これは、わたしには、子供のときからはじまったもので、一種の声となってあらわれるのでして、それがあらわれるのは、いつでも、わたしが何かをしようとしているとき、それをさしとめるのでして、何かをなせとすすめることと

ソクラテスには、次の二つの本格的な「思考（思索）方法」があった。一つは、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を積み重ねては、物事の（特に人間の諸問題）の「真実、真理、その他」などを徹底的に探究するという方法と、もう一つは、逆に、他人から離れて、一人きりになり、いわば「没我的思考状態」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入るとい

「……僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちっとも知恵のある者なんかではない。ところが、僕と一緒になる者、僕と交わりを結ぶ者はというと、驚くばかりの進歩をすることは疑いないのだ。……」（150c ～ D）

決　定　版

如　月　翔　悟　著

ソクラテスに関する「四つの難題」

四つの難題の解明の旅

（「デルポイの神託」「没我的思考」「ダイモンからの合図」「産婆術」）

ソクラテスの若い時からの友人カイレポンという人が、それは、「……いつだったか、デルポイへ出かけていって、こういうことで神託を受けることをあえてしたのです。――それは、わたしよりもだれか知恵のある者がいるかどうかということを、たずねたのです。すると、そこの巫女は、より知恵のある者はだれもいないと答えたのです。

ソクラテスには、次の二つの本格的な「思考（思索）方法」があった。一つは、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を積み重ねては、物事の（特に人間の諸問題）の「真実、真理、その他」などを徹底的に探究するという方法と、もう一つは、逆に、他人から離れて、一人きりになり、いわば「没我的思考状態」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入るとい

「……わたしには、なにか神からの知らせとか、ダイモンからの合図とかいったようなものが、よくおこるのです。これは、わたしには、子供のときからはじまったもので、一種の声となってあらわれるのでして、それがあらわれるのは、いつでも、わたしが何かをしようとしているとき、それをさしとめるのでして、何かをなせとすすめることと

「……僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちっとも知恵のある者なんかではない。ところが、僕と一緒になる者、僕と交わりを結ぶ者はというと、驚くばかりの進歩をすることは疑いないのだ。……」（150c ～ D）

決　定　版

如　月　翔　悟　著

ソクラテスの世界

（「哲学遍歴」「知的遍歴」その他）

「哲学遍歴」

それは、まず、「デルポイの神託」によって、「……ソクラテスより知恵のあるものはだれもいない」ということを、友人のカイレポンから聞いた時から始まるわけである。

そして、それを聞いたソクラテスは、一体、何を神は言おうとしているのだろ

「知的遍歴」

晩年のソクラテスは、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる「広場」（市場）や街頭、その他、もういたるところで、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうことを、いわば毎日の「日課」のようにして過ごしていたわけである。

「知者」について

例えば、ソクラテスにとって、いわゆる「知者」というのは、一体、どういう人であったかと問えば、それは、すなわち、「美にして善なるもの」を知ってそれを行なう人のことであり、それは、次のような人のことである。

つまり、「……彼は智と思

「対話（吟味）活動」

例えば、ソクラテスは、政治家を初めとして、いろいろな作家、そして、手に技能を持つ手工者、その他、実にいろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうようになるが、ソクラテスは、それを「ヘラクレスの難行」のようなものだったと回想して

「国家」編の主題

例えば、『国家』編の主題は、果たして「正義」の方にあるのか、それとも「国家」の方にあるのかが、なぜか遠い昔（むかし）から議論の対象になっていたそうであるが、しかし、この問題は、それほど難しい問題ではないだろうと思う。

というのも、「正義」の問題というのは本来、ソクラテ

「正義と不正」

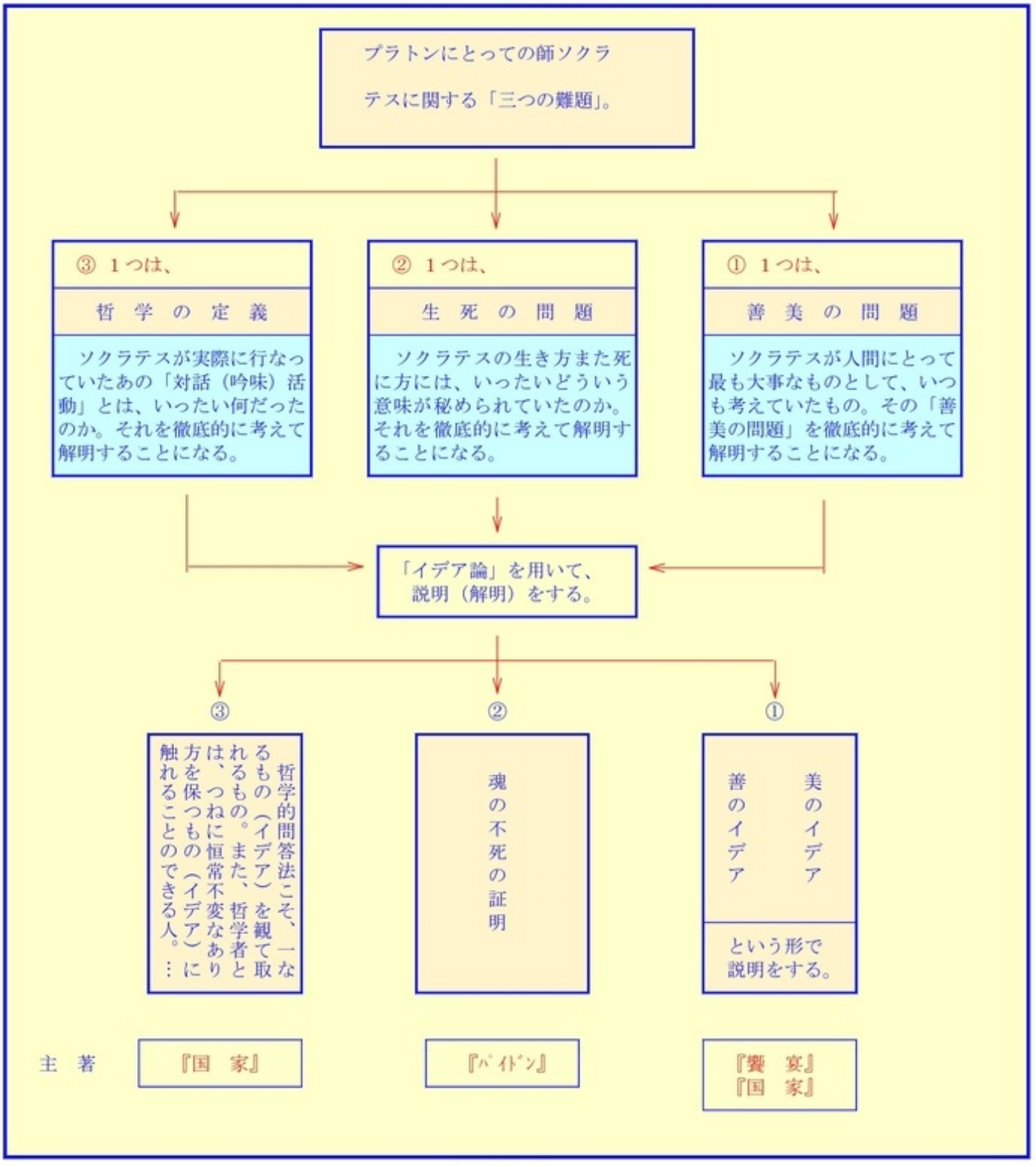
ところで、プラトンは、その『国家』編（第二巻）のなかで、「正義と不正」については、かなり徹底的な議論を行なっているので、その「問題」についてもできるだけ詳しく考えてみたいと思う。

まず、当時、一般的に考えられていた「正義」の起源については、次のように語って

決定版

如月翔悟著

ソクラテスの弁明　第七書簡　歴史上のソクラテス



如月翔悟著

プラトンの世界

（「無知の自覚」と「イデア論」）

自然から人間探究へ

若いソクラテスは、アナクサゴラスの書いた「自然哲学」の書物をかなり期待を持って読んでみたが、期待するようなものがまったく得られず失望し、それから彼らの「自然哲学」から離れて、いわゆる「ロゴス」（論理）の中に真理を見い出すようになったと「本文」にある。…

真の知者と愛知者

完全なる「知識」（「真知」）は、「神」のみが持ち得るのであり、われわれ人間は、たとえそれに限りなく近づくことができ得ても、まさに完全無欠なる「知識」をとらえることは、でき難い。だからこそ、ソクラテスは、真の「知者」は、「神」だけであり、一方、われわれ人間は、永遠の「愛知者」となるのである。

真知とイデア

例えば、正義とは何か、という問いに対しては、「正義そのもの」をとらえることが、すなわち、「真知」であり、それは、「美とは何か」、「善とは何か」、その他、すべて同じことになる。そして、ソクラテスが愛求した「真知」と「イデア界」の「イデア」とは、やがて一体化していく。

イデア論の完成

「……構築者（神）は、一方に、永遠にある『イデア界』をながめ、他方に、流動してやまない『形なきもの』（場・母胎）を見た時に、いわゆる『イデア界』のほうをモデルとして、絶えず流動してやまない『形なきもの』（場・母胎）に形を与えて、いわゆる『この世（全宇宙）』を創り出した」という、「考え方」へと昇華していく。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

ソクラテス
と
プラトンの世界

ソクラテスの弁明

まだ若い二十八歳のプラトンは、その「法廷」に居合わせて、彼の「全神経（全精神）」を傾けながら、「師ソクラテスの弁明の一部始終」を異常な関心を持って見守っただけではなく、その「弁明の内容」を何度も「心の中」に想い浮かべては、「反芻（吟味）」したことが最も大事な事件

第七書簡

要するに、〈正しい意味において真に哲学しているような部類の人たちが、政治的支配の地位につくか、それとも現に国々において政治的権力をもっているような部類の人たちが、真に哲学するようになるかの、いずれかが実現されないかぎりは、人間のもろもろの種族が、禍（わざわい）から免れることはあるまい〉と。

自然から人間探究へ

若いソクラテスは、アナクサゴラスの書いた「自然哲学」の書物をかなり期待を持って読んでみたが、期待するようなものがまったく得られず失望し、それから彼らの「自然哲学」から離れて、いわゆる「ロゴス」（論理）の中に真理を見い出すようになったと「本文」にある。…

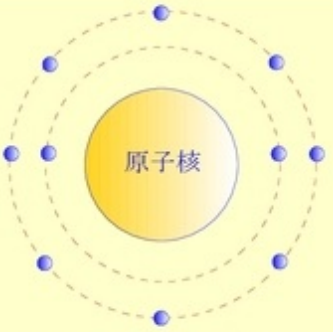
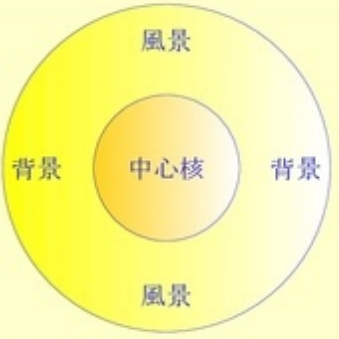
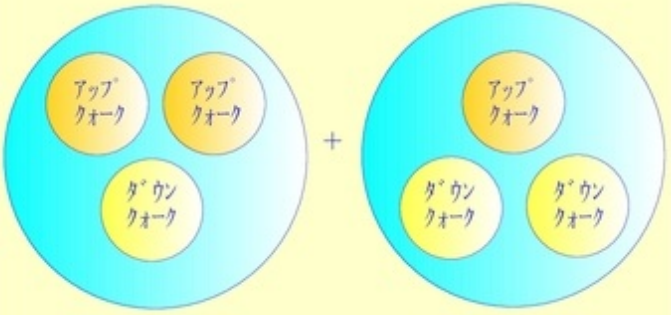
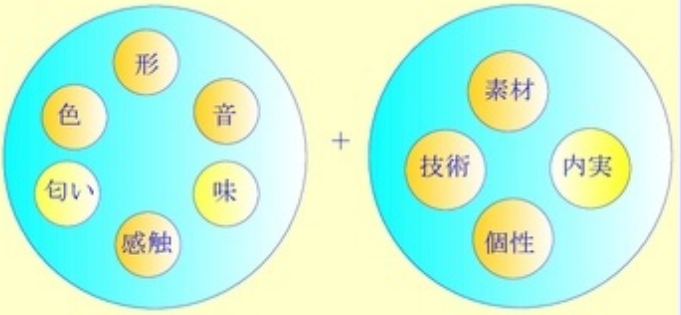
真知とイデア

例えば、正義とは何か、という問いに対しては、「正義そのもの」をとらえることが、すなわち、「真知」であり、それは、「美とは何か」、「善とは何か」、その他、すべて同じことになる。そして、ソクラテスが愛求した「真知」と「イデア界」の「イデア」とは、やがて一体化し、一つに重なり合うことになるのである。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

美について（如月翔悟著）

「物　質　の　世　界」	「美　の　世　界」
例えば、水は、水素（H）と酸素（O）の化合物である。そして、その「水素」や「酸素」は、いわゆる「原子」であり、その「元素」は、百十数種類存在することになる。それでは、「原子」は、一体、何からできているのかと問えば、それは、原子核とそのまわりをまわっている電子からなるものである。	例えば、美は、存在感である。美は、存在の充実感である。それゆえ、美は、存在そのものではなく、存在から受ける「感じ」であり、その感じが「美しい」ということである。それでは、美は、一体、何からできているのかと問えば、それは、美の「中心核」とそのまわりをとりまく何らかの風景（背景）からである。
 電子が 10 個のネオンの場合。	
それでは、「原子核」は、一体、何からできているのかと問えば、それは、まさに「陽子」＋「中性子」からなるものである。	それでは、美の「中心核」は、一体、何からできているのかと問えば、それは、いわゆる＜「感覚美」と「内容美」＞からなるものである。
原子核　＝　陽子　＋　中性子	美の「中心核」　＝　感覚美　＋　内容美
陽子　＋　中性子 	感覚美　＋　内容美 
陽子　＝　アップクォーク（2 個）＋ ダウンクォーク（1 個）	感覚美　＝　形＋色＋音＋匂い＋味＋感触
中性子　＝　アップクォーク（1 個）＋ ダウンクォーク（2 個）	内容美　＝　素材＋技術＋内実＋個性
さて、陽子は、非常に安定しているが、それが崩壊すると、「陽電子と中間子」（或いは「陽電子とニュートリノ」などに崩壊すると考えられている。が、未観測） 一方、中性子は、不安定であり、それゆえ、β（ベータ）崩壊によって、いわゆる＜「陽子」と「電子」それに「反ニュートリノ」＞に崩壊することになる。	さて、感覚美は、いったい何からできているのかと問えば、それは、「形、色、音、匂い、味、感触」の、この「六つの要素」からできているものである。 一方、内容美は、いったい何からできているのかと問えば、それは、「素材、技術、内実、そして、個性」の、この「四つの要素」からできているものである。
陽子 → 陽電子＋中間子 or 陽電子＋ニュートリノ	感覚美 → 形、色、音、匂い、味、感触。
中性子 → 陽子 ＋ 電子 ＋ 反ニュートリノ	内容美 → 素材、技術、内実、個性。
素粒子の間で働く力を「相互作用」という。	「美」をつくり出している「相互作用」。
1）重力相互作用 → 超大統一理論 2）電磁相互作用 3）弱い相互作用 → 大統一理論 → 超大統一理論 4）強い相互作用 → 大統一理論	1）素材相互作用 2）技術相互作用 3）内実相互作用 → 美 4）個性相互作用 → 美

シェイクスピアの世界　I

「ハムレット」と「ジュリアス・シーザー」

生きるべきか、
死ぬべきか、
それが問題だ。

To be, or not to be,
that is the question.

？

どちらが立派な
生き方なのか？

生きるべきか、
死ぬべきか、
それが問題だ。
暴虐な運命の矢玉を
心にじっと堪えるのと、
海と寄せくるもろもろの困難に
剣をとって立ち向い、
抵抗してこれを終熄させるのと、
どちらが立派な生き方か？

三月十五日にご用心！
ジュリアス・シーザー

ブルータス邸、空を飛ぶあの流星群、大変な明るさだ、これでは物でも読めそうだ。
シーザー邸、朝、「……昨夜は天も地も騒がしかった。妻が、眠ったまま、三度まで、『あっ、助けて下さい。シーザーが殺される』と叫んだ」と独り言を言う。
もしわたしが君たちであったら、哀願されて心の動くこともあろう。だが、わしは動かないぞ。ちょうどあの北斗星、断乎不動、厳として動かないことは、まことに全天その比を見ないあの北斗星のようにな。
ブルータス、お前もか？　是非もない。

八十七年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、すべての人は平等につくられているという信条に献じられた、新しい国家を、この大陸に打ち建てました。
現在われわれは一大国内戦争のさなかにあり、これによりこの国家が、あるいはまた、このような精神にはぐくまれ、このように献じられたあらゆる国家が、永続できるか否かの試練を受けているわけであります。（中略）
そして、人民の、人民による、人民のための、政治を地上から絶滅させないため、であります。　（「ゲティスバーグの演説」）

決　定　版

如　月　翔　悟　著

シェイクスピアの世界　Ⅱ

（「ロミオとジュリエット」）

さて、「仮面舞踏会」で、ロミオは、騎手に手をとられているジュリエットの姿を見た時に、「……ああ、なんて美しい女だ！あの美しさはもったいなくて手も触れられぬ、立派すぎてこの世のものとも思えぬ！　俺の心は今まで恋をしていたと言えようか？　俺は、今夜初めて本当に美しい女を見たのだ！」と、「一目惚れ」に深く落ちてしまう。

一方、ジュリエットの場合、ロミオは、巡礼の衣裳を身にまとい、顔には仮面を付けているので、いわゆるロミオのような「一目惚れ」とは少し違う。まず、手を握られ、その手に接吻される。それに加えて、二度までも唇に接吻されることによってこそ、まさに「恋に深く落ちてしまう」のである。（もちろん、見た目も当然よいわけだが…。）

さて、有名な月夜の「窓辺」の場面、その「窓辺の所」で、ジュリエットは、何やら独言を言い始める。それは、余りにも有名な「……おお、ロミオ、ロミオ！　どうしてあなたはロミオなのでしょう！　お父様とは無関係、自分の名は自分の名ではない、とおっしゃってください。それがいやなら、お前だけを愛していると誓ってください。

あっ、これは？　恋しい方の手に握りしめられた杯ではないのか？　では、毒薬で自分の命を断たれたのか！　ああ、意地悪なお方、みんな飲みほしてしまうなんて！　すこしは残すぐらいの親切さがあってもよさそうなものを！　さ、接吻を、もしかしたら、この唇にまだ毒薬がいくらか残っていて、私を死なせてくれるかもしれない。…

決　定　版

如　月　翔　悟　著

シェイクスピアの世界 ＩⅡ

（「ハムレット」＆「ロミオとジュリエット」）

生きるべきか、
死ぬべきか、
それが問題だ。

？

暴虐な運命の矢玉を
心にじっと堪えるのと、
海と寄せくるもろもろの困難に、
剣をとって立ち向い、抵抗して
これを終熄させるのと、どちら
が立派な生き方か？

シーザー邸、朝、「昨夜は天も地も騒がしかった。妻が、眠ったまま、三度まで、『あっ、助けて下さい。シーザーが殺される』と叫んだ」と独り言を言う。

もしわたしが君たちであったら、哀願されて心の動くこともあろう。だが、わしは動かないぞ。ちょうどあの北斗星、断乎不動、厳として動かないことは、まことに全天その比を見ないあの北斗星の

さて、「仮面舞踏会」で、ロミオは、騎手に手をとられているジュリエットの姿を見た時に、「……ああ、なんて美しい女だ！あの美しさはもったいなくて手も触れられぬ、立派すぎてこの世のものとも思えぬ！　俺の心は今まで恋をしていたと言えようか？　俺は、今夜初めて本当に美しい女を見たのだ！」と、「一目惚れ」に深く落ちてしまう。

さて、有名な月夜の「窓辺」の場面、その「窓辺の所」で、ジュリエットは、何やら独言を言い始める。それは、余りにも有名な「……おお、ロミオ、ロミオ！　どうしてあなたはロミオなのでしょう！　お父様とは無関係、自分の名は自分の名ではない、とおっしゃってください。それがいやなら、お前だけを愛していると誓ってください。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

「オイディプス王」
と
「雲」
（古代ギリシアの「悲劇と喜劇」）

まず、「デルポイの神託」によって、「……時の王ライオスは、やがて生まれる子供の手にかかって亡き者にされるべき運命にあることを、告げられる。……」。そこで、時の王ライオスは、「王妃」（イオカステ）に一子（男の子）が生まれると、すぐに「家来」の一人にその「赤子」を手渡して、キタイロンの山間（やまあい）深くに捨てるよう

まず、父親は、息子の「馬狂い」によって、多額の借金を抱え込んでいるとともに、その支払い期限が迫っていて、夜も眠れないという「心的状態」であり、何か「打開策」はないかとあれこれ思案しているうちに、ふとあることを思いつくことになるが、それは、息子を「ソクラテスの学校」（思案所）に入れるということ

有名なスフィンクスは、肉体は、「獅子」（ライオン）の姿（すがた）をし、背中には両翼（つばさ）を持ち、その顔は、人間の女性の顔をしていた怪物であったが、そのスフィンクスは、テバイ市付近の岩の上にいて、その道を通る人たちに「謎」をかけていたという。しかも、その「謎かけ」が解けなかった人たちは、その場でみな殺されて

「……あの人たちのところにはなあ、二種類の論があるという話だ。内容はともかく、強い論と弱い論だ。そしてこの両論のうち、弱い論の方が、不正を主張する立場なのだが、議論の上では勝つという話だ。だから、お前がこの不正の論を習って来てくれれば、今わしが背負わされている借金は、返さないでいいことに

「……最もすぐれた悲劇の物語構成（ミュートス）は、『単純』なそれではなく『複合的』でなければならず、それも『恐ろしく』また『いたましい』出来事を描写するものでなければならない。また、その人物の設定は、徳と正義において特別にすぐれているわけでもなく、しかしまた自分の悪徳や邪悪さなどで不幸になるのでもなくて、ある「過ち」のために

「……悲劇とは、われわれ自身よりすぐれた人物たちを描写するものであり、一方、喜劇とは、比較的劣悪な性格の人物の描写である」。そして、「喜劇」の場合、その「比較的劣悪な性格」こそは、まさに様々な「出来事」（お笑い）を生み出す、まさに「源泉」そのものであり、しかも「比較的」というのは、観ている人たちに「不快感や嫌悪感或

決　定　版

如　月　翔　悟　著

自分とは何か、小林秀雄と
ランボー、中原中也の思い出

われ思う
ゆえに我あり

デカルト

例えば、デカルトは、疑わしいものは、すべて疑ってみた結果、どうしても疑うことができないものとして、それは、「今、現にこうしてあれこれ疑っている自分だけは疑うことはできない」という、極めて有名な「方法的懐疑」のいわば究極の地点にまで到達することになるわけだ。それが、有名な「われ思う、ゆえにわれあり」という言葉であり、この言葉は、例えば、「自分とは何か」という問いに対して、自分（つまりわれ）とは、すなわち、ああでもないこうでもないと絶えず

僕が、はじめてランボオに、出くわしたのは、廿三歳の春であった。その時、僕は、神田をぶらぶら歩いていた、と書いてもよい。——僕は、数年の間、ランボオという事件の渦中にあった。当時、ボオドレエルの『悪の華』が、僕の心を一杯にしていた。その「球体のなか」に、僕は虫の様に閉じ込められていた。…

そういう時だ、ランボオが現れたのは。球体は砕けて散った。僕は出発する事が出来た。この「球体のなか」こそは、まさに「虚無の世界」（「精神衰弱」）であり、実に数多くの知識人たちを悩ましつづけている本体であり、精神は不安定でありながら、実に様々な物事の「本質、真実、真理、その他」などを観て取っている時期

晩春の暮方、二人は石に腰掛け、海棠の散るのを黙って見ていた。花びらは死んだ様な空気の中を、まっ直ぐに間断なく、落ちていた。樹蔭の地面は薄桃色にべっとりと染まっていた。あれは散るのじゃない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めているに違いない、何んという注意と努力、私はそんな事を

われわれ人間が外界の「対象を見る」場合には、どうしても「こちら側に自分がいて、向こう側に見る対象がある」という「相対的な関係」になりやすい。ところが、中原中也の「見方」は、それとはまったく違って、自分と対象とが「相対する」のではなく、むしろどこまでも対象の中に深く溶け込んでは、終には対象と「一体化」して、自ら「海棠

決定版

如月翔悟著

芥川龍之介の世界

（「羅生門、杜子春、蜘蛛の糸、藪の中」）

羅生門

或日の暮れ方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。広い門の下には、この男のほかに誰もゐない。（中略）、なぜかと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とか云ふ災がつづいて起つた。そこで洛中のさびれ方は一通りではな

杜子春

或春の日暮です。唐の都の洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がありました。若者は名は杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費ひ尽して、その日の暮しにも困る位、憐な身分になつてゐるのです。その杜子春は相変らず、門の壁に身を凭せ

蜘蛛の糸

或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへと溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございま

藪の中

あの死骸を見つけたのは、私に違ひございません。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死体があつたのでございます。死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつた儘、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの

決定版

如月翔悟著

自分とは何か
芥川龍之介の世界

自分とは何か

例えば、デカルトは、疑わしいものは、すべて疑ってみた結果、どうしても疑うことができないものとして、それは、「今、現にこうしてあれこれ疑っている自分だけは疑うことはできない」という、まさに有名な「われ思う、ゆえにわれあり」という哲学の第一原理

羅生門

或日の暮れ方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待ってゐた。広い門の下には、この男の他に誰もゐない。…雨風を凌いで、一晩寝られるところはと思っていたが、門の上へ出る梯子が眼にはいり、階段を二三段上ってみると、上では誰かが火をとぼして

小林秀雄とランボー

僕が、はじめてランボオに、出くわしたのは、廿三歳の春であった。当時、ボオドレエルの『悪の華』が、僕の心を一杯にしていて、その「球体のなか」に、虫の様に閉じ込められていた。…そういう時だ、ランボオが現れたのは。球体は砕けて散った。僕は出発する事

杜子春と蜘蛛の糸

夕暮、唐の都の洛陽の西の門の下、ぼんやり空を仰ゐでいる、一人の若者があり、名は杜子春と云ひ、元は金持の息子でした。……

或日のこと、御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りぶらぶら御歩きになり、やがて、蓮池の下の地獄で蠢く、健陀多と云ふ男がいる

中原中也の「思い出」

晩春の暮方、二人は石に腰掛け、海棠の散るのを黙って見ていた。花びらは死んだ様な空気の中を、まっ直ぐに間断なく、落ちていた。あれは散るのじゃない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めているに違いない、何んという注意と努力、私はそん

藪の中

あの死骸を見つけたのは、私に違ひございません。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死体があったのでございます。死骸は、仰向けに倒れて居り、何しろ一刀とは申すものの、胸元の突き傷でございます。太刀か何か見えなかったか？

決定版

如月翔悟著

「思索」の森

(「哲学的思考」の実践)

「夢」の定義

例えば、「夢」というのは、一体、何かと問えば、それは、一つの「目標」であり、その「目標」は、自分が向かって行きたい「方向」であるとともに、自分が辿り着きたい「地点」でもあるということである。そして、それを可能にしてくれるものは、一体、何かと問えば、

「希望」

例えば、パンドラの箱を開けて、最後に残ったものは、まさに「希望」であったが、その「希望」さえあれば、われわれは、まだ十分に生きていける。しかし、その「希望」さえも絶たれてしまうと、それは、まさに「絶望」へと堕ちていくしかない。しかし、われわ

「充実感」

例えば、われわれ人間というのは、ある目標(或いは「ある夢」)などに向かって、一生懸命に努力しているような時こそは、その人にとってはまさに最も「充実」している時を過ごしている時であるとともに、その「ある目標」なり「ある夢」などが達成された時に

「情熱」

例えば、「情熱」というのは、われわれ人間の「知・情・意・生理(本能)、その他」等、それらすべてをひっくるめて激しく燃え上がる「心的エネルギーの炎」であるが、それには、どちらかと言えば、「+」の方向に向かっていく、「一般的な情熱」と「意志的な情熱」

「成長」(脱皮)

例えば、自分というものを本当の意味で、真に「成長」させたいと「心の底」からそう願うならば、その「方法」は、一つしかない。それは、自分の「限界」で燃え尽きることである。ほかに「方法」はない。そして、その燃え尽きた「灰の中」から、新たな「生命」を授かり、再び、甦(よみがえ)

「死に場所」

例えば、『葉隠』という著作のなかに、「……武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」という余りにも有名な「言葉」があるが、この言葉を敢えて現代風にアレンジして考えてみると、それは、次のようになるかと思う。

まず、われわれ人間というのは、やがては死んでいく

決定版

如月翔悟著

刺青

高野聖　変身

さて、清吉という若い刺青師の腕利きがあった。

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込むことであった。彼の気分に適った味わいと調子の女性は容易に見つからなかった。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく過ぎようとしていた。

丁度四年目の夏のとある山また山という奥深い山を越えて、旅の僧は、名代の天生峠へと向かっていたが、その歩む山道では、夏の暑さと草いきれのなか、様々なヘビや雨が降るがごとき数多くの山蛭に、悩まされながらも、やがて、その峠には孤屋（一軒家）があり、そこには、白痴の少年と、ものやさしい婦人と、もう一人、親仁（下男）が

例えば、『変身』というカフカの有名な作品があるが、それは、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという話である。もちろん、そのようなことは、現実には起こりようのないことではあるが、しかし、自分の「姿・形」が、ある日、突然、いわゆる「変身」するというようなことは、現実にはいくらでもあ

しかも、その女性は、男性に従順に傅くような女性ではなく、むしろ男の生血で肥え太り、男のむくろを踏みつけるような、女の中の女を探し求めていたということである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、その光輝ある美女の肌に刺り込みたいと願った「絵柄」こそは、まさに「女郎蜘蛛」であったから

そして、月夜の下、旅僧が身を屈めて、川の水で二の腕を洗っていると、婦人は、「……すっぱり裸体になってお洗いなさいまし、私が流して上げましょう」といって、旅僧の着ているものを脱がせ、そして、背中の山蛭の傷を見て驚き、両方の肩から、背中、横腹、臀にさらさら水をかけては、手は綿のように優しくさす

あるがままの「生身の人間」というのは、自分でも自分がいつ何を言い出すか、また、何をしでかすかまったく分からないものである。このことは、徹底的に考えてみる必要があり、われわれは、どうしてもあの人は、ああいう人、自分はこういう人間と考えやすいものであるが、しかし、そういう固定化した存在では決してなく、むしろいつ何を

決定版

如月翔悟著

中島敦の「山月記」

（なぜ、李徴は「虎」へと変身したのか？）

中島敦の『山月記』という作品は、彼の作品の中では、最も有名な「作品」（短編小説）の一つであるが、それは、中国（清朝）の説話集『唐人説薈』の中にある『人虎伝』を元として書かれたものであり、その「内容」を一言で敢えて言えば、それは、まさに「人間が虎に変わってしまった」という、現実にはあり難い話でありながら、今日では、学校の教科書にも登場

さて、「……隴西の李徴は、博学才穎、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを 潔 しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略に帰臥し、人と 交 を絶って、ひたすら詩作に耽り、その名を死後百年に遺そうとした。だが、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなり、李徴は漸く焦躁に駆られて来た」とあ

「……数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節（考え）を変えて、再び東へ赴き、一地方官吏の職に就いた。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遥か高位に進み、彼が昔、鈍物として歯牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心を如何に傷つけたかは、想像に難くない。彼は快々

さて、「……何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との 交 を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。勿論、自尊心が無かったとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであ

決 定 版

如 月 翔 悟 著

中島敦の「名人伝」

（道の「極み」とはどういうものか?）

中島敦の「名人伝」であるが、それは、「……趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。己の師と頼むべき人物を物色するに、当今弓矢をとっては、名人・飛衛に及ぶ者があろうとは思われぬ。百歩を隔てて柳葉を射るに百発百中するという達人だそうである。紀昌は遙々飛衛をたずねてその門に入った」。

「……飛衛は新入の門人に、まず瞬きせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織台の下に潜り込んで、そこに仰向けにひっくり返り、眼とすれすれに機躡が忙しく往来するのをじっと瞬かず見詰めるという工夫をした。来る日も来る日もこの恰好で、瞬きせざる修練を重ね、二年の後には、遽だしく往返する牽挺が睫毛を掠めても、絶えて瞬かぬようになっ

次に、「……肌着の縫目から虱を一匹探し出して、これを己が髪の毛で繋ぎ、それを南向きの窓に懸け、終日睨み暮らすことにした。毎日毎日彼は窓にぶら下った虱を見詰めて、早くも三年の月日が流れた。ある日ふと気が付くと、窓の虱が馬のような大きさに見えていた。再び窓際の虱に立向い、弓を射れば、矢は見事に虱の心の臓を貫いた。

さて、師から学ぶべき何ものも無くなった時、彼の「心の中」にふとよからぬ考えが浮かんだ。それは、「……今や弓をもって己に敵すべき者は、師の飛衛をおいて他に無い。天下第一の名人となるためには、どうあっても飛衛を除かねばならぬ」と。そこで紀昌は、その機会を密かに狙っていると、「……向うからただ一人歩み来る飛衛に出遇った。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

中島敦の世界

山月記と名人伝

中島敦の『山月記』という作品は、彼の作品の中では、最も有名な「作品」（短編小説）の一つであるが、それは、中国（清朝）の説話集『唐人説薈』の中にある『人虎伝』を元として書かれたものであり、その「内容」を一言で敢えて言えば、それは、まさに「人間が虎に変わってしまった」という、現実にはあり難い話でありながら、今日では、学校の教科書にも登場して、高い人気を得ているものである。

さて、「……隴西の李徴は、博学才穎、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略に帰臥し、人と交を絶って、ひたすら詩作に耽り、その名を死後百年に遺そうとした。だが、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなり、李徴は漸く焦躁に駆られて来た」とあった。三年後、窓の虱が馬のような大きさに見え、その虱に弓を射れば、矢は虱の心の臓を貫いた」。

さて、師から学ぶべき何ものも無くなった時、彼の「心の中」にふとよからぬ考えが浮かんだ。それは、「……今や弓をもって己に敵すべき者は、師の飛衛をおいて他に無い。天下第一の名人となるためには、どうあっても飛衛を除かねばならぬ」と。そこで紀昌は、その機会を密かに狙っていると、

さて、次は『名人伝』であるが、それは、「……趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立て、遙々名人・飛衛を訪ねて、その門に入った」。「……飛衛は新入の門人に、まず瞬きせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織台の下に潜り込んで修行し、二年後、絶えて瞬かぬようになった。次に、虱を一匹己が髪の毛で繋ぎ、それを南向きの窓に懸け、終日睨み暮

決定版

如月翔悟 著

子供の遊び　Ⅰ

（第一部）

第一部

一、缶馬遊び
一、ジャンケン遊び
一、にらめっこ遊び
一、あっち向いてホイ
一、しりとり遊び
一、なぞなぞ遊び
一、絵かき遊び
一、相撲について
一、いす取り遊び

第二部

一、めんこ遊び
一、ビー玉遊び
一、独楽まわし
一、ベーゴマ遊び
一、凧揚げ遊び
一、石けり遊び
一、竹馬遊び
一、ゴム跳び遊び
一、駄菓子屋……

第三部

一、海での遊び
一、山での遊び
一、草花遊び
一、野球遊び
一、ドッジボール
一、なわ跳び遊び
一、かるた取り
一、将棋遊び
一、トランプ遊び

第四部

一、チョコレート遊び
一、風船遊び
一、シャボン玉遊び
一、自転車乗り
一、まりつき
一、お手玉遊び
一、祭りと縁日
一、運動会
一、動物獲り

決　定　版

如　月　翔　悟　著

子供の遊び　2

（第二部）

第一部

一、缶馬遊び
一、ジャンケン遊び
一、にらめっこ遊び
一、あっち向いてホイ
一、しりとり遊び
一、なぞなぞ遊び
一、絵かき遊び
一、相撲について
一、いす取り遊び

第二部

一、めんこ遊び
一、ビー玉遊び
一、ベーゴマ遊び
一、独楽まわし
一、凧揚げ遊び
一、石けり遊び
一、竹馬遊び
一、ゴム跳び遊び
一、駄菓子屋……

第三部

一、海での遊び
一、山での遊び
一、草花遊び
一、野球遊び
一、ドッジボール
一、なわ跳び遊び
一、かるた取り
一、将棋遊び
一、トランプ遊び

第四部

一、チョコレート遊び
一、風船遊び
一、シャボン玉遊び
一、自転車乗り
一、まりつき
一、お手玉遊び
一、祭りと縁日
一、運動会
一、動物獲り

決　定　版

如　月　翔　悟　著

子供の遊び　3

（第三部）

第一部

一、缶馬遊び
一、ジャンケン遊び
一、にらめっこ遊び
一、あっち向いてホイ
一、しりとり遊び
一、なぞなぞ遊び
一、絵かき遊び
一、相撲について
一、いす取り遊び

第二部

一、めんこ遊び
一、ビー玉遊び
一、独楽まわし
一、ベーゴマ遊び
一、凧揚げ遊び
一、石けり遊び
一、竹馬遊び
一、ゴム跳び遊び
一、駄菓子屋……

第三部

一、海での遊び
一、山での遊び
一、草花遊び
一、野球遊び
一、ドッジボール
一、なわ跳び遊び
一、かるた取り
一、将棋遊び
一、トランプ遊び

第四部

一、チョコレート遊び
一、風船遊び
一、シャボン玉遊び
一、自転車乗り
一、まりつき
一、お手玉遊び
一、祭りと縁日
一、運動会
一、動物獲り

決　定　版

如　月　翔　悟　著

子供の遊び　4

（第四部）

第一部

一、缶馬遊び
一、ジャンケン遊び
一、にらめっこ遊び
一、あっち向いてホイ
一、しりとり遊び
一、なぞなぞ遊び
一、絵かき遊び
一、相撲について
一、いす取り遊び

第二部

一、めんこ遊び
一、ビー玉遊び
一、独楽まわし
一、ベーゴマ遊び
一、凧揚げ遊び
一、石けり遊び
一、竹馬遊び
一、ゴム跳び遊び
一、駄菓子屋……

第三部

一、海での遊び
一、山での遊び
一、草花遊び
一、野球遊び
一、ドッジボール
一、なわ跳び遊び
一、かるた取り
一、将棋遊び
一、トランプ遊び

第四部

一、チョコレート遊び
一、風船遊び
一、シャボン玉遊び
一、自転車乗り
一、まりつき
一、お手玉遊び
一、祭りと縁日
一、運動会
一、動物獲り

決　定　版

如　月　翔　悟　著

子供の遊び

（完全版）

第一部

一、缶馬遊び
一、ジャンケン遊び
一、にらめっこ遊び
一、あっち向いてホイ
一、しりとり遊び
一、なぞなぞ遊び
一、絵かき遊び
一、相撲について
一、いす取り遊び

第二部

一、めんこ遊び
一、ビー玉遊び
一、独楽まわし
一、ベーゴマ遊び
一、凧揚げ遊び
一、石けり遊び
一、竹馬遊び
一、ゴム跳び遊び
一、駄菓子屋……

第三部

一、海での遊び
一、山での遊び
一、草花遊び
一、野球遊び
一、ドッジボール
一、なわ跳び遊び
一、かるた取り
一、将棋遊び
一、トランプ遊び

第四部

一、チョコレート遊び
一、風船遊び
一、シャボン玉遊び
一、自転車乗り
一、まりつき
一、お手玉遊び
一、祭りと縁日
一、運動会
一、動物獲り

決定版

如月翔悟 著

宮沢賢治の世界

注文の多い料理店と風の又三郎

二人の若い紳士と一人の専門の鉄砲打ちが二匹の猟犬を連れて山奥まで「狩り」に出かけるが、その山奥で道に迷ってしまい、やがて、鉄砲打ちはどこかにいなくなり、連れていた二匹の猟犬も、口から泡をふいて死んでしまう。その山奥で、二人の若い紳士は、現実とはまた違った、何か「奇妙で不思議な体験」をするのであった。……

さて、「風の又三郎」には、もう一つの『風野又三郎』という作品があるのを知っている人は、意外と少ないのではないかと思う。それは、一体、どういうことかと言えば、それは、最初、宮沢賢治は、まさに『風野又三郎』という作品を書き、そのあと、その「作品」に手を加えて、今日、われわれの誰もがよく知っている、いわゆる『風の又三郎』にしたということである。

谷川の岸に小さな学校がありました。教室はたった一つでしたが生徒は三年生がないだけで、あとは一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートくらいでしたが、すぐうしろは栗の木のあるきれいな草の山でしたし、運動場のすみにはごぼごぼつめたい水を噴く岩穴もあったのです。

さわやかな九月一日の朝でし

まず、「種山ヶ原」というのは、北上山地の真ん中の高原であり、春になると、北上の河谷のあちこちから、沢山の馬が連れて来られ、此の部落の人たちに預けられては、上の原に放たれるが、それも八月の末には、みんなめいめいの持主に戻されるのである。……

また、「さいかち淵」というのは、大きな「さいかちの木」のある「川の淵」（深い所）であり、広い河原にある「子供らの遊び場」

決　定　版

如　月　翔　悟　著

宮沢賢治の世界

銀河鉄道の夜

（「雨ニモ負ケズ」付）

例えば、宮沢賢治の有名な『銀河鉄道の夜』という作品は、非常に人気の高い「作品」でありながら、実に様々な「謎を秘めた」作品でもあり、それゆえ、容易には理解しにくい「内容」になっているかと思うが、敢えて、その「内容」の様々な「謎解き」の旅を、これから「本文」にできるだけ寄り添いながら進めていきたいと思う。……

「……ではみなさんは、そういうふうに川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか」と先生が訊くと、カムパネルラが手をあげました。それから四五人が手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、こ

銀河祭りの夜、丘の上で不思議な経験をする。それは、「……どこかで、ふしぎな声が、銀河ステーションと云う声がしたと思うと、いきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼をこすってしまいました。気がつくと、さっきから、ごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのでした。

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏の暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク　決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニワラッテヰル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシテワカリ
ソシテワスレズ

決　定　版

如　月　翔　悟　著

宮沢賢治の世界

完全版

（「注文の多い料理店」「風の又三郎」「銀河鉄道の夜」）

二人の若い紳士と一人の専門の鉄砲打ちが二匹の猟犬を連れて山奥まで「狩り」に出かけるが、その山奥で道に迷ってしまい、やがて、鉄砲打ちはどこかにいなくなり、連れていた二匹の猟犬も、口から泡をふいて死んでしまう。その山奥で、二人の若い紳士は、現実とはまた違う、何か「奇妙で不可思議な体験」をするのであった。……

さて、「風の又三郎」には、もう一つの『風野又三郎』という作品があるのを知っている人は、意外と少ないのではないかと思う。それは、一体、どういうことかと言えば、それは、最初、宮沢賢治は、まさに『風野又三郎』という作品を書き、そのあと、その「作品」に手を加えて、今日、われわれの誰もがよく知っている、いわゆる『風の又三郎』にしたということである。

例えば、宮沢賢治の有名な『銀河鉄道の夜』という作品は、非常に人気の高い「作品」でありながら、実に様々な「謎を秘めた」作品でもあり、それゆえ、容易には理解しにくい内容になっているかと思うが、敢えて、その「内容」の様々な「謎解き」の旅を、これから「本文」にできるだけ寄り添いながら進めていきたいと思う。

さて、主人公（ジョバンニ）は、銀河祭りの夜、丘の上で不思議な経験をする。それは、「……どこかで、ふしぎな声が、銀河ステーションと云う声がしたと思うと、いきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼をこすってしまいました。……気がつくと、さっきから、ごとごとごとごとと、ジョバンニの乗っている小さな列車は走りつづけていたのでした。……

決　定　版

如　月　翔　悟　著

太宰治の世界

「走れメロス」と「人間失格」

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやって来た。…

王様は、人間が信じられないという。それでは、いわゆる「人間が信じられる」というのは、一体、どういうことなのだろうか？　この「根本問題」について考えてみたいと思う。――まず、身近な「動物」から考えてみたいと思うが、例えば、鳥には、有名なローレンツの「刷り込み」というものがある。それは、まさ

例えば、太宰治の「代表作」の一つとして、いわゆる『人間失格』という作品があるかと思うが、その「作品」は、一体、どういう「内容」かと問えば、それは、一言で言えば、ほんとうの自分とは、まさに「こういう人間であった」という極めて素直な「告白文」になっているかと思う。すなわち、外から見た「太宰治」（つま

さて、われわれ人間の、いわゆる「人間形成」というものは、誰でもそうであるように、一つは、「遺伝的要素」と、もう一つは、その「環境的要素」（つまり「生い立ち」）から極めて大きな影響を受けて形成されるものである。それゆえ、太宰治も決して例外であるはずもなく、太宰治がいかにも太宰治らしい「人間形成」

斜陽

私には、はじめからあなたの人格とか責任とかをあてにする気持はありませんでした。私のひとすぢの恋の冒険の成就だけが問題でした。こひしい人の子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます。私生児と、その母。けれども私たちは、古い道徳とどこまでも争い、

津軽

ここには、私の叔母がいる。幼少の頃、私は生みの母よりも、この叔母を慕っていたので、実にしばしばこの五所川原の叔母の家へ遊びに来た。

このたび私が津軽へ来て、ぜひとも、逢ってみたいひとがいた。私はその人を、自分の母だと思っているのだ。それは、「子守のたけ」である。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

夏目漱石の世界

草枕

山途を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。――主人公の画工は、その山途を辿りながら、その画工の「頭の中」(或いは「心の中」)に想い浮かんで来る様々な「文学論」や「芸術観」などを想いつくままに語るという内容であり、それが「冒頭から全般」に

さて、主人公である「画工」の、山を越えて下りていく先の今宵の宿は、那古井の温泉場であった。その温泉場へと向かう道の「途中」(峠)で、雨に降られて茶店へと駆け込むことになるが、そこで、茶店の「お婆さん」と出逢い、その「お婆さん」との「会話」のなかで、いわゆる「お嬢さんの話」が初めて出て来るという展開になるの

寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。段々を、四つ下りると、八畳ほどな風呂場へ出る。余は湯船のふちに仰向の頭を支えて、身を漂わせてみる。……

突然、風呂場の戸が開いた。立ち上がる湯気により、男とも女とも判別し難いが、黒いものが一歩を下へ移した時、輪郭が少しく浮かび上がり、余は女と二人、この風呂場の中にあることを覚った。

さて、山里の朧に乗じてそぞろ歩き、観海寺の石垣を登り始める。とうとう上まで登り詰め、その石段の上で想い出したのは、昔、鎌倉のお寺で、余は上る、坊主は下る。そのすれ違いざまに、坊主はただちに、「……なにもありませんぞ」と云い捨てて、すたすたと降りて行った。その坊主の所作が気に入ったのである。一方、「……世の中はしつこい、毒々しい、

決定版

如月翔悟著

夏目漱石の世界

こころ

第一部（先生と私）

上　先生と私

私が初めて先生とめぐり逢ったのは、夏の鎌倉の海岸であった。先生は、外から見ると、終始静かであり、落ち着いていたが、時として変な曇りがその顔を横切ることがあった。先生には美しい奥さんがいたが、子供はなく、大学出身でありながら、仕事もしないでぶらぶら遊んで

中　両親と私

私という人は、大学を無事に卒業をしたので、本や卒業証書などを持って、汽車で故郷に帰る。その実家での両親、それに父親の病状悪化で駆けつける兄と妊婦の妹代わりの夫との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。

下　先生の遺書

……私は何千万といる日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいといったから。……

この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。

下　先生の遺書

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍の人から鞭たれたいとまで思ったこともあります。こうした階段

決定版

如月翔悟　著

夏目漱石の世界

草枕とこころ

（完全版）

山途を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

主人公の画工は、その山途を歩む途すがら、その画工の「頭の中」（或いは「心の中」）に想い浮かんで来る様々な「文学論」や「芸術観」などを想いつくままに語るという内容であり、……

主人公である「画工」の、山を越えて下りていく先の今宵の宿は、那古井の温泉場であった。その温泉場へと向かう道の途中（峠）で、雨に降られて茶店へと駆け込むことになるが、そこで、茶店の「お婆さん」と出逢う。そして、その「お婆さん」との「会話」のなかで、いわゆる「お嬢さんの話」が初めて出て来るという展

寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。段々を、四つ下りると、八畳ほどな風呂場へ出る。余は湯船のふちに仰向の頭を支えて、身を漂わせてみる。

突然、風呂場の戸が開いた。立ち上がる湯気により、男とも女とも判別し難いが、黒いものが一歩を下へ移した時、輪郭が少しく浮かび上がり、余は女と二人、この風呂場の中にあることを覚った。

まず、「先生と私」という第一部の内容は、私（或いは「奥さん」）という第三者から見た（つまり「外から見た」）時の「先生」という存在の「行動（言動）」の主な描写であり、それは、いわば「外的事実」であり、例えば、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）をはじめ、その時々に表れる「先生」という人間の「顔の表

一方、「先生の遺書」という第三部の内容は、先生（自分）という第一者から見た（つまり「内から見た」）時の「先生」（自分自身）という存在の「内的世界」の描写であり、それは、いわば「内的事実」であり、例えば、自分という人間の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じる様々な「思いや考え、その他」の描写である。

「先生」という人は、まさに「恋は罪悪である」と言っている。それは、一体、なぜなのか？　それは、人を本気で愛すれば、必ず、誰かが傷つく。他を傷つけずにはおかないものだからである。誰もが「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）というものを、多かれ少なかれ、背負うことになる。だからこそ、「恋愛は罪悪である」とともに、人

決定版

如月翔悟著

五　七　五　で　描　く

「動　植　物」た　ち

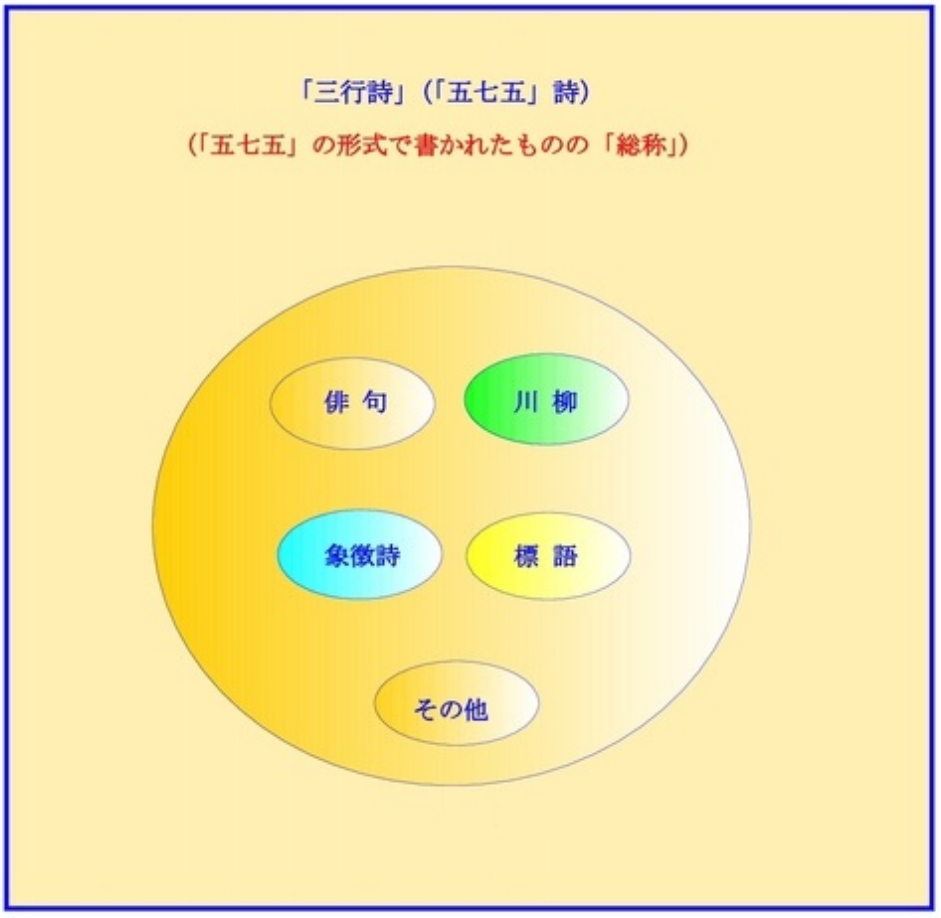
完　全　版

如　月　翔　悟　著

五　七　五　で　描　く

「ス　ポ　ー　ツ」編

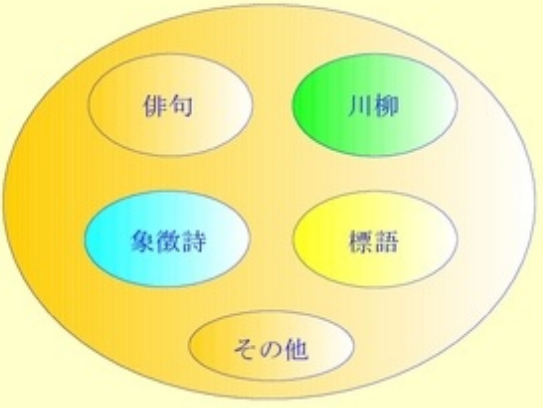
（多種多彩な「スポーツ」を「五七五」で描いたら？）



完　全　版

如　月　翔　悟　著

「三行詩」(「五七五」詩) について
(「五七五」の形式で書かれたものの「総称」)



例えば、、「俳句」とは、一体、何かという問いに対して、それは、「小説」で言えば、いわゆる「私（わたくし）小説」であり、その人自身が実際に見聞き経験したことなどをもとにして、その時の「実感」の「情景」を、いわゆる「五・七・五」で表現するというのが、まさに「基本的な姿」になるかと思う。もちろん、それは、それで「重み」のある世界ではあるが、ただ、小説という「形式」で表現できるものは、何も「私（わたくし）小説」だけではなく、例えば、歴史小説もあれば、また、推理小説もあり、その他、実に様々なものが表現できるのとまったく同じように、「五・七・五」という形式で表現できるものは、何も「俳句」や「川柳」だけではなく、例えば、象徴詩、標語、その他、どのようなものでも表現でき得るものである。それが、すなわち、「三行詩」(「五・七・五」詩) であり、「三行詩」(「五・七・五」詩) というのは、「五・七・五」の形式で書かれたものの『総称』であり、それゆえ、「俳句」も「川柳」も、まさに「三行詩」(「五・七・五」詩) のなかに入るものである。つまり、どこに「重点」を置き、何を「表現」するかによって、それぞれ「俳句」にもなれば、「川柳」にもなり、また、「象徴詩」にも、「標語」にも、その他、どのようなものにもなるということである。

それでは、ここで書かれている「三行詩」(「五・七・五」詩) は、具体的には、一体、どこに「重点」を置き、何を「表現」しているのかと問われれば、主に動物や植物などを中心とした内容になっているので、敢えて言えば、「動物詩」や「植物詩」ということになるのかも知れないが、もちろん、そういう名称は、どうでもよいことであり、大事なことは、自分と対象がある場合、自分の方ではなく、むしろ対象の方に重点を置き、そして、その対象の特徴をとらえて、その「姿」を生き生きと描き出すことによって、その対象の「本質」を浮かび上がらせるとともに、その対象の「生命（いのち)」にふれるというところに重点があるということである。――もちろん、それは、一つの「表現方法」に過ぎず、例えば、『象徴詩』であれば、外界の対象は、自分の「心象風景」を表現するためのいわば「素材」に過ぎず、表面的には動植物や自然の風景などを描いていても、その実は、その人の「心象風景」を描いているということにもなるということである。それは、自分と対象とがある場合、自分の「心」の方に重点を置いた表現になっているということである。つまり、どこに「重点」を置くかによって、その「表現内容」は、それぞれ違ったものになるのは、当然のことであり、本書の場合は、自分よりも動植物、その他の対象などに重点を置いて、その対象の特徴をとらえ、そして、その対象の「姿」を生き生きと描き出すことによって、その対象の「本質」を浮かび上がらせるとともに、その対象の「生命（いのち)」にふれるというところに重点があるということである。

五　七　五　で　描　く

「三　つ　の　作　品」の　統　合　編

統　合　版

如　月　翔　悟　著

「五輪書」（宮本武蔵）

第一部（地の巻）

我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。

六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也。……

兵法至極して勝つにはあらず。をのづから道の器用有りて、天理を離れざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや。……とある。

「地の巻」

宮本武蔵は、なぜ、自分の「剣法」を『二天一流』と号したのか？ 日本の武士は、必ず、腰に「刀と脇差」の二刀を差すことになる。

この「二本の刀」を自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応できる、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」である。

「水の巻」

兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによって水の巻として、一流の太刀筋、此書に書き顕はすもの也、とある。

宮本武蔵の「剣法」は、刻々と変化する状況に応じて、その「剣法」も刻々と変化して、勝つための「最良の方法」が刻々と選ばれていくのである。……

「火の巻」

二天一流の兵法、戦の事を、火におもひとって、戦勝負の事を火の巻として、此巻に書顕はす也。

そして、宮本武蔵は、最初に「場の位」（良しあし）を語るが、それは、実に永年に渡る数多くの実践から学び得た「生きた智慧」が次から次へと「二十七項目」語られていくのである。

「風の巻」

兵法、他流の道を知る事、他の兵法の流々を書付け、風の巻として、此巻に顕はす所也。他流の道をしらずしては、我一流の道悟にわきまへがたし、とある。

そして、宮本武蔵は、九つの「項目」（例えば、大きなる太刀、つよみの太刀、短き太刀、その他）などについて、彼なりの批評を記していく。

「空の巻」

この「空の巻」は、もともと未完であったと伝えられている。それゆえ、どこまでが宮本武蔵の言葉であり、どこからが弟子の言葉かは分かりかねるところがある。そして、本来ならば、宮本武蔵の「最究極の境地」が語られるはずのものであるが、それがどのようなものであったかは、各人に任されているのである。

決定版

如月翔悟 著

「五輪書」（宮本武蔵）

第二部（水の巻）

我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。

六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也。……

兵法至極して勝つにはあらず。をのづから道の器用有りて、天理を離れざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや。……とある。

「地の巻」

宮本武蔵は、なぜ、自分の「剣法」を『二天一流』と号したのか？ 日本の武士は、必ず、腰に「刀と脇差」の二刀を差すことになる。

この「二本の刀」を自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」である。

「水の巻」

兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによって水の巻として、一流の太刀筋、此書に書き顕はすもの也、とある。

宮本武蔵の「剣法」は、刻々と変化する状況に応じて、その「剣法」も刻々と変化して、勝つための「最良の方法」が刻々と選ばれていくのである。……

「火の巻」

二天一流の兵法、戦の事を、火におもひとって、戦勝負の事を火の巻として、此巻に書顕はす也。

そして、宮本武蔵は、最初に「場の位」（良しあし）を語るが、それは、実に永年に渡る数多くの実践から学び得た「生きた智慧」が次から次へと「二十七項目」語られていくのである。

「風の巻」

兵法、他流の道を知る事、他の兵法の流々を書付け、風の巻として、此巻に顕はす所也。他流の道をしらずしては、我一流の道悟にわきまへがたし、とある。

そして、宮本武蔵は、九つの「項目」（例えば、大きなる太刀、つよみの太刀、短き太刀、その他）などについて、彼なりの批評を記していく。

「空の巻」

この「空の巻」は、もともと未完であったと伝えられている。それゆえ、どこまでが宮本武蔵の言葉であり、どこからが弟子の言葉かは分かりかねるところがある。そして、本来ならば、宮本武蔵の「最究極の境地」が語られるはずのものであるが、それがどのようなものであったかは、各人に任されているのである。

決定版

如月翔悟著

「五輪書」（宮本武蔵）

上巻

（地の巻・水の巻）

我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。

六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也。……

兵法至極して勝つにはあらず。をのづから道の器用有りて、天理を離れざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや。……とある。

「地の巻」

宮本武蔵は、なぜ、自分の「剣法」を『二天一流』と号したのか？ 日本の武士は、必ず、腰に「刀と脇差」の二刀を差すことになる。

この「二本の刀」を自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」である。

「水の巻」

兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによって水の巻として、一流の太刀筋、此書に書き顕はすもの也、とある。

宮本武蔵の「剣法」は、刻々と変化する状況に応じて、その「剣法」も刻々と変化して、勝つための「最良の方法」が刻々と選ばれていくのである。……

「火の巻」

二天一流の兵法、戦の事を、火におもひとって、戦勝負の事を火の巻として、此巻に書顕はす也。

そして、宮本武蔵は、最初に「場の位」（良しあし）を語るが、それは、実に永年に渡る数多くの実践から学び得た「生きた智慧」が次から次へと「二十七項目」語られていくのである。

「風の巻」

兵法、他流の道を知る事、他の兵法の流々を書付け、風の巻として、此巻に顕はす所也。他流の道をしらずしては、我一流の道悟にわきまへがたし、とある。

そして、宮本武蔵は、九つの「項目」（例えば、大きなる太刀、つよみの太刀、短き太刀、その他）などについて、彼なりの批評を記していく。

「空の巻」

この「空の巻」は、もともと未完であったと伝えられている。それゆえ、どこまでが宮本武蔵の言葉であり、どこからが弟子の言葉かは分かりかねるところがある。そして、本来ならば、宮本武蔵の「最究極の境地」が語られるはずのものであるが、それがどのようなものであったかは、各人に任されているのである。

決定版

如月翔悟 著

「五輪書」（宮本武蔵）

第三部（火の巻）

我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。

六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也。……

兵法至極して勝つにはあらず。をのづから道の器用有りて、天理を離れざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや。……とある。

「地の巻」

宮本武蔵は、なぜ、自分の「剣法」を『二天一流』と号したのか？ 日本の武士は、必ず、腰に「刀と脇差」の二刀を差すことになる。

この「二本の刀」を自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」である。

「水の巻」

兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによって水の巻として、一流の太刀筋、此書に書き顕はすもの也、とある。

宮本武蔵の「剣法」は、刻々と変化する状況に応じて、その「剣法」も刻々と変化して、勝つための「最良の方法」が刻々と選ばれていくのである。……

「火の巻」

二天一流の兵法、戦の事を、火におもひとって、戦勝負の事を火の巻として、此巻に書顕はす也。

そして、宮本武蔵は、最初に「場の位」（良しあし）を語るが、それは、実に永年に渡る数多くの実践から学び得た「生きた智慧」が次から次へと「二十七項目」語られていくのである。

「風の巻」

兵法、他流の道を知る事、他の兵法の流々を書付け、風の巻として、此巻に顕はす所也。他流の道をしらずしては、我一流の道悟にわきまへがたし、とある。

そして、宮本武蔵は、九つの「項目」（例えば、大きなる太刀、つよみの太刀、短き太刀、その他）などについて、彼なりの批評を記していく。

「空の巻」

この「空の巻」は、もともと未完であったと伝えられている。それゆえ、どこまでが宮本武蔵の言葉であり、どこからが弟子の言葉かは分かりかねるところがある。そして、本来ならば、宮本武蔵の「最究極の境地」が語られるはずのものであるが、それがどのようなものであったかは、各人に任されているのである。

決定版

如月翔悟著

「五輪書」（宮本武蔵）

第四部（風の巻・空の巻）

我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。

六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也。……

兵法至極して勝つにはあらず。をのづから道の器用有りて、天理を離れざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや。……とある。

「地の巻」

宮本武蔵は、なぜ、自分の「剣法」を『二天一流』と号したのか？ 日本の武士は、必ず、腰に「刀と脇差」の二刀を差すことになる。

この「二本の刀」を自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」である。

「水の巻」

兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによって水の巻として、一流の太刀筋、此書に書き顕はすもの也、とある。

宮本武蔵の「剣法」は、刻々と変化する状況に応じて、その「剣法」も刻々と変化して、勝つための「最良の方法」が刻々と選ばれていくのである。……

「火の巻」

二天一流の兵法、戦の事を、火におもひとって、戦勝負の事を火の巻として、此巻に書顕はす也。

そして、宮本武蔵は、最初に「場の位」（良しあし）を語るが、それは、実に永年に渡る数多くの実践から学び得た「生きた智慧」が次から次へと「二十七項目」語られていくのである。

「風の巻」

兵法、他流の道を知る事、他の兵法の流々を書付け、風の巻として、此巻に顕はす所也。他流の道をしらずしては、我一流の道悟にわきまへがたし、とある。

そして、宮本武蔵は、九つの「項目」（例えば、大きなる太刀、つよみの太刀、短き太刀、その他）などについて、彼なりの批評を記していく。

「空の巻」

この「空の巻」は、もともと未完であったと伝えられている。それゆえ、どこまでが宮本武蔵の言葉であり、どこからが弟子の言葉かは分かりかねるところがある。そして、本来ならば、宮本武蔵の「最究極の境地」が語られるはずのものであるが、それがどのようなものであったかは、各人に任されているのである。

決定版

如月翔悟 著

「五輪書」（宮本武蔵）

下巻

（火の巻・風の巻・空の巻）

我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。

六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也。……

兵法至極して勝つにはあらず。をのづから道の器用有りて、天理を離れざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや。……とある。

「地の巻」

宮本武蔵は、なぜ、自分の「剣法」を『二天一流』と号したのか？ 日本の武士は、必ず、腰に「刀と脇差」の二刀を差すことになる。

この「二本の刀」を自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」である。

「水の巻」

兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによって水の巻として、一流の太刀筋、此書に書き顕はすもの也、とある。

宮本武蔵の「剣法」は、刻々と変化する状況に応じて、その「剣法」も刻々と変化して、勝つための「最良の方法」が刻々と選ばれていくのである。……

「火の巻」

二天一流の兵法、戦の事を、火におもひとって、戦勝負の事を火の巻として、此巻に書顕はす也。

そして、宮本武蔵は、最初に「場の位」（良しあし）を語るが、それは、実に永年に渡る数多くの実践から学び得た「生きた智慧」が次から次へと「二十七項目」語られていくのである。

「風の巻」

兵法、他流の道を知る事、他の兵法の流々を書付け、風の巻として、此巻に顕はす所也。他流の道をしらずしては、我一流の道悟にわきまへがたし、とある。

そして、宮本武蔵は、九つの「項目」（例えば、大きなる太刀、つよみの太刀、短き太刀、その他）などについて、彼なりの批評を記していく。

「空の巻」

この「空の巻」は、もともと未完であったと伝えられている。それゆえ、どこまでが宮本武蔵の言葉であり、どこからが弟子の言葉かは分かりかねるところがある。そして、本来ならば、宮本武蔵の「最究極の境地」が語られるはずのものであるが、それがどのようなものであったかは、各人に任されているのである。

決定版

如月翔悟 著

「五輪書」（宮本武蔵）

完全版

（地水火風空之五巻）

我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。

六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也。……

兵法至極して勝つにはあらず。をのづから道の器用有りて、天理を離れざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや。……とある。

「地の巻」

宮本武蔵は、なぜ、自分の「剣法」を『二天一流』と号したのか？ 日本の武士は、必ず、腰に「刀と脇差」の二刀を差すことになる。

この「二本の刀」を自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」である。

「水の巻」

兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによって水の巻として、一流の太刀筋、此書に書き顕はすもの也、とある。

宮本武蔵の「剣法」は、刻々と変化する状況に応じて、その「剣法」も刻々と変化して、勝つための「最良の方法」が刻々と選ばれていくのである。……

「火の巻」

二天一流の兵法、戦の事を、火におもひとって、戦勝負の事を火の巻として、此巻に書顕はす也。

そして、宮本武蔵は、最初に「場の位」（良しあし）を語るが、それは、実に永年に渡る数多くの実践から学び得た「生きた智慧」が次から次へと「二十七項目」語られていくのである。

「風の巻」

兵法、他流の道を知る事、他の兵法の流々を書付け、風の巻として、此巻に顕はす所也。他流の道をしらずしては、我一流の道悟にわきまへがたし、とある。

そして、宮本武蔵は、九つの「項目」（例えば、大きなる太刀、つよみの太刀、短き太刀、その他）などについて、彼なりの批評を記していく。

「空の巻」

この「空の巻」は、もともと未完であったと伝えられている。それゆえ、どこまでが宮本武蔵の言葉であり、どこからが弟子の言葉かは分かりかねるところがある。そして、本来ならば、宮本武蔵の「最究極の境地」が語られるはずのものであるが、それがどのようなものであったかは、各人に任されているのである。

決定版

如月翔悟 著

江戸川乱歩の世界

①　人間椅子

（「人間椅子、盲獣、屋根裏の散歩者、陰獣」）

人間椅子

椅子の中の恋！　それが、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つものか、ただ、触覚と、聴覚と、僅かの嗅覚のみの恋でございます。まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりでございます。――奥様、私はそこで、一人の女性の肉体に烈しい愛着を覚えたのでございます。……

盲獣

なめらかな大理石の膚を、盲人の五本の指がクモの足のように不気味に這い回っていた。蘭子は、それを見ているうちに、不思議な錯覚に陥っていた。男の不気味な手のひらが、直接わが肉体をなで回しているかのように感じられるのだ。やがて、くすぐったい感じが、だんだんと焼きつくような痛

屋根裏の散歩者

郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、一向この世が面白くないのでした。ところが、ふとした好奇心から、彼は、屋根裏の散歩をはじめ、その天井からの隙見は、何事がなくても、誰も見ていないと信じて、その本性をさらけ出す人間を観察するだけでも充分面白いのです。

陰獣

私は古い仏像が見たくなり、上野の帝室博物館の、薄暗くガランとした部屋部屋を、足音を忍ばせて歩き廻っていた。そこで偶然、静子という女性とめぐり逢うが、その美しい彼女の項にあの妙なものを発見した。それは、背中の方まで深く、赤痣の様な太い蚯蚓腫れが出来ていたのであった。…

決定版

如月翔悟著

江戸川乱歩の世界

② 盲獣

（「人間椅子、盲獣、屋根裏の散歩者、陰獣」）

人間椅子

椅子の中の恋！　それが、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つものか、ただ、触覚と、聴覚と、僅かの嗅覚のみの恋でございます。まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりでございます。――奥様、私はそこで、一人の女性の肉体に烈しい愛着を覚えたのでございます。……

盲獣

なめらかな大理石の膚を、盲人の五本の指がクモの足のように不気味に這い回っていた。蘭子は、それを見ているうちに、不思議な錯覚に陥っていた。男の不気味な手のひらが、直接わが肉体をなで回しているかのように感じられるのだ。やがて、くすぐったい感じが、だんだんと焼きつくような痛

屋根裏の散歩者

郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、一向この世が面白くないのでした。ところが、ふとした好奇心から、彼は、屋根裏の散歩をはじめ、その天井からの隙見は、何事がなくても、誰も見ていないと信じて、その本性をさらけ出す人間を観察するだけでも充分面白いのです。

陰獣

私は古い仏像が見たくなり、上野の帝室博物館の、薄暗くガランとした部屋部屋を、足音を忍ばせて歩き廻っていた。そこで偶然、静子という女性とめぐり逢うが、その美しい彼女の項にあの妙なものを発見した。それは、背中の方まで深く、赤痣の様な太い蚯蚓腫れが出来ていたのであった。…

決定版

如月翔悟 著

江戸川乱歩の世界

人間椅子と盲獣

（「人間椅子、盲獣、屋根裏の散歩者、陰獣」）

人間椅子

椅子の中の恋！　それが、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つものか、ただ、触覚と、聴覚と、僅かの嗅覚のみの恋でございます。まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりでございます。――奥様、私はそこで、一人の女性の肉体に烈しい愛着を覚えたのでございます。……

盲獣

なめらかな大理石の膚を、盲人の五本の指がクモの足のように不気味に這い回っていた。蘭子は、それを見ているうちに、不思議な錯覚に陥っていた。男の不気味な手のひらが、直接わが肉体をなで回しているかのように感じられるのだ。やがて、くすぐったい感じが、だんだんと焼きつくような痛

屋根裏の散歩者

郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、一向この世が面白くないのでした。ところが、ふとした好奇心から、彼は、屋根裏の散歩をはじめ、その天井からの隙見は、何事がなくても、誰も見ていないと信じて、その本性をさらけ出す人間を観察するだけでも充分面白いのです。

陰獣

私は古い仏像が見たくなり、上野の帝室博物館の、薄暗くガランとした部屋部屋を、足音を忍ばせて歩き廻っていた。そこで偶然、静子という女性とめぐり逢うが、その美しい彼女の項にあの妙なものを発見した。それは、背中の方まで深く、赤痣の様な太い蚯蚓腫れが出来ていたのであった。…

決定版

如月翔悟著

江戸川乱歩の世界

③　屋根裏の散歩者、その他

（「人間椅子、盲獣、屋根裏の散歩者、陰獣」）

人間椅子

椅子の中の恋！　それが、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つものか、ただ、触覚と、聴覚と、僅かの嗅覚のみの恋でございます。まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりでございます。――奥様、私はそこで、一人の女性の肉体に烈しい愛着を覚えたのでございます。……

盲獣

なめらかな大理石の膚を、盲人の五本の指がクモの足のように不気味に這い回っていた。蘭子は、それを見ているうちに、不思議な錯覚に陥っていた。男の不気味な手のひらが、直接わが肉体をなで回しているかのように感じられるのだ。やがて、くすぐったい感じが、だんだんと焼きつくような痛

屋根裏の散歩者

郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、一向この世が面白くないのでした。ところが、ふとした好奇心から、彼は、屋根裏の散歩をはじめ、その天井からの隙見は、何事がなくても、誰も見ていないと信じて、その本性をさらけ出す人間を観察するだけでも充分面白いのです。

陰獣

私は古い仏像が見たくなり、上野の帝室博物館の、薄暗くガランとした部屋部屋を、足音を忍ばせて歩き廻っていた。そこで偶然、静子という女性とめぐり逢うが、その美しい彼女の項にあの妙なものを発見した。それは、背中の方まで深く、赤痣の様な太い蚯蚓腫れが出来ていたのであった。…

決定版

如月翔悟著

江戸川乱歩の世界

④　陰獣

（「人間椅子、盲獣、屋根裏の散歩者、陰獣」）

人間椅子

椅子の中の恋！　それが、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つものか、ただ、触覚と、聴覚と、僅かの嗅覚のみの恋でございます。まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりでございます。――奥様、私はそこで、一人の女性の肉体に烈しい愛着を覚えたのでございます。……

盲獣

なめらかな大理石の膚を、盲人の五本の指がクモの足のように不気味に這い回っていた。蘭子は、それを見ているうちに、不思議な錯覚に陥っていた。男の不気味な手のひらが、直接わが肉体をなで回しているかのように感じられるのだ。やがて、くすぐったい感じが、だんだんと焼きつくような痛

屋根裏の散歩者

郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、一向この世が面白くないのでした。ところが、ふとした好奇心から、彼は、屋根裏の散歩をはじめ、その天井からの隙見は、何事がなくても、誰も見ていないと信じて、その本性をさらけ出す人間を観察するだけでも充分面白いのです。

陰獣

私は古い仏像が見たくなり、上野の帝室博物館の、薄暗くガランとした部屋部屋を、足音を忍ばせて歩き廻っていた。そこで偶然、静子という女性とめぐり逢うが、その美しい彼女の項にあの妙なものを発見した。それは、背中の方まで深く、赤痣の様な太い蚯蚓腫れが出来ていたのであった。…

決定版

如月翔悟著

江戸川乱歩の世界

屋根裏の散歩者と陰獣

（「人間椅子、盲獣、屋根裏の散歩者、陰獣」）

人間椅子

椅子の中の恋！　それが、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つものか、ただ、触覚と、聴覚と、僅かの嗅覚のみの恋でございます。まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりでございます。――奥様、私はそこで、一人の女性の肉体に烈しい愛着を覚えたのでございます。……

盲獣

なめらかな大理石の膚を、盲人の五本の指がクモの足のように不気味に這い回っていた。蘭子は、それを見ているうちに、不思議な錯覚に陥っていた。男の不気味な手のひらが、直接わが肉体をなで回しているかのように感じられるのだ。やがて、くすぐったい感じが、だんだんと焼きつくような痛

屋根裏の散歩者

郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、一向この世が面白くないのでした。ところが、ふとした好奇心から、彼は、屋根裏の散歩をはじめ、その天井からの隙見は、何事がなくても、誰も見ていないと信じて、その本性をさらけ出す人間を観察するだけでも充分面白いのです。

陰獣

私は古い仏像が見たくなり、上野の帝室博物館の、薄暗くガランとした部屋部屋を、足音を忍ばせて歩き廻っていた。そこで偶然、静子という女性とめぐり逢うが、その美しい彼女の項にあの妙なものを発見した。それは、背中の方まで深く、赤痣の様な太い蚯蚓腫れが出来ていたのであった。…

決定版

如月翔悟著

江戸川乱歩の世界

完全版

（「人間椅子、盲獣、屋根裏の散歩者、陰獣」）

人間椅子

椅子の中の恋！　それが、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つものか、ただ、触覚と、聴覚と、僅かの嗅覚のみの恋でございます。まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりでございます。――奥様、私はそこで、一人の女性の肉体に烈しい愛着を覚えたのでございます。……

盲獣

なめらかな大理石の膚を、盲人の五本の指がクモの足のように不気味に這い回っていた。蘭子は、それを見ているうちに、不思議な錯覚に陥っていた。男の不気味な手のひらが、直接わが肉体をなで回しているかのように感じられるのだ。やがて、くすぐったい感じが、だんだんと焼きつくような痛

屋根裏の散歩者

郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、一向この世が面白くないのでした。ところが、ふとした好奇心から、彼は、屋根裏の散歩をはじめ、その天井からの隙見は、何事がなくても、誰も見ていないと信じて、その本性をさらけ出す人間を観察するだけでも充分面白いのです。

陰獣

私は古い仏像が見たくなり、上野の帝室博物館の、薄暗くガランとした部屋部屋を、足音を忍ばせて歩き廻っていた。そこで偶然、静子という女性とめぐり逢うが、その美しい彼女の項にあの妙なものを発見した。それは、背中の方まで深く、赤痣の様な太い蚯蚓腫れが出来ていたのであった。…

決定版

如月翔悟著

プラトンの「三つの比喩」

序・太陽の比喩

（「序」「太陽の比喩」「線分の比喩」「洞窟の比喩」）

序

プラトンの学ぶべき最大の学業としての「善のイデア」については、それがそのまま語られているのではなく、いわゆる「三つの比喩」（つまり「太陽の比喩」と「線分の比喩」それに「洞窟の比喩」）という形で語られている。その二千数百年来の「謎解き」に敢えて挑戦するという試

太陽の比喩

ぼくが〈善〉の子供と言っていたのは、この太陽のことなのだと理解してくれたまえ。すなわち、思惟によって知られる世界において、〈善〉が〈知るもの〉と〈知られるもの〉に対してもつ関係は、見られる世界において、太陽が〈見るもの〉と〈見られるもの〉に対してもつ関係とちょうど同じものなのだ。

線分の比喩

それは、理（ことわり）（ロゴス）がそれ自身で、問答（対話）の力によって把握するところのものであり、この場合、理はさまざまの仮説を絶対的始原とすることなく、踏み台として、また躍動のための拠り所として、それによってついに、もはや仮説ではない万有の始原に到達することに

洞窟の比喩

知的世界には、最後にかろうじて見てとられるものとして、〈善〉の実相（イデア）がある。いったんこれが見てとられたならば、この〈善〉の実相こそはあらゆるものにとって、すべて正しく美しいものを産み出す原因であるという結論へ、考えが至らなければならないのである。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

プラトンの「三つの比喩」

線分の比喩（可視界・可知界）

（「序」「太陽の比喩」「線分の比喩」「洞窟の比喩」）

序

プラトンの学ぶべき最大の学業としての「善のイデア」については、それがそのまま語られているのではなく、いわゆる「三つの比喩」（つまり「太陽の比喩」と「線分の比喩」それに「洞窟の比喩」）という形で語られている。その二千数百年来の「謎解き」に敢えて挑戦するという試

太陽の比喩

ぼくが〈善〉の子供と言っていたのは、この太陽のことなのだと理解してくれたまえ。すなわち、思惟によって知られる世界において、〈善〉が〈知るもの〉と〈知られるもの〉に対してもつ関係は、見られる世界において、太陽が〈見るもの〉と〈見られるもの〉に対してもつ関係とちょうど同じものなのだ。

線分の比喩

それは、理（ことわり）（ロゴス）がそれ自身で、問答（対話）の力によって把握するところのものであり、この場合、理はさまざまの仮説を絶対的始原とすることなく、踏み台として、また躍動のための拠り所として、それによってついに、もはや仮説ではない万有の始原に到達することに

洞窟の比喩

知的世界には、最後にかろうじて見てとられるものとして、〈善〉の実相（イデア）がある。いったんこれが見てとられたならば、この〈善〉の実相こそはあらゆるものにとって、すべて正しく美しいものを産み出す原因であるという結論へ、考えが至らなければならないのである。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

プラトンの「三つの比喩」（線分の比喩）　如月翔悟著

≪　プラトンの「線分の比喩」　≫

われわれの「目」によって見られる世界（可視界）		「思惟」によって知られる世界（可知界）	
影　像　知　覚	確　信　……　所　信	悟　性　的　思　考	知　性　的　思　惟
間　接　的　知　覚	直　接　的　知　覚	間接知　……　（中間知）	直接知　……　（直知・直観）
まず第１に影、それから水面にうつる像をはじめ、その他稠密で滑らかで明るい構成をもった事物にうつる影像など、すべてこのようなもの。	われわれの周囲にいる動物や、すべての植物や、人工物のたぐいの全体のことだ。	例えば、算数、平面幾何学、立体幾何学、天文学（天体力学）、音楽理論、その他などの、いわゆる「数学的諸学科」を、プラトンは、「間接知」（或いは「中間知」）とした。	本格的な「哲学的問答法」によってこそ、遙か彼方にある最究極の「真実、真理、その他」などである、例えば、正義そのもの、勇気そのもの、節制そのもの、美そのもの、その他などを観て取ることができ得るとした。

A　D　C　E　B

≪　プラトンの「線分の比喩」の「今日的解釈」　≫

われわれの「感覚」によって、とらえられるもの。（感覚界）			われわれの「思惟」によって知られる世界（思惟界）			
「感覚」中心のもの	「感覚＋思惟」によって、とらえたり、知り得るもの。（「感覚＋思惟」知）				「思惟」中心のもの	
影像知覚 1	影像知覚 2	確信　……　所信	悟性的思考		／　知性的思惟	
実物の「影 1」	実物の「影 2」	実　物	間接知 1（一般知）	間接知 2（専門知）	間接知 3（学問知）	直接知
例えば、地面や水面などに映った実物の「影」、また、鏡やガラス、あるいは食器や金属、その他などに映った実物の「影」、その他、等々。	例えば、映画、テレビ、ビデオ、ＤＶＤ、パソコン、動画などの映像。また、写真、イラスト、絵、漫画、カセット、ＣＤ、ラジオ、携帯、その他。	この世にあるありとあらゆるもの。例えば、人間、動物、植物、自然、様々な人工物、宇宙、その他、また、それらの実に様々な「活動や現象」。	「現実界」の様々な事物や活動などに対する一般的な知識。	「現実界」の様々な事物や活動などに対する専門的な知識。	本格的な「学習」や「思惟」等によって知り得る学問的知識。	この領域は、最究極の「真実・真理」等を愛求して、無限に果てしなく問い続けてやまない「未知領域思考」。
			例えば、仕事、趣味、生活、遊び、その他などに対する、一般的（専門的）「知識」。		学問（人文科学・社会科学・自然科学）	
間接的知覚 1	間接的知覚 2	直接的知覚	一般的認識	専門的認識	学問的認識	直知・直観

プラトンの「三つの比喩」

洞窟の比喩（「善のイデア」の観取）

（「序」「太陽の比喩」「線分の比喩」「洞窟の比喩」）

序

プラトンの学ぶべき最大の学業としての「善のイデア」については、それがそのまま語られているのではなく、いわゆる「三つの比喩」（つまり「太陽の比喩」と「線分の比喩」それに「洞窟の比喩」）という形で語られている。その二千数百年来の「謎解き」に敢えて挑戦するという試

太陽の比喩

ぼくが〈善〉の子供と言っていたのは、この太陽のことなのだと理解してくれたまえ。すなわち、思惟によって知られる世界において、〈善〉が〈知るもの〉と〈知られるもの〉に対してもつ関係は、見られる世界において、太陽が〈見るもの〉と〈見られるもの〉に対してもつ関係とちょうど同じものなのだ。

線分の比喩

それは、理（ことわり）（ロゴス）がそれ自身で、問答（対話）の力によって把握するところのものであり、この場合、理はさまざまの仮説を絶対的始原とすることなく、踏み台として、また躍動のための拠り所として、それによってついに、もはや仮説ではない万有の始原に到達することに

洞窟の比喩

知的世界には、最後にかろうじて見てとられるものとして、〈善〉の実相（イデア）がある。いったんこれが見てとられたならば、この〈善〉の実相こそはあらゆるものにとって、すべて正しく美しいものを産み出す原因であるという結論へ、考えが至らなければならないのである。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

プラトンの「三つの比喩」

（完全版）

（「序」「太陽の比喩」「線分の比喩」「洞窟の比喩」）

序

プラトンの学ぶべき最大の学業としての「善のイデア」については、それがそのまま語られているのではなく、いわゆる「三つの比喩」（つまり「太陽の比喩」と「線分の比喩」それに「洞窟の比喩」）という形で語られている。その二千数百年来の「謎解き」に敢えて挑戦するという試

太陽の比喩

ぼくが〈善〉の子供と言っていたのは、この太陽のことなのだと理解してくれたまえ。すなわち、思惟によって知られる世界において、〈善〉が〈知るもの〉と〈知られるもの〉に対してもつ関係は、見られる世界において、太陽が〈見るもの〉と〈見られるもの〉に対してもつ関係とちょうど同じものなのだ。

線分の比喩

それは、理（ことわり）（ロゴス）がそれ自身で、問答（対話）の力によって把握するところのものであり、この場合、理はさまざまの仮説を絶対的始原とすることなく、踏み台として、また躍動のための拠り所として、それによってついに、もはや仮説ではない万有の始原に到達することに

洞窟の比喩

知的世界には、最後にかろうじて見てとられるものとして、〈善〉の実相（イデア）がある。いったんこれが見てとられたならば、この〈善〉の実相こそはあらゆるものにとって、すべて正しく美しいものを産み出す原因であるという結論へ、考えが至らなければならないのである。

決　定　版

如　月　翔　悟　著

芥川龍之介の世界

トロッコ

トロッコ

小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行った。トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでいる。良平はそんな景色を眺めて、土工になりたいと思ったり、一度でも土工と一緒に、トロッコへ乗りたいと

若い二人の土工

十日後、良平は一人、午過ぎの工事場に佇み、トロッコの来るのを眺めていた。すると、枕木を積んだトロッコが一輛、登って来た。そのトロッコを押しているのは、若い二人の土工で、「おじさん。押してやろうか?」と云うと、「おお、押してくれ」と、快い返事が返って来たのである。

二件目の茶店

土工たちは茶店から出て来ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にこう云った。「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」、「あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するずら」と。良平は一瞬間呆気にとられた。良平は殆ど泣きそうになったが、泣いても仕方

良平の逆走

良平は、ほとんど無我夢中で線路の側を走り続けたのである。それは、まさに逆走であり、「二件目の茶店→藁屋根の茶店→海が見える所→雑木林→竹藪→蜜柑畑→村外れの工事場→彼の村→彼の家」へと、「命さえ助かれば――」と、そう思いながら、泣いてもつまずいても走り続けたのである。

決定版

如月翔悟 著

芥川龍之介の世界

完全版（トロッコ 付）

（「羅生門、杜子春、蜘蛛の糸、藪の中」）

羅生門

或日の暮れ方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。広い門の下には、この男のほかに誰もゐない。

（中略）、なぜかと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とか云ふ災がつづいて起つた。そこで洛中のさびれ方は一通りではな

杜子春

或春の日暮です。唐の都の洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がありました。若者は名は杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費ひ尽して、その日の暮しにも困る位、憐な身分になつてゐるのです。その杜子春は相変らず、門の壁に身を凭せ

蜘蛛の糸

或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへと溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございま

藪の中

あの死骸を見つけたのは、私に違ひございません。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死体があつたのでございます。死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつた儘、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの

決定版

如月翔悟 著

「象徴の森」

夢とロマンを求めて

鮭と飛魚

今、将に暗雲の広がりゆく空の下、
逆巻き荒れ狂う波濤の波間より
遙か大空へと飛躍せんとす
その飛魚のごとき者よ！
たとえそれが極難の夢であろうとも
海中で眠ることなく、自らの力で挑み、
新たなる世界へ飛び翔ようではないか！
――激流のなか、
産卵を終えた鮭の身が

鷲

天空へと遙かに聳え立ったその断崖に、
巣を置き据ゑ、光陰を重ね過しては、
眼上遙かに、亦、眼下遠く　果しなく
廣がりゆく大自然の息吹の中に飛び立ち
上空から
雷光（霆）の如くに
急降下しながら……
空に、
海に、
陸に、

若き人へ

他人が自分に対して、どういうことをしてくれるかを問うのではなくて、自分が自分の人生に対して、なにができ得るかを自らに問うてほしい。また、他人が自分に対して、どういうことをしてくれたかを問うのではなくて、自分が自分の人生に対して、なにができ得たかを自らに問うてほしい。……

オリンピック競技

多種多様に満ちたスポーツ競技をあれこれ観ながら、いつも感じることは、なぜか同じような想いであり、――ある目的に向かって、生き生きと躍動していく人間の姿こそ、美しい……。そこにはむだな動きもむだな飾りもそしてむだな言葉もない。あるのは長い時間と忍耐とたゆまぬ努力によって鍛え抜かれた肉体と精神とが今、己れに挑み、己れと闘い、

完　全　版

如　月　翔　悟　著

「罪と罰」

（ドストエフスキー原作）

主人公（ラスコーリニコフ）は、次のような生活をしていた。つまり、「……彼の部屋は、高い五階建ての屋根裏にあり、低い天井や狭苦しい部屋は、心や頭を圧しつけて、僕は、どんなにあの狭苦しい部屋を憎んだだろう。しかし、そこを出ようとはしなかった。わざと出なかったんだ。夜も、昼も、外へ出ようともせず、働こうともせず、物を食おうとさえしないで、始終寝そべってばかりいた。また、勉強をしなければいけないのに、本は売り飛ばしてしまった。僕はむしろ、寝て考えることがすきだった。そして終始考えていた。しかも、いろんな変てこな夢を見ていた。その頃からである。あの『考え』（老婆殺し）が浮かんできたのは。

彼は、あてどもなく迷っていた。ほんとにあれがおれに出来ることだろうか？あれがまじめな話だろうか？　最初、あの「考え」（老婆殺し）が浮かんだ時には、自分でもこの空想を信じてはいなかった。それが、ひと月たった今では、その「醜悪な」空想を、一つの計画として考えることに慣れてしまった。現に今、その計画の瀬踏みをするために、七月の暑い夜、こうして歩いているのだった。

さて、目的の金貸しの老婆のアパート（四階）へと到着をし、中には意地悪そうな鋭い眼をした、六十恰好の老婆がいた。彼は、室内の様子を記憶して部屋から出ると、ああ、この穢らわしさ、自分にはとてもできないと思うのであった。

それは、まるで「運命」に導かれるように、遠まわりをして草市場を通ったとき、偶然にも老婆の「妹」（リザヴェータ）を見かけ、商人夫婦との会話を、たまたま耳にして、「……彼は知ったのだ。しかもふいに、偶然に、まったく思いがけなく知ったのである。あすの晩、きっちり七時に、あの老婆にとって唯一の同居人である妹のリザヴェータが、うちにいないということを、しぜん老婆は、晩の七時には、一人きりでうちにいるだろうということを……」。まさに「この瞬間」、すべてが決定づけられてしまった。彼の「迷い」は、一瞬にして消えて、「……一切がふいに、絶望的に決定されてしまったのである。……」

そして、翌日の夜、その「老婆殺し」は実行されたのであ

決　定　版

如　月　翔　悟　著

オスカー・ワイルドの世界

サロメ

マルコ伝

ヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤをめとったが、そのことで、ヨハネを捕えて牢につないだことがあった。それは、ヨハネがヘロデに、「……兄弟の妻をめとのは、よろしくない」と言ったからである。そのため、ヘロデヤは、ヨハネを恨み、彼を殺そうと思ったが、出来ないでいた。

マタイ伝

ヘロデの誕生祝いがあった時、王妃ヘロデヤの娘が満座の中で舞を舞い、ヘロデを喜ばせた。そのためヘロデは、娘に「……願うものは何でもやろう」と誓った。娘は、母の入れ知恵で、「……洗礼者ヨハネの首を盆にのせて、今ここに頂きとうございます」と言った。王は非常に困ったが、……

サロメの登場

あそこはいや。とても我慢できない。どうして王さまはあたしを見てばかりいるのだろう。母上の夫ともあろうかたが、あのような目で私を見るなんて！　……すると、古井戸の中から、突然、ヨカナーンの声がして、「……主、来たりたまふ！　人の子は来たりたまふ。……」と叫ぶのであった。

サロメとヨカナーン

王女（サロメ）は、「……お前の口に口づけさせておくれ」と言うと、ヨカナーンは、「……不義の子よ、世にお前を救い得る者はただ一人しかおらぬ。おれの言ったあの男だ。その男を探し求めるがいい。岸辺に膝まづき、その名を呼ぶがいい。罪の許しを乞うがいい」と言うのであった。……

決定版

如月翔悟著

刺青

高野聖　変身

（サロメ付）

さて、清吉という若い刺青師の腕利きがあった。

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込むことであった。彼の気分に適った味わいと調子の女性は容易に見つからなかった。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく過ぎようとしていた。

丁度四年目の夏のとある

しかも、その女性は、男性に従順に傅くような女性ではなく、むしろ男の生血で肥え太り、男のむくろを踏みつけるような、女の中の女を探し求めていたということである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、その光輝ある美女の肌に刺り込みたいと願った「絵柄」こそは、まさに「女郎蜘蛛」であったから

山また山という奥深い山を越えて、旅の僧は、名代の天生峠へと向かっていたが、その歩む山道では、夏の暑さと草いきれのなか、様々なヘビや雨が降るがごとき数多くの山蛭に、悩まされながらも、やがて、その峠には孤屋（一軒家）があり、そこには、白痴の少年と、ものやさしい婦人と、もう一人、親仁（下男）が

そして、月夜の下、旅僧が身を屈めて、川の水で二の腕を洗っていると、婦人は、「……すっぱり裸体になってお洗いなさいまし、私が流して上げましょう」といって、旅僧の着ているものを脱がせ、そして、背中の山蛭の傷を見て驚き、両方の肩から、背中、横腹、臀にさらさら水をかけては、手は綿のように優しくさす

例えば、『変身』というカフカの有名な作品があるが、それは、ある日の朝、目覚めてみたら、自分の「姿」が大きな毒虫に変身していたという話である。もちろん、そのようなことは、現実には起こりようのないことではあるが、しかし、自分の「姿・形」が、ある日、突然、いわゆる「変身」するというようなことは、現実にはいくらでもあ

ヘロデの誕生祝いがあった時、王妃ヘロデヤの娘が満座の中で舞を舞い、ヘロデを喜ばせた。そのためヘロデは、娘に「……願うものは何でもやろう」と誓った。娘は、母の入れ知恵で、「……洗礼者ヨハネの首を盆にのせて、今ここに頂きとうございます」と言った。王は非常に困ったが、いったん誓ったのと、また列座の人たちの手前、少女

決　定　版

如　月　翔　悟　著

谷崎潤一郎の世界

鍵

（第一部）

一月一日

僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関すること、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたから

一月四日

今日私は珍しい事件に出遇った。三か日の間書斎の掃除をしなかったので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、……

一月二十八日

今夜突然妻が人事不省になった。木村が来て、四人で食事を囲んでいる最中に彼女が何処かへ立って行った。妻はブランデーが過ぎると時々中座して便所に隠れていることがあるので、敏子が捜すと、妻は風呂場に濡かったまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていた。

一月二十九日

僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う慾望に燃えていたのだった。僕はもう一度彼女の衣類を全部何から何まですべて剥ぎ取って、素っ裸にして仰向かせ、蛍光灯とフローアスタンドの白日の下に横たえた。そして、地図を調べるように詳細に彼女を調べ始めた。

決定版

如月翔悟 著

谷崎潤一郎の世界

鍵

（第二部）

一月一日

僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関すること、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたから

一月四日

今日私は珍しい事件に出遇った。三か日の間書斎の掃除をしなかったので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、……

一月二十八日

今夜突然妻が人事不省になった。木村が来て、四人で食事を囲んでいる最中に彼女が何処かへ立って行った。妻はブランデーが過ぎると時々中座して便所に隠れていることがあるので、敏子が捜すと、妻は風呂場に潰かったまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていた。

一月二十九日

僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う慾望に燃えていたのだった。僕はもう一度彼女の衣類を全部何から何まですべて剥ぎ取って、素っ裸にして仰向かせ、蛍光灯とフローアスタンドの白日の下に横たえた。そして、地図を調べるように詳細に彼女を調べ始めた。

決定版

如月翔悟 著

谷崎潤一郎の世界

鍵

（前半部）

一月一日

僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関すること、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたから

一月四日

今日私は珍しい事件に出遇った。三か日の間書斎の掃除をしなかったので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、……

一月二十八日

今夜突然妻が人事不省になった。木村が来て、四人で食事を囲んでいる最中に彼女が何処かへ立って行った。妻はブランデーが過ぎると時々中座して便所に隠れていることがあるので、敏子が捜すと、妻は風呂場に濡かったまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていた。

一月二十九日

僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う慾望に燃えていたのだった。僕はもう一度彼女の衣類を全部何から何まですべて剥ぎ取って、素っ裸にして仰向かせ、蛍光灯とフローアスタンドの白日の下に横たえた。そして、地図を調べるように詳細に彼女を調べ始めた。

決定版

如月翔悟 著

谷崎潤一郎の世界

鍵

（第三部）

一月一日

僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関すること、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたから

一月四日

今日私は珍しい事件に出遇った。三か日の間書斎の掃除をしなかったので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、……

一月二十八日

今夜突然妻が人事不省になった。木村が来て、四人で食事を囲んでいる最中に彼女が何処かへ立って行った。妻はブランデーが過ぎると時々中座して便所に隠れていることがあるので、敏子が捜すと、妻は風呂場に潰かったまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていた。

一月二十九日

僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う慾望に燃えていたのだった。僕はもう一度彼女の衣類を全部何から何まですべて剥ぎ取って、素っ裸にして仰向かせ、蛍光灯とフローアスタンドの白日の下に横たえた。そして、地図を調べるように詳細に彼女を調べ始めた。

決定版

如月翔悟 著

谷崎潤一郎の世界

鍵

（第四部）

一月一日

僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関すること、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたから

一月四日

今日私は珍しい事件に出遇った。三か日の間書斎の掃除をしなかったので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、……

一月二十八日

今夜突然妻が人事不省になった。木村が来て、四人で食事を囲んでいる最中に彼女が何処かへ立って行った。妻はブランデーが過ぎると時々中座して便所に隠れていることがあるので、敏子が捜すと、妻は風呂場に潰かったまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていた。

一月二十九日

僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う慾望に燃えていたのだった。僕はもう一度彼女の衣類を全部何から何まですべて剥ぎ取って、素っ裸にして仰向かせ、蛍光灯とフローアスタンドの白日の下に横たえた。そして、地図を調べるように詳細に彼女を調べ始めた。

決定版

如月翔悟 著

谷崎潤一郎の世界

鍵

（最終部）

一月一日

僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関すること、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたから

一月四日

今日私は珍しい事件に出遇った。三か日の間書斎の掃除をしなかったので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、……

一月二十八日

今夜突然妻が人事不省になった。木村が来て、四人で食事を囲んでいる最中に彼女が何処かへ立って行った。妻はブランデーが過ぎると時々中座して便所に隠れていることがあるので、敏子が捜すと、妻は風呂場に潰かったまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていた。

一月二十九日

僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う慾望に燃えていたのだった。僕はもう一度彼女の衣類を全部何から何まですべて剥ぎ取って、素っ裸にして仰向かせ、蛍光灯とフローアスタンドの白日の下に横たえた。そして、地図を調べるように詳細に彼女を調べ始めた。

決定版

如月翔悟 著

谷崎潤一郎の世界

鍵

（後半部）

一月一日

僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関すること、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたから

一月四日

今日私は珍しい事件に出遇った。三か日の間書斎の掃除をしなかったので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、……

一月二十八日

今夜突然妻が人事不省になった。木村が来て、四人で食事を囲んでいる最中に彼女が何処かへ立って行った。妻はブランデーが過ぎると時々中座して便所に隠れていることがあるので、敏子が捜すと、妻は風呂場に潰かったまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていた。

一月二十九日

僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う慾望に燃えていたのだった。僕はもう一度彼女の衣類を全部何から何まですべて剥ぎ取って、素っ裸にして仰向かせ、蛍光灯とフローアスタンドの白日の下に横たえた。そして、地図を調べるように詳細に彼女を調べ始めた。

決定版

如月翔悟 著

谷崎潤一郎の世界

鍵

（完全版）

一月一日

僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関すること、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたから

一月四日

今日私は珍しい事件に出遇った。三か日の間書斎の掃除をしなかったので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、……

一月二十八日

今夜突然妻が人事不省になった。木村が来て、四人で食事を囲んでいる最中に彼女が何処かへ立って行った。妻はブランデーが過ぎると時々中座して便所に隠れていることがあるので、敏子が捜すと、妻は風呂場に潰かったまま浴槽の縁に両手を掛け、その上に顔を打つ俯せにして睡っていた。

一月二十九日

僕は、いつかは蛍光灯の明かりの下に妻の全裸体を曝してみたいと云う慾望に燃えていたのだった。僕はもう一度彼女の衣類を全部何から何まですべて剥ぎ取って、素っ裸にして仰向かせ、蛍光灯とフローアスタンドの白日の下に横たえた。そして、地図を調べるように詳細に彼女を調べ始めた。

決定版

如月翔悟 著

鍵
と
サロメ

（完全版）

一月一日

僕は今年から、今日まで日記に記すことを躊躇していたような事柄をも敢て書き留めることにした。僕は自分の性生活に関すること、自分と妻との関係については、あまり詳細なことは書かないようにして来た。それは妻がこの日記帳を密かに読んで腹を立てはしないかということを恐れていたから

一月四日

今日私は珍しい事件に出遇った。三か日の間書斎の掃除をしなかったので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしに這入ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、……

マルコ伝

ヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤをめとったが、そのことで、ヨハネを捕えて牢につないだことがあった。それは、ヨハネがヘロデに、「……兄弟の妻をめとのは、よろしくない」と言ったからである。そのため、ヘロデヤは、ヨハネを恨み、彼を殺そうと思ったが、出来ないでいた。

マタイ伝

ヘロデの誕生祝いがあった時、王妃ヘロデヤの娘が満座の中で舞を舞い、ヘロデを喜ばせた。そのためヘロデは、娘に「……願うものは何でもやろう」と誓った。娘は、母の入れ知恵で、「……洗礼者ヨハネの首を盆にのせて、今ここに頂きとうございます」と言った。王は非常に困ったが、……

決定版

如月翔悟 著

シェイクスピアの世界

ハムレットⅢ

（第一幕）

第一幕

一月もたたないうちに、あのお母さんが、叔父さんと結婚してしまった。ああ、理性の力を持たない獣でさえ、もう少し長く喪に服したろうに、（中略）、破倫の床へあのように素早く急いで行くなんて、全くけしからん罪の早業だ！　よくないことだ、断じてよいことにはならないぞ！　……

第二幕

部屋で縫い物をしていますと、おとう様、ハムレット様が、上着の胸のひも結ばず、帽子もかぶらず、汚れた靴下は、止めひもも締めず、お顔色はシャツのように青ざめ、両膝はガタガタ震え、まるで地獄から抜け出し、恐いことを告げにきた人のように、それは哀れっぽい顔付で、私の前に現れた

第三幕

生きるべきか、
死ぬべきか、
それが問題だ。
暴虐な運命の矢玉を心にじっと
堪えるのと、海と寄せくるもろも
ろの困難に剣をとって立ち向い、
抵抗してこれを終熄させるのと、
どちらが立派な態度なのか？

?

第五幕

ハムレット、君の命はもうない。この世のどんな薬も君を治すことはできない。君の命はあと三十分と持たない。そして、君を陥れた張本人の道具は君の手の内にある。そら、その毒を塗った細身だ。この悪巧みの因果は廻り廻って、僕自身の身の上に振りかかってきた。僕は倒れて、二度と立てない。

決定版

如月翔悟著

シェイクスピアの世界

ハムレットⅢ

（第二幕）

第一幕

一月もたたないうちに、あのお母さんが、叔父さんと結婚してしまった。ああ、理性の力を持たない獣でさえ、もう少し長く喪に服したろうに、（中略）、破倫の床へあのように素早く急いで行くなんて、全くけしからん罪の早業だ！　よくないことだ、断じてよいことにはならないぞ！　……

第二幕

部屋で縫い物をしていますと、おとう様、ハムレット様が、上着の胸のひも結ばず、帽子もかぶらず、汚れた靴下は、止めひもも締めず、お顔色はシャツのように青ざめ、両膝はガタガタ震え、まるで地獄から抜け出し、恐いことを告げにきた人のように、それは哀れっぽい顔付で、私の前に現れた

第三幕

生きるべきか、
死ぬべきか、
それが問題だ。
暴虐な運命の矢玉を心にじっと堪えるのと、海と寄せくるもろもろの困難に剣をとって立ち向い、抵抗してこれを終熄させるのと、どちらが立派な態度なのか？

?

第五幕

ハムレット、君の命はもうない。この世のどんな薬も君を治すことはできない。君の命はあと三十分と持たない。そして、君を陥れた張本人の道具は君の手の内にある。そら、その毒を塗った細身だ。この悪巧みの因果は廻り廻って、僕自身の身の上に振りかかってきた。僕は倒れて、二度と立てない。

決定版

如月翔悟著

シェイクスピアの世界

ハムレットⅢ

（上巻）

第一幕

一月もたたないうちに、あのお母さんが、叔父さんと結婚してしまった。ああ、理性の力を持たない獣でさえ、もう少し長く喪に服したろうに、（中略）、破倫の床へあのように素早く急いで行くなんて、全くけしからん罪の早業だ！　よくないことだ、断じてよいことにはならないぞ！　……

第二幕

部屋で縫い物をしていますと、おとう様、ハムレット様が、上着の胸のひも結ばず、帽子もかぶらず、汚れた靴下は、止めひもも締めず、お顔色はシャツのように青ざめ、両膝はガタガタ震え、まるで地獄から抜け出し、恐いことを告げにきた人のように、それは哀れっぽい顔付で、私の前に現れた

第三幕

生きるべきか、
死ぬべきか、
それが問題だ。
暴虐な運命の矢玉を心にじっと堪えるのと、海と寄せくるもろもろの困難に剣をとって立ち向い、抵抗してこれを終熄させるのと、どちらが立派な態度なのか？

?

第五幕

ハムレット、君の命はもうない。この世のどんな薬も君を治すことはできない。君の命はあと三十分と持たない。そして、君を陥れた張本人の道具は君の手の内にある。そら、その毒を塗った細身だ。この悪巧みの因果は廻り廻って、僕自身の身の上に振りかかってきた。僕は倒れて、二度と立てない。

決定版

如月翔悟著

シェイクスピアの世界

ハムレットⅢ

中巻（第三幕）

第一幕

一月もたたないうちに、あのお母さんが、叔父さんと結婚してしまった。ああ、理性の力を持たない獣でさえ、もう少し長く喪に服したろうに、（中略）、破倫の床へあのように素早く急いで行くなんて、全くけしからん罪の早業だ！　よくないことだ、断じてよいことにはならないぞ！　……

第二幕

部屋で縫い物をしていますと、おとう様、ハムレット様が、上着の胸のひも結ばず、帽子もかぶらず、汚れた靴下は、止めひもも締めず、お顔色はシャツのように青ざめ、両膝はガタガタ震え、まるで地獄から抜け出し、恐いことを告げにきた人のように、それは哀れっぽい顔付で、私の前に現れた

第三幕

生きるべきか、
死ぬべきか、
それが問題だ。
暴虐な運命の矢玉を心にじっと堪えるのと、海と寄せくるもろもろの困難に剣をとって立ち向い、抵抗してこれを終熄させるのと、どちらが立派な態度なのか？

?

第五幕

ハムレット、君の命はもうない。この世のどんな薬も君を治すことはできない。君の命はあと三十分と持たない。そして、君を陥れた張本人の道具は君の手の内にある。そら、その毒を塗った細身だ。この悪巧みの因果は廻り廻って、僕自身の身の上に振りかかってきた。僕は倒れて、二度と立てない。

決定版

如月翔悟著

和歌と俳句の世界

（古池や、柿食へば、辞世の句、西行の歌）

古池や
蛙飛び込む
水の音

さて、この俳句の、一体、どこがどのように優れているのかと問えば、それは、長く閑寂とした状態であったであろう「古池」の「水面」に、突然、その長い閑寂をうち破る「出来事」が起きたということである。

柿食へば
鐘が鳴るなり
法隆寺

この「作品」は、明治二十八年、日清戦争に新聞記者として従軍し、その帰途、喀血（かっけつ）して神戸病院、須磨や故郷等を経て、東京へ帰ろうと大阪迄来た時、奈良で十月二十六日から三日間遊んだ時にできた句とされる。

例えば、われわれ人間は、一方では、人間（或いは俗世間）との関わりを強く望みながらも、もう一方では、なぜか一人（或いは孤独）になりたいという欲求があるわけである。それでは、なぜ一人（或いは孤独）になりたいと思うのかと言えば、それは、言うまでもなく、人間（或いは俗世間）との関わりのなかで、いろ

富士山の「美」というのは、「富士山」そのものと、そのまわりの様々な「風景」（或いは「背景」）からなり立っているということであり、それを当時の「風景」（様々な庶民の生活や風俗その他）などとも一緒に実際に「絵」にして見せてくれているのが、まさに葛飾北斎の「富嶽（ふがく）三十六景」（プラス十景）になるかと思う。…

辞世の句（三句）

風さそふ花よりもなほわれ
はまた……
浅野内匠頭

願はくば花のしたにて春
死なん……
西行法師

つひにゆく道とはかねて聞
きしかど……
在原業平

西行（二句）

心なき身にも
あはれは知られけり
鴫（しぎ）たつ沢の
秋の夕ぐれ

風になびく
ふじのけぶりの
空にきえて
行方もしらぬ
わが思ひかな

決定版

如月翔悟著

三つの充実と人間の三大欲

（スランプ付）

（欲と情　子孫保存欲　変身　笑い　友情　自信　漫画の魅力）

例えば、今日、われわれ人間にとって、一体、どのように生きることが、最も「幸せ」な生き方であるかという問いに対して、誰もが心の底から納得できるようなものとして、ここでは、いわゆる「三つの充実」という考え方を、参考程度に書き留めてみたいと思う。

それは、「仕事、生活、遊び」の、この「三つの充実」

例えば、晩年のゲーテも、「……偉大なものは、ひたむきで、純真で、夢遊病者のような創造力によってのみ産み出されるものである。」（『ゲーテとの対話』下）という言葉を残しているが、この言葉なども、まさに超「自我」の状態からこそ、真にすぐれたものが生み出されるということを表現しているものである。……

例えば、動物の「三大欲」とは、一体、何かと問えば、それは、まさに「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」であり、それ以外、全く考えられない。一方、われわれ人間の「三大欲」というのは、「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」というよりは、むしろ「物欲」（金銭欲）とした方が、今日の実情に合ったものではないかと思

例えば、カラオケなどで、ある歌手の歌を身ぶりも歌い方も、それこそ、できるだけ本物そっくりに真似て（つまり、その人になりきって）、実際に歌を歌ってみると、その歌手の「心の動き」や「呼吸の仕方」、また、なぜ、ここはこういう顔の表情や声の出し方、或いは身振りになるのかが　わが身に感じて、実感として理

例えば、この地球上のありとあらゆる動植物は、何よりも「子孫を残す」ことを最優先させている。もちろん、「個体維持」も大事なことではあるが、それ以上に最優先させているものは、まさに「子孫を残す」ことであり、しかも、より強い「子孫」、例えば、動物界では、オス同士が闘い、必ず、勝ったオスとメスとが交尾し、より強い「子孫」を

例えば、漫画とは、ワンカット、ワンカットの、いわば「静止画」を、読む人の「頭の中」で自然とつなぎ合わせて、いわば「映像の流れ」のようにして内容を理解して行くものであり、また、漫画の最大の特徴は、特に「強調したい場面」、「決定的瞬間」などを、極めて大きな「アップ画面」で、まさに大迫力の「激写」風に表現することである

決　定　版

如　月　翔　悟　著

言葉と読書

映像化時代

（インターネット時代）

言葉と読書

古今東西を問わず、世に存在する膨大な量の「書籍」の中から、どのような「書物」とめぐり逢い、その「書物」とどのように関わり、そして、どのような影響を受けるかは、時として、その人にとっては「運命的な出逢い」ともなり得るものである。 それは、特に若い時にこそ、起こり得ることであ

映像化時代

さて、「映像化時代」というのは、今までのような「活字」を中心とした伝達方法ではなく、例えば、映画、テレビ、ＤＶＤ、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、動画（写真）、その他、そのような様々な「映像」（写真）などを使っての伝達方法がより多くなる時代のことである。……

みなさんは、本の読み方を学ぶには、どんなに時間と労力がかかるかを御存知ない。私は、そのために八十年を費やしたよ。しかし、まだ今でも目的に到達しているとは言えないな。（ゲーテとの対話）

人はあまりにもつまらないものを読み過ぎているよ。時間を浪費するだけで、何も得るところがない。そもそも人は、いつも驚嘆するものだけを読むべきだ。私が青

インターネット時代

例えば、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、その他、そのような「インターネット」の普及にはめざましいものがあるが、それでは、従来型の「マスメディア」（新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他）と、今日型の新しい「インターネット」との「決定的な違い」は一体何かと問えば、

決　定　版

如　月　翔　悟　著

恋愛と売春

（愛着付き）

（愛着について、作者と作品、芸術鑑賞）

例えば、プラトンの『饗宴』という著作のなかでアリストパネスという登場人物が、いわゆる「恋（エロス）」について非常に有名な話（演説）をする箇所があり、それは、もともと人間は三種類あった。今日の男女二種類のみでなく、第三の者がその上に存在していた。つまり、『アンドロギュノス』（男女）というのが一種をなしていて、容姿、

さて、売春の問題は、実に古くて新しい問題であるとともに、未だこれという「最終的な答え」が得られないままに、今日にまで来ているのではないかと思う。

そこで、「売春」について、考えてみたいと思うが、「売春」とは、一体、何なのか？　それを辞書で引いてみると、そこには、「……女子が報酬を得て男子に身を任せること」とある。その場合、「愛情関係」は、基本的に

例えば、ある人が、昔であれば、蓄音機などで、その人の好きな「音楽」を何度も何度も徹底的に聴いたとすれば、その人の好きなその「音楽」の「原音」は、まさにその蓄音機から醸し出される特有の「音」であり、そして、われわれ人間が、ほんとうの意味で「愛着」を持つのは、まさにその「原音」なのである。そして、その「原音」に

例えば、自分の「心の中」に内在する様々な「考えや想い＋漠然としたもの」と、その出来上がった「作品」とがぴったりと一つに重なり合えば、それが、まさに「完成」の状態であるが、それが少しでも「ズレ」ていれば、その「作品」は、その作者にとっては真の「完成品」とはならず、それゆえ、そのことがいつも「頭の中」（或いは「心の中」）に残っていて、この「部分」

決　定　版

如　月　翔　悟　著

「思索」の森

(「哲学的思考」の実践)

「夢」の定義

例えば、「夢」というのは、一体、何かと問えば、それは、一つの「目標」であり、その「目標」は、自分が向かって行きたい「方向」であるとともに、自分が辿り着きたい「地点」でもあるということである。そして、それを可能にしてくれるものは、一体、何かと問えば、

「希望」

例えば、パンドラの箱を開けて、最後に残ったものは、まさに「希望」であったが、その「希望」さえあれば、われわれは、まだ十分に生きていける。しかし、その「希望」さえも絶たれてしまうと、それは、まさに「絶望」へと堕ちていくしかない。しかし、われわ

「充実感」

例えば、われわれ人間というのは、ある目標(或いは「ある夢」)などに向かって、一生懸命に努力しているような時こそは、その人にとってはまさに最も「充実」している時を過ごしている時であるとともに、その「ある目標」なり「ある夢」などが達成された時に

「情熱」

例えば、「情熱」というのは、われわれ人間の「知・情・意・生理(本能)、その他」等、それらすべてをひっくるめて激しく燃え上がる「心的エネルギーの炎」であるが、それには、どちらかと言えば、「+」の方向に向かっていく、「一般的な情熱」と「意志的な情熱」

「成長」(脱皮)

例えば、自分というものを本当の意味で、真に「成長」させたいと「心の底」からそう願うならば、その「方法」は、一つしかない。それは、自分の「限界」で燃え尽きることである。ほかに「方法」はない。そして、その燃え尽きた「灰の中」から、新たな「生命」を授かり、再び、甦(よみがえ)

「死に場所」

例えば、『葉隠』という著作のなかに、「……武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」という余りにも有名な「言葉」があるが、この言葉を敢えて現代風にアレンジして考えてみると、それは、次のようになるかと思う。

まず、われわれ人間というのは、やがては死んでいく

決定版

如月翔悟著

夏目漱石の世界

こころ

第一部（先生と私）

上　先生と私

私が初めて先生とめぐり逢ったのは、夏の鎌倉の海岸であった。先生は、外から見ると、終始静かであり、落ち着いていたが、時として変な曇りがその顔を横切ることがあった。先生には美しい奥さんがいたが、子供はなく、大学出身でありながら、仕事もしないでぶらぶら遊んで

中　両親と私

私という人は、大学を無事に卒業をしたので、本や卒業証書などを持って、汽車で故郷に帰る。その実家での両親、それに父親の病状悪化で駆けつける兄と妊婦の妹代わりの夫との対話などが主であり、あとは、先生からの電報と手紙、私からの二、三通の手紙という内容である。

下　先生の遺書

……私は何千万といる日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいといったから。……

この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。

下　先生の遺書

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍の人から鞭たれたいとまで思ったこともあります。こうした階段

決定版

如月翔悟　著

夏目漱石の世界

草枕

山途を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。――主人公の画工は、その山途を辿りながら、その画工の「頭の中」(或いは「心の中」)に想い浮かんで来る様々な「文学論」や「芸術観」などを想いつくままに語るという内容であり、それが「冒頭から全般」に

さて、主人公である「画工」の、山を越えて下りていく先の今宵の宿は、那古井の温泉場であった。その温泉場へと向かう道の「途中」(峠)で、雨に降られて茶店へと駆け込むことになるが、そこで、茶店の「お婆さん」と出逢い、その「お婆さん」との「会話」のなかで、いわゆる「お嬢さんの話」が初めて出て来るという展開になるの

寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。段々を、四つ下りると、八畳ほどな風呂場へ出る。余は湯船のふちに仰向の頭を支えて、身を漂わせてみる。……

突然、風呂場の戸が開いた。立ち上がる湯気により、男とも女とも判別し難いが、黒いものが一歩を下へ移した時、輪郭が少しく浮かび上がり、余は女と二人、この風呂場の中にあることを覚った。

さて、山里の朧に乗じてそぞろ歩き、観海寺の石垣を登り始める。とうとう上まで登り詰め、その石段の上で想い出したのは、昔、鎌倉のお寺で、余は上る、坊主は下る。そのすれ違いざまに、坊主はただちに、「……なにもありませんぞ」と云い捨てて、すたすたと降りて行った。その坊主の所作が気に入ったのである。一方、「……世の中はしつこい、毒々しい、

決定版

如月翔悟著

夏目漱石の世界

草枕とこころ

（完全版）

山途を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

主人公の画工は、その山途を歩む途すがら、その画工の「頭の中」（或いは「心の中」）に想い浮かんで来る様々な「文学論」や「芸術観」などを想いつくままに語るという内容であり、……

主人公である「画工」の、山を越えて下りていく先の今宵の宿は、那古井の温泉場であった。その温泉場へと向かう道の途中（峠）で、雨に降られて茶店へと駆け込むことになるが、そこで、茶店の「お婆さん」と出逢う。そして、その「お婆さん」との「会話」のなかで、いわゆる「お嬢さんの話」が初めて出て来るという展

寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。段々を、四つ下りると、八畳ほどな風呂場へ出る。余は湯船のふちに仰向の頭を支えて、身を漂わせてみる。

突然、風呂場の戸が開いた。立ち上がる湯気により、男とも女とも判別し難いが、黒いものが一歩を下へ移した時、輪郭が少しく浮かび上がり、余は女と二人、この風呂場の中にあることを覚った。

まず、「先生と私」という第一部の内容は、私（或いは「奥さん」）という第三者から見た（つまり「外から見た」）時の「先生」という存在の「行動（言動）」の主な描写であり、それは、いわば「外的事実」であり、例えば、その人の「身体的特徴」（容姿・容貌）をはじめ、その時々に表れる「先生」という人間の「顔の表

一方、「先生の遺書」という第三部の内容は、先生（自分）という第一者から見た（つまり「内から見た」）時の「先生」（自分自身）という存在の「内的世界」の描写であり、それは、いわば「内的事実」であり、例えば、自分という人間の「頭の中」（或いは「心の中」）に生じる様々な「思いや考え、その他」の描写である。

「先生」という人は、まさに「恋は罪悪である」と言っている。それは、一体、なぜなのか？　それは、人を本気で愛すれば、必ず、誰かが傷つく。他を傷つけずにはおかないものだからである。誰もが「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）というものを、多かれ少なかれ、背負うことになる。だからこそ、「恋愛は罪悪である」とともに、人

決定版

如月翔悟著

アンデルセンの世界

人魚姫・その他

前半部（マッチ売りの少女、人魚姫、裸（はだか）の王様）

マッチ売りの少女

それは、大変寒い日でした。雪が降っていましたし、あたりは、もう暗くなりはじめました。それは、また、一年の一ばんおしまいの夜、つまり、大みそかの晩でした。この寒い、そして、暗いなかを、一人のみすぼらしい身なりの年のいかない少女が一人、帽子をかぶらず、おまけにはだしで、……

人魚姫

さて、深い海の底の一番深い所には人魚の王様のお城が建っていました。城に住んでいる王様は、もう何年も前からやもめ暮らしをしていて、お年寄りのお母様が一切のおうちの世話をしていました。姫たちはみなで六人で、どれもきれいでしたが、分けても末の姫は、一番きれいでした。……

人魚姫

さて、おばあ様は、六人の姫たちに、「……おまえたちが十五になったら、その時には、海の上に浮かび上がって行くのを、許してあげますよ。その時は、岩の上にすわって、お月様の光を浴びながら、そばを通る大きな船を見たり、物や町をながめたりすることができますよ」と言うのでした。……

裸（はだか）の王様

昔、大変着物のお好きな王様がおりました。この方は、美しい新しい着物が、それはそれは大好きで、持っているお金はみんな着物にかけて、いつもきれいに着飾っていました。そして、ご自分の新しい着物を見せびらかすこと以外は、いっさい気にかけたことはありませんでした。そして、一日中、

決定版

如月翔悟著

中島敦の世界

山月記と名人伝

中島敦の『山月記』という作品は、彼の作品の中では、最も有名な「作品」（短編小説）の一つであるが、それは、中国（清朝）の説話集『唐人説薈』の中にある『人虎伝』を元として書かれたものであり、その「内容」を一言で敢えて言えば、それは、まさに「人間が虎に変わってしまった」という、現実にはあり難い話でありながら、今日では、学校の教科書にも登場して、高い人気を得ているものである。

さて、「……隴西の李徴は、博学才穎、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略に帰臥し、人と交を絶って、ひたすら詩作に耽り、その名を死後百年に遺そうとした。だが、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなり、李徴は漸く焦躁に駆られて来た」とあった。三年後、窓の虱が馬のような大きさに見え、その虱に弓を射れば、矢は虱の心の臓を貫いた」。

さて、師から学ぶべき何ものも無くなった時、彼の「心の中」にふとよからぬ考えが浮かんだ。それは、「……今や弓をもって己に敵すべき者は、師の飛衛をおいて他に無い。天下第一の名人となるためには、どうあっても飛衛を除かねばならぬ」と。そこで紀昌は、その機会を密かに狙っていると、

さて、次は『名人伝』であるが、それは、「……趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立て、遙々名人・飛衛を訪ねて、その門に入った」。「……飛衛は新入の門人に、まず瞬きせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織台の下に潜り込んで修行し、二年後、絶えて瞬かぬようになった。次に、虱を一匹己が髪の毛で繋ぎ、それを南向きの窓に懸け、終日睨み暮

決定版

如月翔悟 著

アンデルセンの世界

人魚姫と雪の女王

（マッチ売りの少女、裸（はだか）の王様、みにくいアヒルの子）

マッチ売りの少女

それは、大変寒い日でした。雪が降っていましたし、あたりは、もう暗くなりはじめました。それは、また、一年の一ばんおしまいの夜、つまり、大みそかの晩でした。この寒い、そして、暗いなかを、一人のみすぼらしい身なりの年のいかない少女が一人、帽子をかぶらず、おまけにはだしで、…

人魚姫

さて、深い海の底の一番深い所には人魚の王様のお城が建っていました。城に住んでいる王様は、もう何年も前からやもめ暮らしをしていて、お年寄りのお母様が一切のおうちの世話をしていました。姫たちはみなで六人で、どれもきれいでしたが、分けても末の姫は、一番きれいでした。……

雪の女王

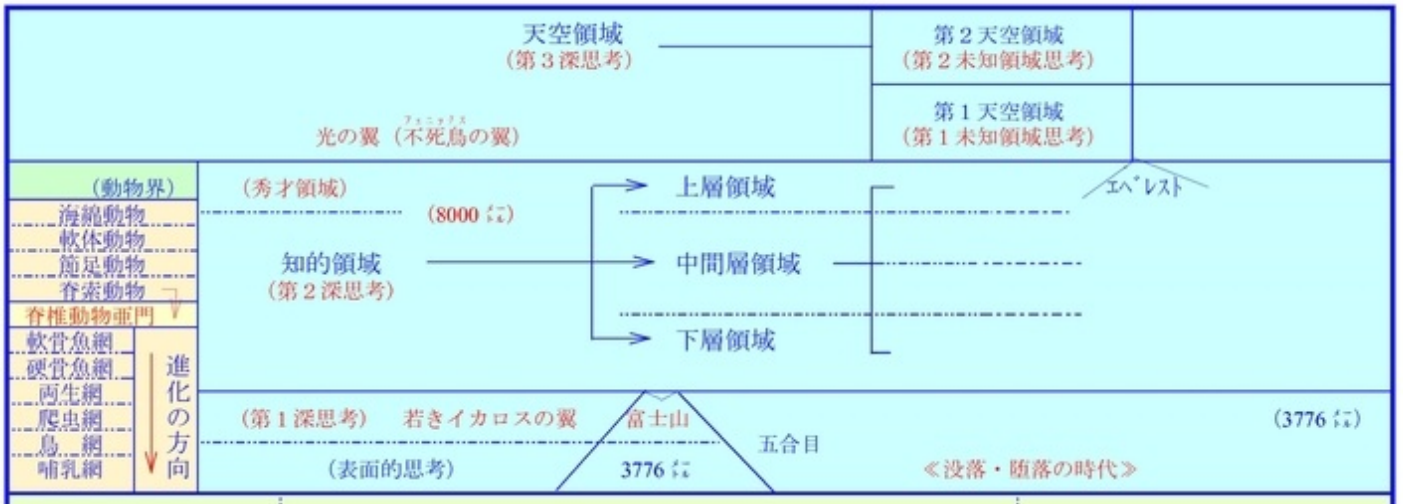
カイは、雪の女王をじっとながめました。雪の女王は、それは美しい人でした。これ以上、賢い、やさしい顔は、考えられませんでした。いつか窓の外から手招きした時のように、氷でできているとは、とても思われません。カイの目には、雪の女王は全く申し分のない美しい人に見えました。…

みにくいアヒルの子

水辺の草むらの中に一羽のアヒルのお母さんが巣の中にすわっていました。そして、卵が一つまた一つと割れて、ひなが生まれ出ましたが、最後の大きな卵だけは手間取りながらも、遂にピヨ、ピヨとたいそう体の大きなみにくい子が生まれ出ました。もしかしたら、七面鳥のひなかも知れないと、…

決定版

如月翔悟 著



より本能的になっていく　　より精神的になっていく

本能的領域	情・知的領域１	情・知的領域２	精神的領域
「本能」の世界 （衝動の世界）	「自我」の世界 （知性・理性・感性などに支配されている世界）		超「自我」の世界 （「純粋自己」）

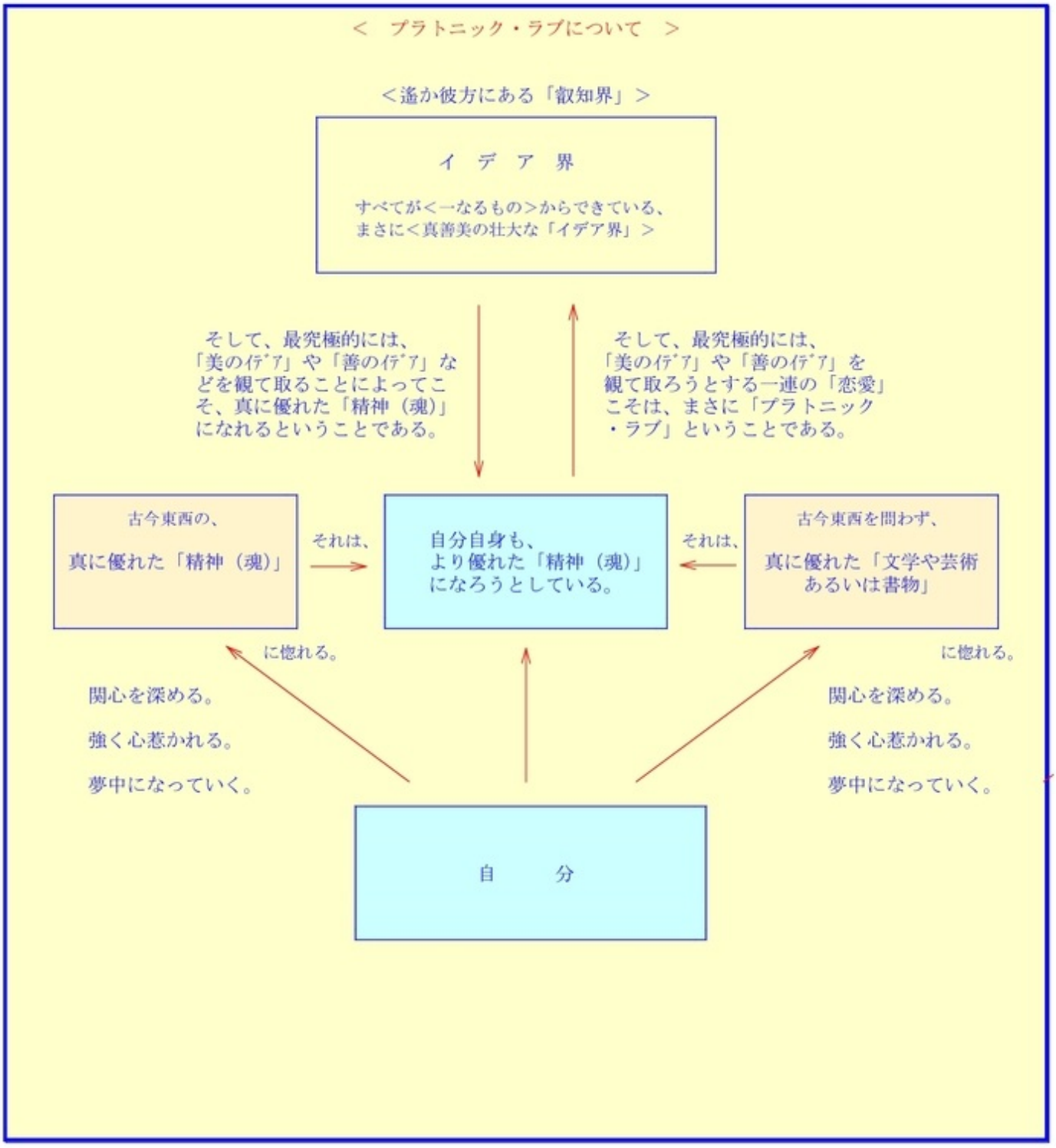
「スランプ状態」　……　想うように超「自我」　の状態になれない。
それが、いわゆる「スランプ」の状態。

「好調の状態」　……　比較的容易に超「自我」の状態になれる。
それが、いわゆる「好調」の状態である。

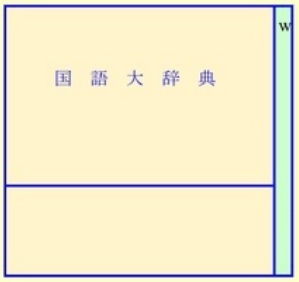
しかし、超「自我」の状態は、そう長くは続かない。
やがて、元の状態、つまり、ふだんの「自我」にもどる。

超「自我」　……　それは、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている、ふだんの雑然とした「自我」の状態を超えて、より密度の高い「純粋自己」の状態になるということである。そして、この時ほど様々な「欲望や感情」などから解放されて、自分本来の「魂」そのもの（つまり「自分自身」）になりきって生きている時はない。そして、そのような状態になって本格的な「思考（思索）活動」に深く溶け入っているような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは、生じやすくなり、未だ人類によって解明されていない人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを、その「思惟界」で観て取れるとともに、真に優れた人類的な「発明、発見、創造、その他」などが生み出されることにもなるということである。

（「本能的自我」）	（「利己的自我」）	（「社会的自我」）	（「純粋自己」）


＜　プラトニック・ラブについて　＞
＜遙か彼方にある「叡知界」＞
イ　デ　ア　界
すべてが＜一なるもの＞からできている、
まさに＜真善美の壮大な「イデア界」＞
そして、最究極的には、
「美のｲﾃﾞｱ」や「善のｲﾃﾞｱ」な
どを観て取ることによってこ
そ、真に優れた「精神（魂）」
になれるということである。
そして、最究極的には、
「美のｲﾃﾞｱ」や「善のｲﾃﾞｱ」を
観て取ろうとする一連の「恋愛」
こそは、まさに「プラトニック
・ラブ」ということである。
古今東西の、
真に優れた「精神（魂）」
それは、
自分自身も、
より優れた「精神（魂）」
になろうとしている。
それは、
古今東西を問わず、
真に優れた「文学や芸術
あるいは書物」
に惚れる。
関心を深める。
強く心惹かれる。
夢中になっていく。
に惚れる。
関心を深める。
強く心惹かれる。
夢中になっていく。
自　　分

（図１）　数多くの言葉（単語）



（図２）　文章にする。

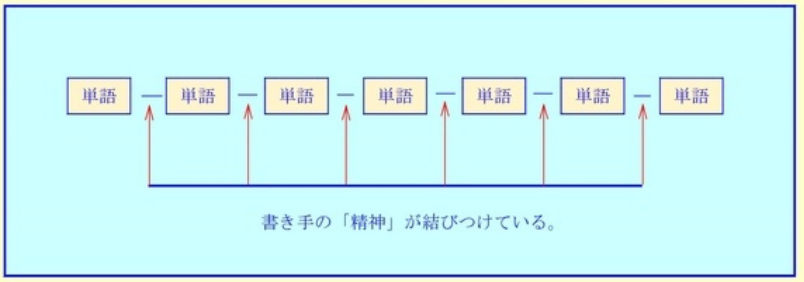


図１のように、単語というのは、もちろん、夜空に輝く星の数ほどはないにしろ、かなり膨大な数に上るだろう。その膨大な数の「単語」のなかから幾つかの単語を選び出して、文章にするのは、すべて書き手の「精神」の働きであるだろう。

もちろん、ふだんわれわれが文章を書く時には、それほど意識して、「言葉」の一つ一つを無数の単語の中から選び出しているという感じはあまりないが、それは、われわれ日本人にとって「日本語」は、まさに「母国語」であり、それゆえ、乳幼児の時から空気のように慣れ親しんでいるために、それほど意識しなくても自然と必要な言葉を選び出しては、その人の思うような文章を書くことができるわけである。しかし、もしも不慣れな外国語で文章を書くような時には、やはり辞書などを引いて、言葉を探したり、あるいは言葉を選んだりすることも多くなるかと思う。そのようにわれわれが文章を書く時には、必ず数多くの「単語」のなかから必要な言葉を選び出すという作業を、誰もが「頭の中」で自然と行なっているということである。

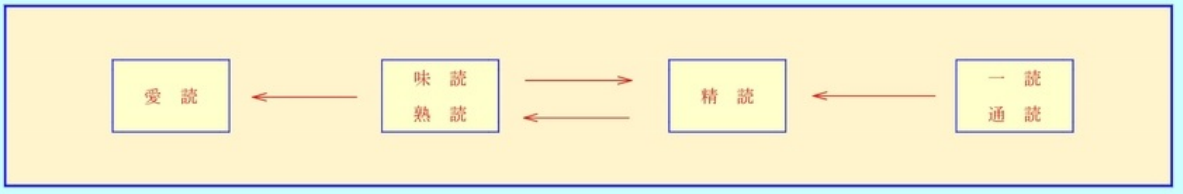
そして、その選び出した幾つかの「単語と単語」とを結びつけて、ある「文章」にするわけであるが、その場合、
その一つ、一つの単語と単語とを結びつけているのは、作者の精神であるだろう。
その一つ、一つの単語と単語との間に流れているのは、作者の精神であるだろう。
また、その文章の背後あるいは奥底に流れているのは、作者の精神であるだろう。

つまり、単語それ自体は、すでに日本語として数多く存在しているので、自分で勝手につくり出して、それをでたらめに使うわけにもいかないだろう。それゆえ、各人に許されているのは、すでにある数多くの「単語」（言葉）のなかから、どのような言葉を選び出し、そして、それらをどのようにつなぎ合わせるか、その言葉の選びと組み立て方（表現の仕方）が主な仕事になるということである。また、単語と単語とを結びつけているのは、もちろん、書き手の「精神の働き」であるが、しかし、文章のなかでは、いわゆる「てにをは」によって結びつけられているわけであるから、その「てにをは」（つまり「助詞」）の使い方にこそ、その人の「心の動き」がとくに表れやすいということである。

つまり、「言葉」の選び方には、その人の「言語感覚」（つまり「言葉」に対する感性）が表れやすく、一方、「言葉」の組み立て方には、その人の「言語感覚」とともに、その人の「思考（思索）の流れ」が表れやすく、そして、「言葉」と「言葉」とを結びつけている「てにをは」には、その人の微妙な「心の動き」が表れやすいということである。

もちろん、文章には全体の流れというものがあり、あまり細かなところばかりにこだわり過ぎて、かえって全体の流れを見失い、書き手の自在な「精神の流れ」や「思考（思索）の流れ」を見失うようではよくないので、やはり細かなところと同時に、全体の流れを見つめながら、――書かれている文章の中に深く溶け入っては、様々に表現されている「言葉の流れなり、言葉の勢いなり、言葉の真意なり、言葉の姿・形、その他」というものを、じっくりと深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」こと。そして、「作者の精神」と「自分の精神」とが深く交わり、終には「一体化」して、いわゆる＜作者の「魂の鼓動（肉声）」をできるだけ生のまま聴くように努力する＞ということが、まさに「狭義の読書」ということになるということである。

《 狭 義 の 読 書 》



イ） 通読する。（まず、ひと通り最後まで読んでみて、どういうことが書いてあるのか、大ざっぱにその内容をつかむこと。）

ロ） 傍線（赤線）などを引く。（特に気に入った箇所や重要だと思うような箇所には、傍線・赤線などを引く。）

ハ） 書き込みを入れる。（その時、想いついたことや関連したことなどを忘れないうちに書き留めておく。）

ニ） 文章を写す。（気に入った文章があれば、それをノートに写してみる、いわば文章の「模写」を行なう。）

ホ） 暗唱する。（特に気に入った文章などは、自分の「心の中」で、あるいは声に出して暗唱してみる。）

ヘ） 考えたことなどをノートに書き留める。（思いついたことや考えたことなどを、ためらわずノートにどんどん書き留める。）

ト） ノートを読み返す。（読み返して、新たに思ったり、考えたりしたことなどを書き留める、また、時には「清書」してみること。）

チ） 疑問や問題点を「心の中」に蓄（たく）えておくこと。（そして、あれは、どういう意味なのか、どういうことなのか、心の中で考えてみる。）

リ） 純粋思考を行なう。（人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを深く厳密に探究するための「純粋思考」を行なう。）

ヌ） 文章を深く味わう。（言葉の流れ、言葉の勢い、言葉の抑揚、言葉の姿・形などを深く味わい、作者の「魂の鼓動《声》」を生のまま聴く。）

ル） 読書百遍。（それが真に優れた書物であれば、読み返す度毎に、何か新しい発見や汲み尽くせないほどの深い内容を宿しているものである。）

ヲ） その他、等々。

決して満足しない精神。	精神の高さ
熱砂のシリア砂漠から、モスクワの雪原にいたるまで、積極的に動きまわった「花崗岩」にも似た強靭な肉体。	肉体の強さ
ほとんど休みなく活動する肉体と精神力。	活動力
ヨーロッパ大陸、その他の地域などをほとんど駆けずりまわった並はずれた行動力。	行動力
いついかなる瞬間、いかなる状況に臨んでも、それに的確に対応し、対処できた実行力。	実行力
絶えず新しい、絶えず豊かな計画を供給し続けている想像力。	想像力
思想と行動の間に、また反省と決断の間に一瞬のためらいもないほどの間髪を入れない決断力。	決断力
全体の動きを敏速にとらえ、臨機応変に対応し得る的確な判断力。	判断力
いつも開悟した状態での思考力。	思考力
絶え間なく続く最高度の精神活動。	精神活動の高さ
わずかな食事。	食事の量
わずかな睡眠（自分の意のままに睡眠量をコントロールできたという）。	睡眠の量

三つの充実

① 1つは、仕事（社会的な活動）を充実させる。

② 1つは、生活（主に家族生活）を充実させる。

③ 1つは、遊び（趣味や娯楽やレジャーなど）を充実させる。

三　つ　の　充　実

（仕事・生活・遊びを充実させる）

1）仕　事　を充実させる。
（社会的な活動を充実させる）

2）生　活　を充実させる。
（主に家族生活を充実させる）

3）遊　び　を充実させる。
（趣味やレジャーなどを充実させる）

「手応え」志向
（心の「手応え」志向）

「幸せ」志向
（心の「幸せ」志向）

「楽しさ」志向
（心の「楽しさ」志向）

心
（情と知と意 ）

動物の「三大欲」と人間の「三大欲」について

動物の「三大欲」 （生理的な欲求） （人間も含める）			人間の「三大欲」 （意欲的な「欲」）		
①	②	③	①	②	③
食　欲	性　欲	睡眠欲	食　欲	性　欲	物欲（金銭欲）
基本的には、「個体維持」から生じる欲求であり、そのために絶えず摂取し続けなければならない。	基本的には、「種族保存欲」から生じる欲求であり、そのために動物たちは命をかけてまでも取り組むことになる。	基本的には、身体が疲れてくれば、「休息欲」や「睡眠欲」などは、自然と生じて来るものである。	いろいろな料理を食べてみたいという欲求とともに、よりおいしいものを愛し求めることにもなる。	種族保存欲だけではなく、いろいろな人との恋愛や性交渉その他などを楽しみたいという欲求にもなる。	実にいろいろなものをほしがるものであるが、そのためには、どうしてもお金が必要不可欠になるということである。

われわれ人間の「三大欲」について

例えば、動物の「三大欲」と言えば、それは、「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」であり、それ以外は、まったく考えられない。そして、われわれ人間も基本的にはまったく「同じ動物」であるので、それゆえ、われわれ人間の「三大欲」も、当然のことながら、「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」になるというのが、今日までの＜一般的な「考え方」＞ではなかったかと思う。もちろん、それは、それで正しい「考え方」ではあるが、それでは、なぜわれわれ人間の「三大欲」を、いわゆる「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」ではなく、敢えて、「食欲」と「性欲」それに「物欲（金銭欲）」としたのかと言えば、それには、次のような非常にはっきりとした理由があるからである。

例えば、われわれ人間の「食欲」というのは、ほかの動物たちのように、目の前にある食べ物をただ黙って食べているというよりは、むしろ、今日はあれが食べたい、あるいはこういうものが食べたいとか、その他、実に様々な「思いや考え」などが生じてくるとともに、そのために、いろいろな食材を買い求めては、それらにいろいろな味付けで調理をして、より食べやすく、また、よりおいしくして食べようとしているわけである。それに加えて、世界中にある実にいろいろな料理なども、できれば食べてみたいというような欲求とともに、同じ料理でも、よりおいしいものを愛し求めるような、そういう非常にはっきりとした意欲的な「欲求」を持っているということである。

また、「性欲」にしても、ほかの動物たちの「性欲」というのは、そのほとんどが、いわゆる「子孫保存欲」のためのものであるが、 われわれ人間の「性欲」というのは、そのような「子孫保存欲」のためだけではなく、実に多岐に渡っているものであり、例えば、今日は、こういうアダルト雑誌やビデオ或いは DVD、その他、そういうものを観てみたいとか、また、誰々が好きだとか嫌いだとか、つき合いとか、デートしたいとか、あるいはこういうセックスがしてみたいとか、その他、実に様々な「思いや考え」などが生じてくるとともに、いろいろな人との恋愛や性交渉その他なども楽しみたいというような、非常にはっきりとした意欲的な「欲求」を持っているということである。

ところが、「睡眠欲」というのは、例えば、用をもよおして、仕方なくトイレに行くようなところがあり、そこには、これという選択の余地などあまりなく、いわゆる「睡魔」に襲われた時には、その「睡魔」にただただ身をまかせるしかないものである。それは、いわゆる「欲」というよりは、はるかに「生理的欲求」であり、もちろん、「食欲」も「性欲」も同じように「生理的欲求」ではあるが、ただ、「睡眠欲」や「休息欲」というのは、自分のからだをひたすら休ませたいというだけの「欲（欲求）」であり、それは、いわば「植物的欲求」であり、一方、「食欲」や「性欲」というのは、いろいろなものをどこまでも貪欲にむさぼりたいという＜他に向かっての「欲（欲求）」＞であり、それは、むしろ「動物的欲求」であるということである。そして、われわれ人間にとって、そのような傾向が強いのは、いわゆる「睡眠欲」よりは、むしろ＜遙かに「物欲（金銭欲）」＞のほうであり、その「物欲（金銭欲）」というのは、まさに実にいろいろなものやできるだけ多くのもの（或いは「お金」）などを、どこまでも貪欲にむさぼりたいという非常にはっきりとした「欲（欲求）」になるということである。

それに加えて、「物欲（金銭欲）」というのは、ほかの動物たちには、基本的にはなく、われわれ人間に至って、初めて生じてきた「欲（欲求）」であり、それゆえ、動物の「三大欲」というのは、まさに「食欲」と「性欲」それに「睡眠欲」であるが、一方、われわれ人間の「三大欲」というのは、むしろ「食欲」と「性欲」それに「物欲（金銭欲）」としたほうが、はるかにわれわれ人間の「実情」に合ったものになるということである。

人間の場合

人間の「三大欲」 （意欲的な「欲」）		
①　「食欲」	②　「性欲」	③　「物欲（金銭欲）」
いろいろな料理を食べてみたいという欲求とともに、よりおいしいものを愛し求めることにもなる。	子孫保存欲だけではなく、いろいろな人との恋愛や性交渉その他などを楽しみたいという欲求にもなる。	実にいろいろなものをほしがるものであるが、そのためにはどうしてもお金が必要不可欠になるということである。

（人間的欲求）

「第二欲求」

（人間的欲求）

その上に、

から

動物の「三大欲」 （生理的な欲求） （人間も含める）		
①　「食欲」	②　「性欲」	③　「睡眠欲」
基本的には、「個体維持」から生じる欲求であり、そのために絶えず摂取し続けなければならない。	基本的には、「子孫保存欲」から生じる欲求であり、そのために動物たちは命をかけてまで取り組むことになる。	基本的には、身体が疲れてくれば、「休息欲」や「睡眠欲」などは、自然と生じてくるものである。

（動物的欲求）

「第一欲求」

（動物的欲求）

《　『交流欲』　》

	交流対象	内容
人間界	人間と人間との交流	人間と人間との交流こそ、最も深く交流でき得る、最も深く理解し合える、最も深く共感・共鳴・感動でき得る対象である。――なぜなら、われわれ人間の「心」と「心」とは最も同類（同質）なものであり、それゆえ、最も同類（同質）的な「ものの見方、とらえ方、考え方、あるいは感じ方」をしているからである。
	人間と社会との交流	例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療（保健）、また、農業、林業、漁業、水産養殖業、鉱業、建設業，製造業（工業）、卸売・小売業、金融・保険業、運輸・通信業、不動産業、電気・ガス・水道・熱供給業、サービス業、公務、事件、その他、この世における実に様々な活動や出来事。
	人間と人工物との交流	われわれ人間がこの世に生み出したものとの交流であるが、それはもう実に膨大かつ多種多様なものに満ちあふれているわけである。例えば、衣服類、履物類、家具（寝具）類、乗物類、様々な機械類、建築物、電化製品類、書籍類、おもちゃ・ゲーム類、食料品類、その他のありとあらゆる人工物との交流である。
動植物界	人間と動物との交流	人間と動物との交流であるが、それは、最も下等な原生動物から始まり、海綿動物、腔腸動物、軟体動物、環形動物、節足動物（昆虫類）、棘皮動物、また、脊椎動物としては、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、そして、哺乳類（霊長類）という順で、より深く交流できるようになっていくのが、ふつうではないかと思う。
	人間と植物との交流	人間と植物との交流も基本的にはまったく同じことであり、それは、コケ植物、シダ植物、裸子植物、そして、被子植物という順で、次第に交流しやすくなっていくのがふつうである。また、植物は、「生命体」であるので、こちらから愛情を降りそそげば、それに「何らかの形」で応えてくれることになるかと思う。
	人間と古生物との交流	この地球上にかつて生息していた生物との交流であるが、それは、多くの場合、化石として残されていて、それにわれわれ人間の想像力などが加わっての交流になるかと思う。例えば、三葉虫、アンモナイト、始祖鳥、巨大な恐竜の化石、マンモス、その他。そして、学問的には「古生物学」の領域に入るものである。
自然界	人間と自然との交流	地球上の自然と人間との交流であるが、その場合、その人が「自然」に対してどのくらい想いを寄せているかにほぼ正比例して、それだけより深く交流でき得るようになるかと思う。例えば、山、海、河川、湖沼、様々な地形、天候（気象）、渓谷、砂漠、また、月、夜空（星空）、太陽、春夏秋冬の風景、その他。
	人間と自然物との交流	この地球上に存在する自然界の物質との交流である。例えば、火、土、水、空気、また、砂、石、岩石、日光、様々な金属、地表、その他。――もちろん、自然界には動物も植物も一緒に存在しているとともに、自然と「動植物」とは切っても切れない関係にはあるが、ここでは便宜上、分けて考えているわけである。

例えば、誰の「心の中」にもあれがほしい、これがほしいという思いが生じてくるものだが、それが、まさに「物欲」である。そして、その欲しいと思っているものが手に入れば、その人のそれがほしいという「物欲」は、一応満たされることになるかと思う。つまり、「物欲」というのは、その人のほしいと思っているものが手に入れば、それで一応満たされるとともに、それに対する「物欲」は、それで一応終わることになるわけである。それでは、その「物欲」の後にはいったい何がやって来るのかと問えば、それこそ、まさにその「対象」とどのくらい深く交わるかの、いわゆる『交流段階』に入るわけである。そして、その「対象」とどのくらい深く交わるかによって、それぞれ「交流１」、「交流２」、そして、「交流３」に分かれることになるわけである。

例えば、ある人が「車」がほしいと思えば、それが、まさにその人の「物欲」であり、そして、その「物欲」は、その人がほしいと思っているその「車」を購入することによって、一応満たされることになる。そのあとは、その人がその「車」とどのくらい深く交わるかによって、それぞれ「交流１」、「交流２」、そして、「交流３」に分かれることになるわけだ。つまり、その「車」とごくふつうに交わるのが、いわば「交流１」段階であり、また、その「車」とかなり深く交わるのが、「交流２」段階であり、そして、その「車」とどこまでも深く交わるのが、まさに「交流３」段階になるわけである。そして、その対象との「交流（関わり）」が深まれば深まるほど、その対象に対する「親しみや愛着」なども、それだけ深まっていくことになるということである。

あれがほしい、これがほしい
という段階。
（「物欲」段階　）

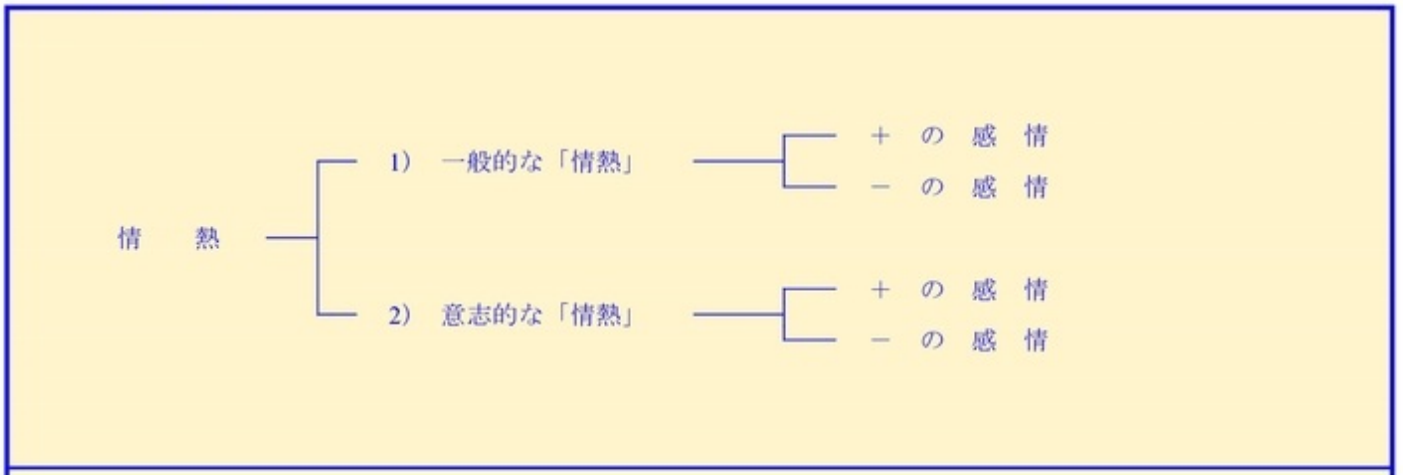
その対象とどのくらい深く交わるかによって、

「交流１」段階　ふつうに交わる段階。

「交流２」段階　かなり深く交わる段階。

「交流３」段階　どこまでも深く交わる段階。
（ふつう「愛着」が生じる。）

「情熱」について



「情熱」について　……　「心的エネルギー」の高まりであるとともに、より激しく燃え上がった状態である。

イ）　一般的な「情熱」

＋の情熱	例えば、われわれ人間が積極的に活動（行動）するためには、どうしても「やる気、意欲、意気込み、その他」などの心的エネルギーの高まりが必要であり、その「心的エネルギー」の高まりが、まさに「情熱」となって、その人をして何らかの積極的な活動（行動）へとかりたてるものである。そのなかで、一般的な「情熱」というのは、われわれ人間がふつう一般的に燃やす「情熱」のことであり、それによって、「仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他」などを積極的に行なうことができるわけだが、ただ、それは、その時々に生じてはやがて消えていくものであり、それゆえ、いわゆる「意志的な情熱」のように比較的長い期間にわたって持続するようなものとは、基本的に違うものである。
－の情熱	その時々の「欲望や感情」などに振りまわされて、様々な「不正的な行為」などをはじめ、相手を怒鳴ったり、なぐったり、いじめたり、からかったり、おどしたり、また、万引きや放火をしたり、わいせつ的な行為をしたり、あるいは動植物や物などを故意に傷つけたり、こわしたり、その他、他人やその他の対象に対して何らかの不正的な行為や迷惑などをかけるようなことを面白がって行なうような情熱である。そのように、どちらかと言えば、－の方向に向かって積極的に行動するものではあるが、いわゆる意志的な「一の情熱」のような「計画性」は、それほどはなく、その時々の「欲望や感情」などに振りまわされた「行動」（言動）であることが多いということである。

ㅁ）　意志的な「情熱」	
＋　の　情　熱	それは、何かをやり遂げようとする意志的な「心の働き」であり、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療（保健）、また、農業、林業、漁業、水産養殖業、鉱業、建設業、製造業（工業）、卸売・小売業、金融・保険業、運輸・通信業、不動産業、電気・ガス・水道・熱供給業、サービス業、公務、その他、何であれ、なにか「より生産的な、より建設的な、より創造的な」方向に向かって、あるいは、何か真に価値ある、何か真に意義ある、あるいは何か真に優れた「発明、発見、創造、業績、行動、その他」などが生み出されるような方向に向かって、その人の内心で持続的に燃え続ける＜意志的な「心の熱情」＞である。そして、何らをやり遂げるためには、どうしても「長い時間と忍耐とたゆまぬ努力と持続的なエネルギー」とが必要不可欠になって来るわけであるが、それらを支えるのが、まさに＜意志的な「心の情熱」＞ということになるということである。 それでは、その＜意志的な「＋の情熱」＞は、一体、どこから供給されるのだろうか。それはもちろん、その人の「知・情・意・生理（本能）、その他」、それらすべてをひっくるめて激しく燃え上がる「心的エネルギーの炎」からであるが、より深い「供給源」としては、われわれ人間の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）が成熟して、その人の最も奥深いところで太陽のごとく生き生きと躍動している「母体のようなもの」（内に「善のＤＮＡ」を宿す）からであり、それは、その人をして何らかの社会的な活動へとかり立てる傾向があり、その結果、時には何か真に価値ある、何か真に意義ある、あるいは何か真に優れた「発明、発見、創造、業績、行動、その他」などを生み出させることにもなるということである。そのように＜意志的な「＋の情熱」＞というのは、「より生産的な、より建設的な、より創造的な」方向に向かって、持続的に燃え続ける心的エネルギーの「炎」（つまり「高まり」）である、ということである。
－　の　情　熱	それは、何かをやり遂げようとする意志的な「心の働き」であるが、その方向が、いわゆる「＋の情熱」とは違って、まさに「より破壊的な、より破滅的な、そして、より退廃的な」方向へと向かっていくものであり、その最大のものが、いわゆる「戦争」であるが、その次に来るものとして、様々な「犯罪的な行為」があり、例えば、計画的な「殺人、強盗、窃盗、傷害、暴行、誘拐、汚職（贈収賄）、詐欺、恐喝、密輸、横領、放火、万引、わいせつ行為、強姦（輪姦）、薬物乱用、テロ活動、その他」、何であれ、向かっていく方向が、どちらかと言えば、－の方向に向かっていく「情熱」であるということである。 ただ、人によっては、国や国民を守るための「戦争」であれば、それは、「－の情熱」ではなく、むしろ「＋の情熱」ではないかと反論する人も多いかと思う。もちろん、国や国民を守ろうとすることは、「＋の情熱」であることに間違いはないが、ただ、「戦争」そのものというのは、どのような「大義名分」のもとで行なわれようとも、いわゆる「人殺しと破壊活動」であるしかなく、その「行為」自体は、どうしても「－の方向」に向かっていくものである。つまり、国や国民を守ろうとする「＋の思い」と、そうするためには、どうしても「人殺しや破壊活動」を行なわなければならないという、まさに「－の行為」が不可避であるところに、「戦争」というものの最大の「悲劇性」があるのであり、たとえその「戦争」に勝っても負けても、極めて「悲惨な傷跡」を残すことになるわけである。それゆえ、「戦争」という最悪の事態にならないように、日頃から、国際関係の「友好や交流」などをはかる努力を永続的に続けることこそは、まさに「＋の情熱」になるということである。

恐怖と勇気

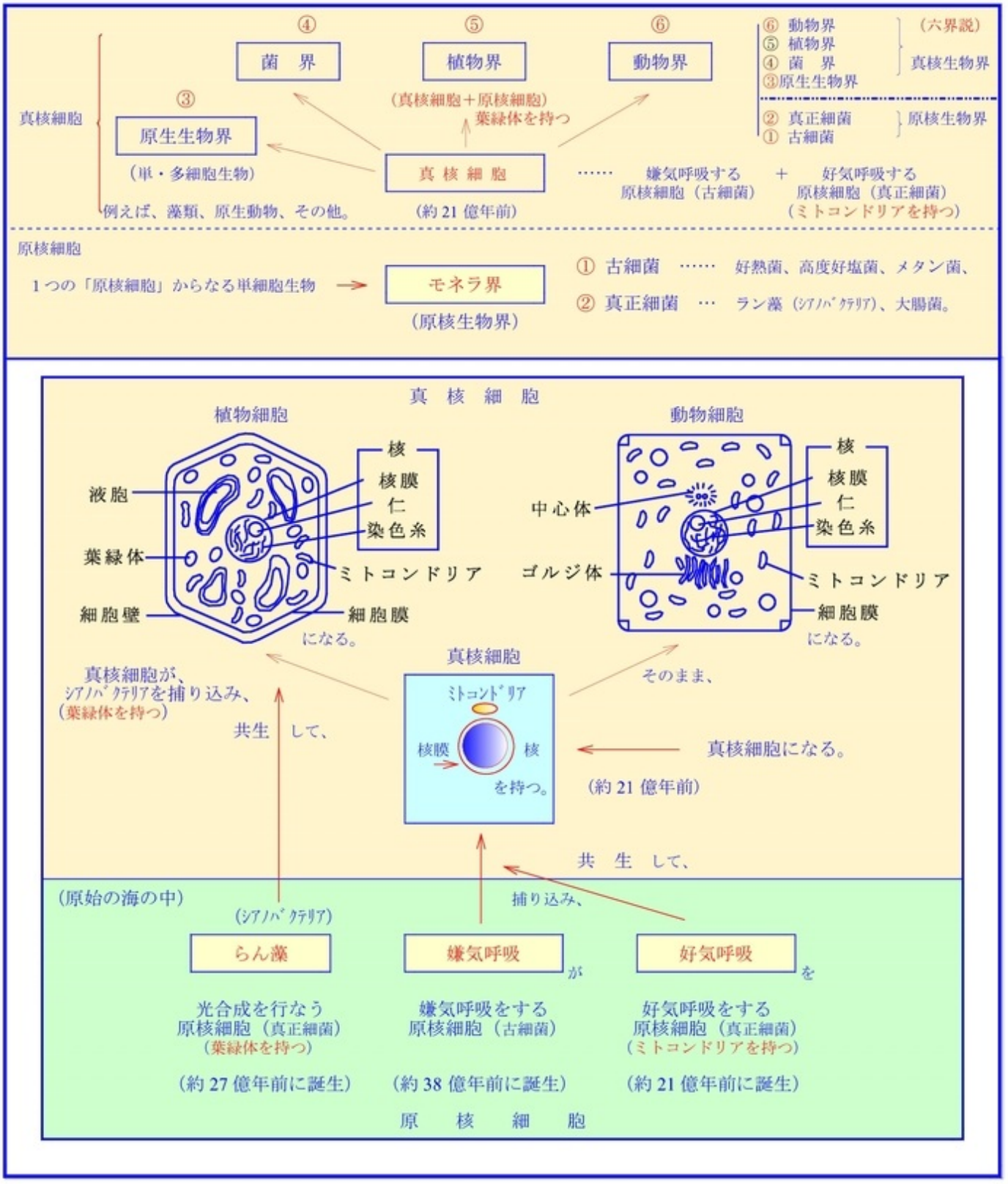
恐怖心の種類

	種　類	内　　容	
1)	生得的恐怖心	生まれつき持ち合わせている、個体維持から生じてくる本能的な恐怖心。	恐怖 1
2)	学習的恐怖心 1 （知識的恐怖心）	人の話やメディアなどから得た「様々な知識」から生じてくる恐怖心。 （人なりメディアを通して、その怖さ、恐ろしさなどをよく知っている。）	恐怖 2
3)	学習的恐怖心 2 （経験的恐怖心）	過去に恐ろしい、怖い「体験・経験」をしたことから生じてくる恐怖心。 （わが身を持って、その怖さ、恐ろしさなどをよく熟知している。）	恐怖 3
4)	想像的恐怖心	「頭の中」でいろいろあれこれ想像することによって生じてくる恐怖心	恐怖 4
5)	暗示的恐怖心	例えば、宗教、占い、迷信、異常現象、その他などから生じてくる恐怖心。	恐怖 5
6)	想定外恐怖心	あり得ないと思っていたようなことを実際に見聞きした時に生じてくる恐怖心。	恐怖 6

学習的恐怖心	
学習的恐怖心 1 （知識的恐怖心）	学習的恐怖心 2 （経験的恐怖心）
知識として知っている。	身をもって知っている。
例えば、戦争の恐ろしさ、飛行機事故の恐ろしさ、交通事故の恐ろしさ、様々な病気の恐ろしさ、大地震の恐ろしさ、台風（暴風雨）の恐ろしさ、洪水（土砂崩れ）等の恐ろしさ、豪雪（雪崩）等の恐ろしさ、落雷の恐ろしさ、火事（火災）の恐ろしさ、ガス爆発の恐ろしさ、差別（偏見）等の恐ろしさ、様々な犯罪等の恐ろしさ、暴力（虐待）等の恐ろしさ、貧困・飢餓等の恐ろしさ、大不況（倒産）等の恐ろしさ、リストラ（失業）等の恐ろしさ、生活苦（借金苦）の恐ろしさ、食中毒等の恐ろしさ、薬物乱用等の恐ろしさ、騒乱状態の恐ろしさ、パニック状態の恐ろしさ、無法状態の恐ろしさ、その他、等々。	

恐怖と勇気

例えば、「恐怖心」というのは本来、「自己防衛的な働き」であり、それゆえ、より「本能的な感情」であるのに対して、「勇気」というのは、その「自己防衛的な働き」である感情に敢えて逆らってまでも、すなわち、何らかの「禍」（被害、損害、不幸、その他）をこうむる恐れがあるにもかかわらず、敢えてその方向に向かって「行動（言動）」していくということであり、それゆえ、「勇気」というのは本来、＜より「意志的なもの」＞になるかと思う。そのように「恐怖心」と「勇気」とはまったく別々のものではなく、むしろ極めて深い関係にあるものであり、そのために、われわれ人間の「心の中」では、この二つの「感情」がいつも＜お互いに「せめぎ合い」を行なっている＞ものである。

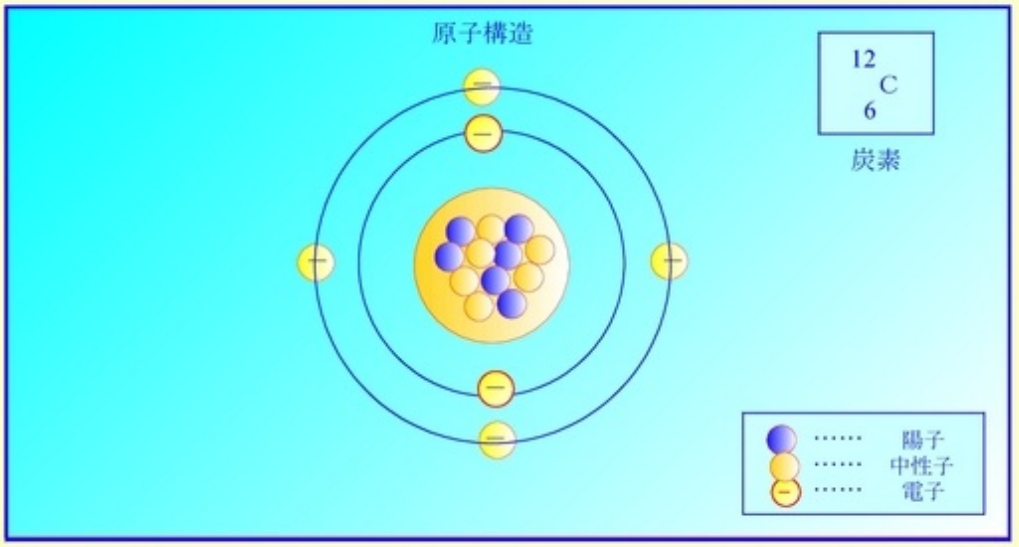

④
菌　界
⑤
植物界
⑥
動物界
⑥ 動物界
⑤ 植物界
④ 菌　界
③原生生物界
（六界説）
真核生物界
② 真正細菌
① 古細菌
原核生物界
真核細胞
③
原生生物界
（単・多細胞生物）
例えば、藻類、原生動物、その他。
（真核細胞＋原核細胞）
葉緑体を持つ
真 核 細 胞
（約 21 億年前）
……　嫌気呼吸する
原核細胞（古細菌）
＋　好気呼吸する
原核細胞（真正細菌）
（ミトコンドリアを持つ）
原核細胞
1 つの「原核細胞」からなる単細胞生物
モネラ界
（原核生物界）
① 古細菌　……　好熱菌、高度好塩菌、メタン菌、
② 真正細菌　…　ラン藻（ｼｱﾉﾊﾞｸﾃﾘｱ）、大腸菌。
真　核　細　胞
植物細胞
液胞
葉緑体
細胞壁
核
核膜
仁
染色糸
ミトコンドリア
細胞膜
になる。
動物細胞
中心体
ゴルジ体
核
核膜
仁
染色糸
ミトコンドリア
細胞膜
になる。
真核細胞
ミトコンドリア
核膜
核
を持つ。
真核細胞が、
ｼｱﾉﾊﾞｸﾃﾘｱを捕り込み、
（葉緑体を持つ）
共生　して、
そのまま、
真核細胞になる。
（約 21 億年前）
共　生　して、
（原始の海の中）
（ｼｱﾉﾊﾞｸﾃﾘｱ）
捕り込み、
らん藻
嫌気呼吸
が
好気呼吸
を
光合成を行なう
原核細胞（真正細菌）
（葉緑体を持つ）
嫌気呼吸をする
原核細胞（古細菌）
好気呼吸をする
原核細胞（真正細菌）
（ミトコンドリアを持つ）
（約 27 億年前に誕生）
（約 38 億年前に誕生）
（約 21 億年前に誕生）
原　核　細　胞

物質は、いくつかの原子が結びついてできたものである。そして、
その原子は、原子核とそのまわりをまわっている電子からなるものである。

原子　＝　原子核　＋　そのまわりをまわっている電子

例えば、炭素（C）であれば、つぎのようになるかと思う。

炭　素



原子核は、「陽子」と「中性子」からなるものである。そして、その「陽子」と「中性子」とを結びつけているものこそは、いわゆる「パイ中間子」ということになるということである。

原子核　＝　陽子　＋　中性子

（パイ中間子）

原子	＝	原子核	＋	まわりをまわっている電子	
炭素（C）	＝	「陽子＋中性子」 （6個）＋（6個）	＋	まわりをまわっている電子 （6個）	
		質量数 ＝ 6 ＋ 6 ＝ 12			

炭素（C）

質量数 → 12
原子番号 → 6
C
↓ 原子記号

様々な「作品の表紙」と「関連の図形」の一覧表

http://p.booklog.jp/book/119690

著者：如月翔悟（paidon）
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/paidon/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/119690

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト